

超人間X号

海野十三

青空文庫

大^{だい}雷^{らい}雲^{うん}

ねずみ色の雲が、ついに動きだした。

すごいな声をあげて、つめたい風が、吹きつけてきた。

ぐんぐんひろがる雲。

万年雪をいただいた連山の峰をめがけて、どどどッとおしよせてくる。

ぴかり。

黒雲の中、雷^{らい}光^{こう}が走る。青い竜がのたうちまわっているよう

だ。

雷雲はのびて、今や、最高峰の三角岳を、一のみにしそうだ。おりしも雷鳴らいめいがおこつて、天地もくずれるほどのひびきが、山々を、谷々をゆりうごかす。三角岳の頂上に建っている谷博たにはか士の研究所の塔とうの上に、ぴかぴかと火柱ひばしらが立った。

つづいて、ごうごうと大雷鳴が、この山岳地帯の空気をひきさく。

黒雲はついに、全連峰をのみ、大烈風だうれつふうは万年雪をひらひらと吹きとばし、山ばなから岩石をもぎとつた。

このとき、谷博士は、研究所の塔の下部にある広い実験室のまんな中に、仁王立におうだちちになって、気がおかしくなったように叫んでい

る。

「雷らいよ、もつと落ちよ。もつと鳴れ。稲妻いなずまよ。もつとはげしく光れ。この塔を、電撃でうちこわしてもいいぞ。もつとはげしく、もつと強く、この塔に落ちかかれ」

博士は、腕をふり、怒号どごうし、塔を見あげ、それから目を転じて、自分の前においてある大きなガラスの箱の中を見すえる。

その大きなガラスの箱は、すごく大きな絶縁ぜつえん碍子がいしの台の上にのっている。箱の中には、やはりガラスでできた架台かだいがあつて、その上に、やはりガラスの大皿がのっている。そしてその大皿の中には、ひとつかみの、ぶよぶよした灰色の塊かたまりがのっている。どこか人間の脳髓に似ている。海綿を灰色に染め、そしてもつとぶ

よぶよしたようにも見える。なんともいえない気味のわるい塊である。

しかもその灰色のぶよぶよした塊は、周期的に、ふくれたり、縮んだりしているのであった。まるでそれ自身が、一つの生物であつて、しずかに呼吸をしているように見えた。

いったいその気味のわるい塊は、何者であつたろうか。

ガラスの箱のまん中に、その気味のわるい塊があり、その塊を左右からはさむようにして、大きな銀の盤のようなものが直立して、この塊を包圍ほういしていた。その銀盤は、よく見ると、内がわの曲面いっぱいに、たくさんの光った針が生えていた。

その針と反対のがわには、銀色の棒があつて、これが左右とも

ガラス箱の外につきでていた。そして、ガラス箱の真上十メートルばかりの天井の下の空中にぶらさがっている二つの大きな火^{ひばな}花間^{かんげき}隙^{きゆう}の球と、それぞれ針金によつて、つながれてあつた。

この大じかけの装置こそ、谷博士が自分の一生を賭^かけ、すべての財産をかたむけ、三十年間にわたつて研究をつづけている人造生物に^{れいこん}靈魂をあたえる装置であつた。そしてその装置を使つて最後に靈魂をあたえるには、三千万ボルトの高圧電気を、外からこの装置に供給してやらねばならなかつた。

ところが、三千万ボルトと口ではかんたんにいえるが、ほんとに三千万ボルトの高圧電気を作ることはむずかしかつた。どんな発電機も変圧器も真空管も、この高圧電気を出す力はなかつた。

そこで最後のたのみは、雷を利用することだった。

雷は、空中に発生する高圧電気であつて、だいたい一千万ボルト程度のものが多い。しかし、時には三千万ボルトを越える高圧のものも発生すると思われる。そこで谷博士は、その偶然の大雷の高圧電気を利用する計画をたてて、この三角岳の頂上に、研究所を建てたのであつた。

博士は、そのまえに、人造生物を用意した。これは、博士が研究の結果、特別につくった人造細胞をよせあつめ、それを特別な配列にしてここに生物を作りあげたものであつた。その生物は、たしかに生きていた。例のガラスの箱の中においた、ガラスの皿の上にうごめいているのが、その人造生物だった。たしかにその

生物は呼吸をしている。また心臓と同じはたらきを持った内臓によつて、血液を全身へ循環じゅんかんさせている。

まだそのほかに、人間や他の動物にはない特殊な臓器をもっていた。それは博士が「電臓でんぞう」と名づけているものである。この電臓は、その生物の体内にあつて、強烈なる電気を発生し、またその電気を体内で放電させる。つまり特殊の電気をあつかう内臓なのだ。

ところが、この電臓を作ることではできたが、しかし働いてくれないのだ。これを働かすには、さっきのべたとおり三千万ボルトの高圧を、電臓の中の二点間におすことが必要なのである。そしてそれが、この人造生物にたいする最後の仕上げなのであつた。

「もし、それに成功して、電臓が動きだしたら、えらいことになるぞ」

と、谷博士は、大きな希望によるこびの色を浮かべるとともに、一面には、測り知られない不安におびやかされて、ときどき眉の^{まゆ}間にしわをよせるのだった。

それは、もし、この電臓が働きだしたら、この人造生物は、一つの靈魂をしつかりと持つばかりではなく、その智能の力は人間よりもずっとすぐれた程度になるからだ。つまり、あの人造生物の電臓が働きだしたら、人間よりもえらい生物が、ここにできあがることになるのだ。

超人X号！
ちようじん

これこそ、谷博士が、試作生物にあたえた名まえであつた。

「超人X号」は、今ちようど氣をうしなつて人事不省じんじふせいになつてい
るようなものであつた。もしこの超人に活かつをいれて、彼をさます
ことができたとしたら、「超人X号」は、ここに始めてこの世に
誕生するわけになる。

もしこの超人を、三千万ボルトの電氣によつて覚醒かくせいさせるこ
とができなかつたら、それで谷博士の試作人造生物X号は、つい
に失敗の作となるわけだ。

はたして生まれるか「超人X号」！

それとも、そのようなおそるべき生物は、ついに闇から闇へ葬^{ほうむ}られるか？

その、どっちにきまるか。

頭上にごうごうどすんどすんと天地をゆすぶる雷鳴を聞きながら、腕組みをした悪鬼^{あつき}のごとき形^{ぎようそう}相の谷博士が、まばたきもせず、ガラス箱の中の人造生物をみつめている光景のすさまじさ。さて、これからどうなるか。

研究塔下の怪奇

これまでに、谷博士は、このような実験に、たびたび失敗している。

七、八、九の三カ月は、とくに雷の多く来る季節である。しかしこの雷は、いつもこの研究所の塔の上を通って落雷してくれるとはかぎらない。また、これがおあつらえ向きに、研究所の上を通ってくれるときでも、それが博士の熱望している三千万ボルトを越す超高圧の雷でない場合ばかりであった。それで、これまでの実験はことごとく失敗に終わったのだ。

「この種の実験は、気ながに待たなくてはならない。急ぐな。あせるな」

博士は、自分自身に、そういつて聞かせるのであった。それにしても、待つことのあまりに長すぎるため、博士はだんだんあせってくるのだった。

「きようこそは。きようこそは。三千万ボルトを越える雷よ。わが塔上に落ちよ」

博士のとなえることばが、呪文じゆもんのようにひびく。

もし待望の三千万ボルトを越える超高压の空中電気がこの塔に落ちたら、この研究所の大広間の天井につつてある二つの大きな球形きゆうけいの放電間隙ほうでんかんげきに、ぴちりと火花がとぶはずであった。

雷鳴は、いよいよはげしくなる。

塔は、大地震にあつたように揺れる。

そのときだった。

ぴちん。ぴちぴちん。

空気を破るするどい音。ああ、ついに火花間隙に電光がとんだ。いよいよ超高圧の雷雲が、塔の上へおしよせたのだ。

「今だ」

博士は、足もとに出ているペタル式の開閉器を力いっぱい踏みつけた。

と、その瞬間に、ガラス箱の中が、紫の色目もあざやかな光^{こうぼ}芒^うでみたされた。皿の上の人造生物を、左右両脇より包んでい
るように見える曲^{きよくめんばん}面盤^{めんばん}の無数の針の先からは、ちかちかと目に
痛いほどの輝いた細い光りが出て、それが上下左右にふるえな

がら、皿の上の人造生物をつきさすように見えた。

すると皿の上の例のぶよぶよした人造生物は、ぷうツとふくらみはじめた。みるみる球のよう^{きゅう}にふくれあがり、そしてそれが両がわの曲面盤のとがった針にふれたかと思えたとき、とつぜんぴかりと一^{いちだいせんこう}大閃光が出て、この大広間を太陽のそばに追いやったほどの明かるさ、まぶしさに照らしつけた。

「あッ」

博士は、思わず両手で目を蔽^{おお}ったが、それはもうまにあわなかった。博士は一瞬間に目が見えなくなってしまった。そして異様^{いよう}な痛みが博士の全長を包んだ。博士は、苦痛のうめき声とともに、その場にどんと倒れた。

そのあとに、ものすごい破壊音はかいおんがつづいた。破壊音のするたびに、何物かの破片はへんが、博士のところへとんできた。その合間に、砂のようなものが、滝のように降ってきた。博士ははげしい苦痛に、やつとたえながら、それらのことをおぼえていた。

だが、それはながくつづかなかった。

まもなく、第二のかなりの大きな爆発みたいなことが室内におこり、博士のからだは嵐の中の紙片かみきれのように吹きとばされ、はてはどすんと何物かに突きあたり、そのときに頭のうしろをうちつけ、うんと一声発して、気絶きぜつしてしまった。

そのあとのことを、谷博士は知ることができなかった。

博士のほかに、人が住んでいないこの研究所は、それから無人

のまま放置された。しかし博士の気絶のあと、この構内ではいろいろなものが動きだして、奇妙な光景をあらわしたのであった。

この大広間の二回にわたる爆発により、室内中には黄いろいろ煙がもうもうとたちこめていて、その中ではすべての物の形を見わけることができなかった。

だが、その黄いろいろ煙の中で、いろいろなものが動いていることは、怪しい音響によっても察することができたし、またときどき煙の中から異様なものが姿をあらわすので、それとわかった。その中でも、もつとも奇怪をきわめたものは、何者かが発する声であった。それはだれでも一度聞いたら、もう永遠に忘れることがないだろうと思われるほどの、気味のわるいしゃがれ声であつ

た。それは、死体となつて一度土中にうずめられた人間が、その後になつてとつぜん生きかえり、自分で棺かん桶おけだけはやぶりはしたものの、重い墓石をもちあげかねて、泣きうらんでいるような、それはそれはいやな声だった。

「ああ、寒い、寒い。寒くて、死にそうだ」

そのいやなしゃがれ声がつぶやいた。

しゃがれ声の主

「おお寒む。おお寒む。どこかはいるところがないだろうか」

しやがれたうえに、ぶるぶるとふるえている声だった。一体だれがしやべっているのであろうか。

「おお、見つけたぞ。あれがいい。おあつらえむきだ」

その怪しい声が、ほっと安心の吐息といきをもらした。

しばらくすると、煙の中で、かんかんと、金属をたたくような音がし、それから次には、ぎりぎりごしごしと、金属をひき切るような音がした。

「だめだ。はいれやしない」

大きな音がして、煙の中から、鋼鉄こうてつせい製の首がとんできて、壁にあたり、がらがらところげまわった。そのあとから、またもう

一つ、同じような鋼鉄製の首がとんできて、それは壁のやぶれ穴から、外へとびだしていつて、外でにぎやかな音をたてた。

「一つぐらいは、はいりこめるのがあつてもいいのに……」

怪しい声は、ぶつぶつ不平をならべたてた。

と、また煙の中から、黒^{くろ}光^{びか}りのするものがとんできた。鋼鉄

の腕だった。鋼鉄の足だった。それから鋼鉄の胴^{どう}中^{なか}だった。そ

れらのものは、ひきつづいて、ぽんぽん放りだされた。壁にあた

つてはねかえるのがある。天^{てん}井^{じょう}にぶつかつて、また下へどす

んと落ちるものがある。つづいてまた、鋼鉄の首が、砲弾のよう

にとび、ごろごろところげまわる。

「あ、あつた。これなら、はいれるぞ。ありがたい……」

しやがれ声が、ほんとにうれしそうにいった。

がっちゃん、がっちゃん、がっちゃん。

煙の中で、町の鍛冶屋かじやのような音が聞こえはじめた。かーん、

かーんと鉾びょうをうつような音もする。つづいて、ぎりぎりぎり、ぎ

りぎりぎり、ワイヤ綱づなが歯はぎしりをかむような音もする。

そうこうするうちに、煙がかなりうすくなつて、音をたてているものの形が、おぼろげながら分かるようになった。それは室内の煙が壁の大きな穴から、だんだんと外に出ていったためである。煙の中に、大きく動いている、人間の形をした者があつた。

それは谷博士ではなかった。博士は向こうの壁ぎわに、長く伸びて床の上に倒れていて、すこしも動かない。

煙の中で動いている者は、博士よりもずっと大きな体格をもっていた。大きな円筒形えんとうけいの頭、がっちりした幅の広い肩、煙突えんとつを二つに折ったような腕——それが、のっそりと煙の中からあらわれたところを見ると、なんとそれはグロテスクな恰好かつこうをしたロボット機械人間であつた。

鋼鉄製の機械人間が、のっそりと煙をかきわけて、陽ひのさしこむ壁の大穴のところまで出て来たのだ。

いつのまにか雷雲はさり、けろりかと午後一時の陽がさしこんでいる。

室内は、ますます明かるく照らしだされた。室内は、おそろしく乱れている。足の踏み場もないほど、こわれた物の破片で、い

っぱいであつた。

天井に、大きな放電間隙ほうでんかんげきの球が二つ、前と同じ姿でぶらさがっているが、それから下へ出ていた二本の針金は、どこかへ吹きとんでしまつてない。

その下に、六本のいかめしいプッシング碍子がいしの台の上ののつていたガラスの箱は、碍子を残しただけで、あとかたもない。

曲面盤きよくめんばんもなければ、ガラスの皿もない。そのガラスの皿の上ののつていたぶよぶよした灰色の塊かたまり——谷博士じんぞの作った「人造生物うせいぶつ」も、どこへ行つたか、見えなかった。そしてあたり

一面に、ガラスや金属やコンクリートの破片が乱れ散つていた。「ああ、あたたかくなつたと思つたら、こんどは非常にねむくな

った。ねむい、ねむい」

しゃがれた声が、壁ぎわから聞こえて来た。博士がいったのではない。

「ああ、ねむい。しばらくねむることにしよう。どこか、ねむるのに、いい場所はないだろうか」

壁の穴のそばに立っていたグロテスクな機械人間ロボットが、がっちゃん、がっちゃんと動きだした。するとその中から、ねむがつているしやがれ声が聞こえたのであった。

それは、あたかも、機械人間が魂たましいをもって生きていて、そのようにつぶやいているように見えた。

怪しい機械人間だ。

がんらい、機械人間というものは、人間からの命令を受けて、ごくかんたんな機械的な仕事をするだけの人間の形をした機械だった。この場合のように、人間と同じに、感想をのべたり、生活上のことを希望したりするのは、ふつうでは、ありえないことだった。

「どこか、いい場所がありそうなものだ。どれ、探してみようか」
怪しい機械人間は、そういいながら、がっちゃん、がっちゃんと金属の太い足をひきずって、室の一隅^{いちぐう}にあった階段を、上へと登っていった。

博士よみがえる

それから一時間ばかりたつた後のことであつた。

登山姿に身をかためた五人の少年が、三角岳さんかくだけの頂上へのぼりついた。

「やあ、すごい、すごい」

「すごいねえ、戸山君とやま。やつぱり、塔はくずれているよ。ほら建物もあんなに大穴があいているよ」

「ほんとだ。あのとき、塔も建物も、火の柱に包まれてしまったからね、もつとひどくやられたんだろうと思つたが、ここまで来

てみると、それほどでもないね」

「いや、かなりひどく破壊はかいしているよ。塔なんか、半分ぐらい、どこかへとんじまっているよ。それに建物が、めっちゃめっちゃだ。ほら、こつちがわにも大穴があいているよ。落雷と同時に、中で爆発をおこしたのかもしれない」

「中に住んでいる人は、どうしたろうね」

「どうなったかなあ、塔や建物がこんなにひどく破壊しているんだから、中に住んでいた人たちは、もちろん死んじまっただろう」「死んじまっただって。そんならたいへんだ。みんなで中へはいって、調べてみようじゃないか。そして、もしかしてだれか生きていたら、その人はきつと重傷をしているよ。ぼくたちの手で、す

ぐ手あてをしてやろうよ」

「うん。それがいい。じゃあ、あの建物の中にはいつてみよう」

「よし。さあ行こう」

五人の少年たちは、研究所のこわれた戸口から、中へはいつていった。

「あつ、たいへんだ。中が、めっちゃめちゃにこわれているよ」

「どうしたんだろうねえ。この建物は、なにをするとところなの」

「なんとか研究所というんだから、なにか研究をするんだろう」

「ここは、有名な谷博士の人工生物研究所だよ。ぼくはおとうさんから聞いて知っているんだ」

戸山という少年がいった。戸山は、この少年団のリーダー格で

あつた。あとの四人の少年もみんな同級生であつた。きょうはい
いお天気であつたので、三角岳登山を試みたのであつたが、途中
で雷に出あい、どうけつ洞穴の中にとびこんで雷鳴らいめいのやむのを待った。
そのうちに雷鳴ははげしくなり、前方に見えるここの塔の上に落
雷したのを見た。

やがて雷雲が行きすぎたので、五人の少年たちは、目的地であ
る三角岳の頂上まで登つて来ようというので、ここまで登つて来
たわけ。するとこの研究所の建物がひどくこわれているので、そ
れにおどろいて、中へはいったわけであつた。

「あ、人がたおれている」

「ええッ」

「あそこだよ。白い実験着を着ている人が、たおれているじやないか。壁のきわだよ」

「ああ、たおれている」

五人の少年たちは、谷博士を見つけた。そばへかけよってみると、博士は顔面や腕に傷をこしらえ、死んだようになっていた。

呼びおこしても、意識がない。戸山は、博士の鼻の穴へ手を近づけた。博士はかすかに呼吸をしているようだ。そこで彼は耳を博士の胸におしつけてみた。博士の心臓はたしかに打っている。しかし微弱びじやくである。

「この人は、気をうしなっているんだよ」

戸山は、結論をつけて、みんなに話した。

「じゃあ、活かつをいれてみようか」

井上少年いのうえがいった。彼は、柔道を習っていて、活の入れかた

を知っていた。

「それよりも、葡萄酒ぶどうしゅをのませた方がいいんじゃないか」

羽黒少年はぐろは救護係きゆうごがかりであつたから、自分がリュックの中に持

つて来ている、氣つけ用の葡萄酒のことをいった。

「氣をうしなっているんだから、活の方がいいよ。氣がついたら、こんどは葡萄酒をのませる順番になる。井上君、ちよつと活をいれてごらん。あとの者は、みんなてつだつて、この人を起こすんだ」

四人の少年が、博士の上半身を起こした。すると井上がうしろ

へまわつて、博士の脊骨せぼねをかぞえたうえで、急所をどんと突いた。だめだった。博士は、あいかわらず、ぐったりしたままだ。

「だめかい」

と、みんなは心配そうに、井上にたずねた。

「まだ、分からない。もう四五へんくりかえしてみよう」

井上は、まだ希望をすててはいなかった。えいッ。またもう一つ活をいれた。

と、うーんと博士はうなつた。そしてにわかに大きな呼吸をはじめた。顔色が、目に見えてよくなつた。顔をしかめる。痛みが博士を苦しめているらしい。

「あ、生きかえつたらしいぞ」

「さあ、葡萄酒の番だ」

「よし、ぼくが、のませてやる」

羽黒は、リュックを背中からおろして、さっそく水筒すいとうの中に入れてゐる葡萄酒をとりだし、ニユウムのコップについて、博士の口の中へ流しこんだ。

博士は、ごほんごほんとむせた。羽黒はもう二はいのませた。
「ああッ、ありがとう。どなたか知らないが、私を介抱かいほうしてくだすって、ありがとう」

博士は元気になって、礼をいった。その博士は、目をあいてゐるが、手さぐりであたまをなでまわす。

「おじさんは、目が見えないのですか」

戸山が、たずねた。

「目が見えない？　そうです。今は目が見えない。さつき実験をやっているとき、目をやられて、見えなくなつたのです。困つた。まつたく困つた」

「おじさんはだれですか」

「私はこの研究所の主人^{あるじ}で、谷です。君たちは少年らしいが、どうしてここへ来ましたか。いや、それよりも、もっと早く知りたい重大なことがある。この部屋は、どうなっていますか。器械や実験台などは、ちゃんとしていますか」

谷博士の質問にたいして、少年たちは気のどくそうに、かわるがわる室内の様子を話してやった。

博士の顔は、赤くなり、青くなりした。眉^{まゆ}の間には、ふかいしわがよった。

「えッ。ガラス箱なんか、どこにも見えませんか。ガラスの皿もですか。その皿の上ののついていた灰色のぶよぶよした海綿^{かいめん}のようなものも見えませんか。よく探してみてください。そのぶよぶよした海綿みたいなものを、どうか見つけてください。それが見つからないと、ああ、たいへんなことになってしまう」

「そんなものは、どこにも見えませんよ」

「ほんとですか。ああ、目が見えたら、もつとよく探すのだが……」

「そのぶよぶよした海綿みたいなものというのは、いったいなん

ですか」

「それは……それは、私が研究してこしらえた、ある大切な標^{ひょう}本^{ほん}なのです」

「標本ですか」

「そうです。その標本は、生きているはずなんだが、ひよつとすると、死んでしまったかもしれない」

「動物ですか」

「さあ、動物といった方がいいかどうか——」

そういつているとき、がちちゃん、がちちゃんと音がして、階段の上からおりて来る者があつた。

少年たちは、その方をふりかえって、思わず「あッ」といって、

逃げ腰になった。

階段をおりて来たのは、ものすごい顔かたちをした機械人間ロボットであつた。

「おや、機械人間が、ひとりでこつちへ歩いて来るぞ。これは奇き妙みょうだ」

盲目の谷博士は、首をかしげた。博士はたくさんの機械人間を、この建物の中で使っていた。それを機械人間何号と呼んでいた。その機械人間たちは、博士が、特別のかんたんなことばをつづりあわせた命令によつてのみ動くのであつた。ところが今、階段から、がちやんがちやんと、機械人間がひとりでおりて来たので、博士は怪あやしんだのだ。

その怪しい機械人間は、なぜひとりでおりて来たか。

盲目の谷博士と、怪しい機械人間は、どんな応対をするであろうか。

この奇怪な山頂の研究所にはいりこんだ五少年は、これからどんな運命をむかえようとするか。

気味のわるいしやがれ声を出す者は、いったい何者であろうか。

少年の協きょうりよく力

がっちゃん、がっちゃん、がっちゃん。異様な顔をした機械人間^{ロボッ}は、階段をおりきると、谷博士と五人の少年がかたまっているところへ、金属音^{きんぞくおん}の足音をひびかせながら近づいた。

少年たちは、目を丸くして、このふしぎな機械人間の運動ぶりを見まもっている。少年たちは、科学雑誌やものがたりで、こういう機械人間のことを読んで知っていて、いつかその本物を見たいとねがっていた。ところが今、はからずもこの研究所の塔の中でお目にかかったものだから、少年たちは、ものめずらしさに機械人間の運動にすいつけられていた。

（すごいなあ！）

（よく動くねえ。人間がからだを動かすのと同じことだ。どんな

しかけになっているのかしらん)

(こういう機械人間を一台買って持っていると、いろいろおもしろいことをやれるんだがなあ)

少年たちの頭の中には、思い思いの感想がわきあがっていた。

ところが谷博士の方は、少年たちのように明かるく機械人間を

ながめてはいなかった。もつとも博士は視力しりよくをうしなっている

ので、見えるはずはなかったが、しかし博士は、見えない目を見

はり、両方の耳たぶに手をあてがって、機械人間の発する足音や、

動きまわる気配けはいに、全身の注意力をあつめて、何事かを知らうと

あせっている様子だった。

博士の顔は蒼白そうはく。ひたいには脂汗あぶらあせがねっとり浮かんでい

る。耳たぶのうしろにかざした博士の手が、ぶるぶるとふるえている。いや、耳たぶもふるえている。博士のからだ全体がふるえている。博士の息は、だんだんにあらくなっていく。唇がわなわなふるえる。

「……たしかに、わしの作った機械人間にちがいない。だが、ふしぎだ。何者がその機械人間を動かしているのか。制^{せいぎ}御台^{ぎだい}のところへ行ってみれば、分かるんだが、ああ、わしは目が見えない」

谷博士は、前に立っている機械人間を、自分の作製したものであると認めたのであった。が、それにつづいて起こった疑問は、目の見えない博士をどんなにいらだたせたかshれない。

博士が、ものをいったので、戸山少年はわれにかえって、博士

のそばに寄りそった。

「この機械人間はおじさんがこしらえたのですか。おじさんはえらい技術者なんですね」

「おお、君。わしのため力を貸してくれんか」

博士は、戸山のほめことばに答えず、急に気がついたように少年にそういつて、手さぐりで少年の肩をつかんだ。

「ああ、いいです。ぼくたち、よろこんでおじさんのために働いていいですよ。そのかわり、あとで、もっとくわしく機械人間ロボットの話をしてください。そしてぼくたちにも、機械人間を貸してください」

「それは、わけないことじゃが——ああ、今はそれどころではな

い。ただ今、わしの目の前においてふしぎなことが起こっている。そのふしぎの正体を急いでつきとめなくてはならない。君——なんとという名まえかね、少年君」

「ぼくは、戸山です」

「おお、戸山君か。戸山君、わしを機械人間の制御台のところへ早くつれていってくれ。おねがいする」

「いいですとも。その制御台というものは、どこにあるのですか」

「この部屋の……この部屋の階段の右手に、奥にひっこんだ戸棚とだながある。そのまん中あたりに立っている横幅よこはば二メートル、高さも二メートルの機械で、正面のパネルは藍あゐいろ色に塗ってある。それが制御台だ」

「ああ、それは、めちやめちやにこわれています。まん中と、そのすこし上とに、砲弾ほうだんがぶつかったほどの大穴があいて、内部の部品や配線がめちやくちやになつて見えます。あんなにこわれていてはとても働きませんね」

「うーん、それはたいへんだ。だれがこわしたのかしら。するといよいよおかしいぞ。機械人間ロボットは、ひとりで上に動きだすはずはないのだ。いや、待てよ。地階ちかいの倉庫そうこに、古い型の制御台が一つしまつてあつた。あれをだれかが使つて、機械人間をあやつっているのかな」

「それなら地階へいってみましようか」

「おお。すぐつれていってくれたまえ。ここから見えるはずの階

段のわきから、地階へおりる階段があるから、それをおりるんだ」

「はい。分かりました。おい羽黒君、井上君。手を貸してくれ。

おじさんを両方から支えてあげるのだ。……おお、よし。おじさん、さあ歩いてください」

「ありがとう」

一同は歩きだした。

がっちゃん、がっちゃん、がっちゃん。

「あ、あの音は……」

博士は、さつと顔色をかえて立ちどまる。

「おじさん。あの機械人間が、ぼくたちのうしろからついて来ますよ」

「うーむ、ふしぎだ。今まで、あれはどこにどうしていたのかしらん」

「ぼくらの前に立って、おじさんの話をじつと聞いていたようですよ」

「なに、わたしたちの話を聞いていたというのか、あの機械人間が……」

博士は途中でことばをのんで、少年たちに腕をとられたまま、
へたへたと尻餅しりもちをついた。

きゆうしき
旧式の制御台

少年たちは、この谷博士が非常に
神経過敏症しんけいかびんしょうにおちいつて
いるのだと思った。

だから少年たちは、博士を左右から抱きあげ、いろいろとはげ
ましてようやく博士を立ちあがらせた。

それから一同は、また歩きだして、地階へのおり口の方へ向か
った。

機械人間は、あいかわらず、やかましい音をたてて一同のうし
ろからくつついて来る。

はじめは、おもしろがっていた少年たちも、なんだか気味がわ

るくなってきた。

博士は、齒をくいしばって、地階へ早くおりたいものと、足を床にひきずりながら進んでいく。見るもいたましい姿だった。

階段をおりていった。

幅のひろい階段は螺旋型らせんけいにぐるぐるまわっている。

地階へおることができる。天井の高い広間がつづいていて、各室は明るく照明されていた。しかし、さっきの爆発は、この地階にもある程度の損害をあたえていた。それは、見とおしのできる通路のところへ、部品や鉄棒てつぼうなどが、乱雑らんざつに散らばっている。それでそれと分かる。

博士が心配すると思つて、少年たちは、壁にぼっかりあいた穴

や、こわれた戸棚とだなを見ても、あまり大きなおどろきの声を出さないことにした。

目の見えない博士のいうとおりに、地階の中をあつちに歩き、こつちに歩きして、ついに探しているものの前に出ることができた。

「ああ、この機械にちがいないです。『遠距離えんきより制御台RC一号』というネーム・プレートがうちつけてありますよ」

戸山が、博士にいった。

「おお、それじゃ、で、どうじゃな、機械はこわれているかね」
「べつにこわれているようにも見えません」

「機械は動いているのかね」

「さあ、どうでしょう。機械が動いているかどうか、どこで見かけるのですか」

「パネルに赤い監視灯かんしとうがついていれば、機械に電気がはいっているのだ。それから計器の針を見て——」

「ちよつと待ってください。監視灯は消えています」

「消えているか。機械の中に、どこかに電灯がついていないかね」
「なんにもついていません。この機械に電気は来てないようですよ。あ！ そのはずです。電源でんげんの線がはずされています」

「ふーん。それではこの旧式の制御台も動いていないのだ。待てよ、わしが来る前に、スイッチを切ったのかもしれない。君、戸山君。パネルに手をあててごらん。あたたかいかね、つめたいかね」

「つめたいですよ。氷のように冷ひえています」

「え、つめたいか。するとこのところ、この制御台を使わなかったのだ。はてな。するといよいよわけが分からなくなったぞ。これはひよつとしたら……」

博士は戸山の手をぐつと力を入れて握り、

「君たちは、気をつけなくてはならない。もしも何か怪あやしいことを見たら、すぐわしに知らせるのだよ。だが……だが、まさか、まさか……」

「なにをいつているのか、さっぱり分からない。おもしろくない。ほかの場所へいつてみよう」

気味のわるい声がひびいた。

「え、なんといった。今、ものをいったのはだれだ」

「私だ。なにか用かね」

「君はだれだ」

「私かい。私は私だが、私はいったい何者だろうか。とにかくあっちへ行こう」

がっちゃん、がっちゃんと、機械人間は、妙なことばを残して、奥の方へ歩みさった。

「だれだい、君は。ちよつと待ちたまえ」

「おじさん。今おじさんと話をしていたのは機械人間ですよ。奥の方へ行つてしまいました」

戸山は、そういつて、博士に教えた。

「やっぱり、そうだったか。ふーん、あんな口をきくなんて、とんでもない話だ。奥へ行ったか。それはいかん。奥には大切なものや危険なものがあるんだ。とりわけダイナマイトの箱が積んである。あれをあいつに一撃されようものなら、この研究所の塔とうは爆風ばくふうのためにすっ飛んでしまうだろう。君たち、早くわしをあの行つた方へつれていってくれ」

ダイナマイトの箱

ダイナマイトの箱が積んであるという。

それはたいへんだ。鉄の拳こぶしを持っている強ごうりき力の機械人間が、もしあやまって、そのダイナマイトの箱をぼかんと一撃したら、たちまち大爆発が起こって、建物も人間も岩盤がんばんさえ吹きとんでしまうであろう。

（なんだってこのおじさんは、ダイナマイトの箱なんか、たくわえているのだろう）

と、少年たちは、へんに思いながらも、博士をたすけて、地階の奥へ連れていった。

「ああ、そこに機械人間がいます」

井上少年が叫んだ。

「え、機械人間がいたか。なにをしている」

博士が、見えない目を大きくひらいて、
きんちよう緊張する。

「一生けんめいに、機械や何かを見えていますよ。あッ、箱を見つ
けました。たいへんだ。ダイナマイトと書いてある箱ですよ」

「ううむ。とうとう見つけたか。困った。手あらくあつかわな
いようにしてもらいたいものだが、……あッ、そうだ。さっきのふ
るい制御台を使って、あの機械人間を取りおさえてしまわねばな
らない。戸山君たち、さっき調べた旧式の制御台のところへ、も
う一度わしを連れていってくれたまえ」

少年たちは、博士のいうとおりにした。しかしその博士が、ま
すます狼_{ろうばい}狽_{はい}の色を見せてさわぎたてるので、だんだん心細くな

つてきた。ことにだれが見ても古ぼけて旧式の制御台を、博士がたよりにしているのが、少年たちを一そう心細くさせた。

旧式の制御台のところへ博士を連れてくると、博士は目が見えないことを忘れたように、機械を手さぐりして、電源につないだり、スイッチを入れたり調整をしたりした。

「計器を見てくれたまえ。一番上に並んでいる計器の右から三番めの四角い箱型の計器を見てくれたまえ。その針は、どこを指^さしているか」

「百五十あたりを指していますよ」

「百五十か。すると百五十ワットだ。これだけ出力があるなら、十分に機械人間を制御できる。さあ、見ておれ。おい君、今わし

が仕事をはじめ。君たちは、機械人間のところへ行つて、あいつがどうなるか、見ていてくれ。あいつが、しずかに立ちどまつて、死んだように動かなくなるはずだ。そうなったら、すぐわたしに報告してくれ。よいか」

そういつて博士は、制御台のパネルについている一つのスイッチを入れ、それから舵輪だりんのような形のハンドルを握つて、ぐるぐると廻しはじめた。

「どうじゃな。まだか。これでもか」

博士は、蒼白そうはくな顔に、ねつとりと脂汗あぶらあせをうかばせて、し

きりに機械人間の制御を試こころみている様子。

がっちゃん、がっちゃん、がっちゃん。

にぎやかな足音をたてて、奥から機械人間が出て来た。手にはダイナマイトの箱をぶらさげている。少年たちは、それを見て胆きもをつぶした。あぶない。いつ爆発するやら、たいへんだ。どうしたらいいのか。少年たちはおどろきのあまり、呼吸が苦しくなり、口もきけなかった。

何も見えない谷博士ばかりは、熱心に制御台の前でハンドルを廻しつづけている。

が、博士にも、機械人間の足音が耳にはいった。

「おや、まだとまらない。ふん、こつちへ歩いて来たな。もう機械人間はここで停止しなければならんだが、はてな……」

すると、博士の耳のそばで、気味のわるい声がした。

「さつきから、からだの中が、もぞもぞとこそばゆくてならない
と思つたら、君がこの旧式の制御器で、制^{せい}御^ぎ電波^{でんぱ}を出している
んだね」

「だれだ。そういう君は何者だ」

「私だよ。さつきも君が聞いてくれたね。わけのわからない私だ
よ。この足音を聞いたら、分かるだろう」

機械人間は、がっちゃんがつちやんと荒々しく足ぶみをしてみ
せたが、そのときあいている方の左手をのばしたて、がーんと制
御台のパネルを叩^{たた}きやぶった。

「うわーッ」

博士はとびのいて、その場にころぶ。

「こんどはどこへ行くのか。ここはもう興味をひくものがない」
機械人間は、笑うでもなく怒るでもなく、ひややかにそういつて、ひとりずんずんと階段をのぼっていった。

井上と羽黒の二人は、勇気をふるいおこして、怪しい機械人間のあとを追いかけた。

怪物は、階段をあがると、例の全壊ぜんかいに近い大広間の壁の大穴をくぐって、外にでていった。そしてどんどんと早足になって、山道を下の方へとぶように行ってしまった。

やがて怪人の姿は、雨あがりの木のまにかくれて見えなくなつた。

巨人ダム

さんかくだけ
三角岳をくだっていったところに、有名な巨大なダムがあつた。

このダムは、山峡さんきやうにつくつた人工の池をせきとめている。
それは巨大な鉄筋てつきんコンクリートで築きずいた垣かきであつた。水をせきとめるための巨大な壁であつた。

三角岳の大ダムと呼ばれていた。

このダムによって、せきとめた水が、高いところから下に落ち

るとき水力発電するのだった。水はこの広い山岳^{さんかくちたい}地帯を縫^ぬつて麓^{ふもと}へ流れるまでに十ヶ所でせきとめられ、そこに一つずつ発電所がある。つまり連続して、十ヶ所で水力発電をするのだった。

この大じかけな発電系に、水を一年中いつでも十分に送れるように、この三角岳の大ダムはものすごく多量の水をたくわえている。

この大ダムは、日本一の巨大なものであつた。しかしこのダム工事は、建設のとき非常に急がされたので、少々失敗したところがあつた。そんなことがなければ、このダムは今より三割も多くの水を、たくわえることができたであろう。

この大ダムの西の端に、一つの建物がある。ここには、ダムの

水位すいを測定そくていする人たちが詰めている。そのほかに、ダムを見ま
わる監視員かんしも、この建物を足がかりとして出はいりしている。

だが、いつもの日は、この建物の中にいるのは五六人にすぎな
かった。平常へいじょうは、大した用事もないから大ぜいの人がいる必
要はないのであった。

きょうも測定とうちよく当直ふるやまの古山氏えがわほか二人と、巡視じゆんしがすんで
休憩きゆうけい中の大池おおいけさんと江川えがわさんの五人が、退屈たいくつしきつた
顔で、時間のたつのを待っていた。そこへ、のっそりとはいって
来た異様いような姿をした人物があった。

それこそ、例の怪しい機械人間あやであつた。
がっちゃんがつっちゃんの足音に、所員たちはすぐ気がついた。

ふりかえってみて、相手の異様な姿に一同は胆きもをつぶした。

（機械人間みたいだが、どうしてここへひとりではいつて来たのかしら）

と、一同はふしぎに思いながら、気味きみのわるさにすぐには声が出なかった。

機械人間は、片手にダイナマイトの箱をぶらさげ室内をぐるぐる見まわしていたが、壁に張りつけてあるダムだんめんずの断面図ずめんに目をつける、そばへ寄ってまるで生きている人間の技師のように、しげしげと図面ずめんに見いった。

「もしもし。君は、ことわりなしに、ここへはいつて来たね。早く出ていきたまえ」

ついに大池が勇しく立ちあがって、機械人間のそばへ寄り、しかりつけた。

すると機械人間は、彼の方へ、樽のように大きい首をふりむけて、

「このダム設計は、はなはだまずいね。このへんにちよつと亀裂でもはいるものなら、ダム全体がたちまちくずれてしまう。あぶない、あぶない」

と、機械人間は、笛を吹くような気味のわるい声でこのダムの設計のまずいことを指摘した。

すると大池が怒った。

「よしてくれ。人間でもない、へんな恰好をした鉄の化物の

くせに、人間さまのやったことにけちをつけるなんて、なまいきだぞ」

「そうだ、そうだ。分かりもしないくせに、なまいきなことをいうな。さあ、出て行け」

江川も立って来て、機械人間をしかりとばした。

「私なら、こんな設計はしない。ここのところは、こうしなくてはならない」

機械人間は、机の上から赤鉛筆をとると、壁にはつてある設計図の上に赤線をひいて、元の設計を訂正^{ていせい}していった。

「よせ。よけいなおせっかいはよして、早く出て行け。出なけりや外へほうりだすぞ」

江川が機械人間の手から赤鉛筆をもぎとった。大池は機械人間を突きとばした。

機械人間は、びくともしなかった。大池の方が腕を痛めて、痛そうにさすっていた。

「私のいうことは正しい。うそと思うなら、私について来なさい。私は、ダム建設の失敗箇所へダイナマイトをあててみる。それでこのダムがひっくりかえったら、私のいったことは正しいのだ。来たまえ、諸君」

「きさまは化物であるうえに、気も変になっっているんだな。いつたいだれがこの機械人間をあやつっているのだろう」

「早く来たまえ。このダムはかんたんにくずされるのだ」

「はははは。何をいうんだ。おどかすな。見に行つてやることはないよ」

「ちよつと大池君。あの化物が手に持っている箱には、ダイナマイトと書いてあるぜ。本物のダイナマイトを持っているんなら、たいへんだぜ」

「なあに、よしや本物のダイナマイトであろうとも、ダムがひつくりかえるなんてことはないさ。とにかくあの化物を遠くへ追いはらう必要がある——」

といつていたとき、とつぜん天地はくずれんばかりに振動し、それにつづいて腹の底にこたえる気味のわるいごうごうの響き^{ひび}。

「おやッ」

と大池と江川が顔を見あわせたとき、二人の少年がかけこんで来た。

「たいへんですよ。機械人間が今、ダイナマイトの箱をダムに叩きつけたんです。ダムは決潰^{けっかい}して、ものすごい水が下へ大洪^{だいこう}水^{ずい}のようになって落ちていきます。たいへん、たいへん。早く出て来てください」

たいへんだ。あの怪しい機械人間は、あつさりダイナマイトをダムにぶつつけて、巨人ダムをひっくりかえしてしまったらしい。二人の所員は、その場に腰をぬかしてしまった。

怪物かいぶつの行方ゆくえ

「あッ、たいへんだ。早く、ふもとの村へ危険を知らせるんだ」

「どこへ一番はじめに、電話をかけますか」

「どこでも早くかけろ」

「じゃあ、第二発電所を呼びだしますか」

「だめだ。もうあのおそろしい水は、第二発電所へぶつかって、

おしつぶしているだろう。南無阿弥陀仏なむあみだぶつだ。もっと下へ電話で危

険をしらせろ」

「じゃあ、どこへかけりやいいんですか。はつきりいってください

い」

「おれはよく考えられないんだ。君、いいように考えて電話をかけてくれ」

「困ったなあ」

「あッ、だれか鐘をならしているぞ。そうだ。のろしをあげろ」

「もしもし、ここも危険ですよ。水に洗われて、土台にひびがはいつて来ました。ぐずぐずしていると、家もろとも洪水こうずいの中に落ちこみます。早くにげなさい。早く、早く」

「ええッ、ほんとかい。それはたいへんだ」

「おーい、おまえさんにもにげなさい。命をおとしてもいいのかい」
「にげるけれど、猫がいないから探しているんだ」

混乱のうちに、めりめり音がして、ちようしゃ 庁舎がさけだした。

このとき、最後の避難者ひなんしゃがにげだした。彼が戸口から出て、

はかいかしよ

ダム破壊箇所と反対の方向へ、二三歩走ったと思うと、庁舎は

大きな音をたてて、決潰けつかいダムの下のさかまく泥水どろみずの中へ、が

らがらと落ちていった。

「ああ、助かってよかったよ。ねえ、ミイ公こうや」

その最後の避難者の腕に、まっ白な猫の子がだかれていた。

ものすごい決潰と、恐ろしい大濁流とに、人々はすっかりおびえきつていて、もっと早くしなくてはならないことを忘れていた。やっとそれに気がついた者があつた。

「ああ、あそこに立っている。あいつだ。ダムをこんなにこわし

たのは……」

そういったのは、例の五人の少年の中のひとりである戸山君だった。彼の指さす方角に岩山があつて、その岩山に腰をかけて、こつちを見おろしている怪物があつた。それこそ例の機械人間であつた。

「あ、あいつだ。あいつが、この大椿事だいちんじをおこしたんだ。あいつを捕とらえろ」

「警察へ電話をかけて、犯人がここにいるからといって、早く知らせるんだ」

「だめだよ。電話どころか、庁舎も下の方へ流れていつてしまつた」

「おお、そうだったな。それじゃあ、みんなであの怪しいやつを追いかけてよう。棒でもなんでもいいから、護身用ごしんようの何かを持ってあいつを追いかけるんだ」

「よしきた。おれが叩たたきのめしてやる」

おいおいそこへ集まって来た木こりや炭やきや、用事があつてそこを通りかかっていた村人も加わり、怪しい機械人間を追いかけていった。が、彼らはまもなく、青くなつてにげかえつて来た。「ああこわかった。あれは、ただの人間じゃないじゃないか。すごい化物だ」

「もうすこしで、おれは腰をぬかすところだった。おどろいたね、みぞ樽だるほどもある岩を、まるでまりをなげるように、おれたちに

なげつけるんだからなあ。おそろしい大力だ。あんなものがあたりや、こつちのからだは、いちごをつぶしたように、おしまいになる」

「なんだい、あの化物の正しょうたい体は」

「さあ、なんだろうなあ。まっ黒だから、お不動ふどうさまの生まれかわりのようだが、お不動さまなら、まさか人間を殺そうとはなさるまい。あれは黒い鬼おにのようなものだ」

「黒鬼くろおにか。赤鬼や青鬼の話は聞いたことがあるが、黒鬼にお目にかかったのは、今がはじめてだ。しかし、待てよ。鬼にしては、あいつは角つのが生はえていなかったようだぞ」

「いや、生えていたよ、たしかに……」

村人たちのさわぎは、だんだん大きくなっていく。

そのうちに、ふもとの村から、特別にえらんだ警官隊がのりこんで来た。この警官たちはこわれたダムの警戒にあたるともりで来たが、犯人が意外なる大力無双だいきむそうの怪物であると分かり、それから山中に出没しゅつぽつするという報告を受けたので、「それでは」と怪物狩りかいぶつがの方へ、大部分の警官が動きだした。

もちろん、とてもそれだけの人数の警官ではたりそうもないので、ふもと村へ応援隊をすこしも早くよこしてくれるように申し入れた。

山狩りやまがは、ますます大がかりになっていった。しかしかんじん

の怪しい機械人間は、どこへ行ったものか、その夜の闇やみとともに

姿を消してしまった。

柿ガ岡病院
かき おかびょういん

目が見えなくなつたうえに、怪しい機械人間の出現しゅつげんで、すっかり神経をいためてしまった谷博士は、五人の少年の協力によつて、警察署の保護をうけることになつた。

三日ほどすると、すこし博士の気もしずまつたので、かけつけた博士の友人たちのすすめもあつて、博士は東京へ行くことにな

った。東京へいって、入院をして、目と神経しんけいとをなおすことになったのだ。

「わしの東京行きは、ぜったい秘密にしてくれたまえ。そうでないと、わしはこのうえ、どんな目にあうかもしれない。殺されるかもしれないのだ」

と、博士はひとりで恐怖きょうふしていた。

友人たちは、博士に、そのわけをたずねてみたが、博士はそのわけをしやべらなかつた。

「今は聞いてくれるな。しかし、わしは根ねも葉はもないことをおそれているのではない。わしを信じてくれ。そしてわしを完全に保護してくれたまえ」

博士は、からだをぶるぶるわせながら、そういつて、同じことをくりかえし、いうのであつた。友人たちもそれ以上、この病人からわけを聞きただすことをさしひかえた。

こうして博士は、東京の西^{せい}郊にある柿ガ岡病院にはいつた。

ここは多摩川^{たまがわ}に近い丘の上にあるしずかな病院であつた。この病院は、土地が療^り養^{よう}にたいへんいい場所であるうえに、すぐれた物理療法^{ぶつりりようほう}の機械があつて、東京において、もつとも進歩した病院の一つであつた。

院長は ^{おおみややまはかせ}大宮山博士^{だつた}だつた。

谷博士は、じつは大宮山博士をいつも攻撃していたし、大宮山博士もまた、谷博士には反対の態度をとっていた。ただし、それ

は学問の上のことだけであつて、友人と友人とのあいだがらは、たいへんおだやかであり、たがいの人格も信用していた。だから、谷博士は、自分の視^{しりよく}力がやられ、神経もいたんでいるときと、みずからすすんで大宮山博士が院長になつて経営しているこの柿ガ岡病院にはいる決心をしたのであつた。知らない人は、ふしぎなことに思つたにちがいない。

院長たちの手あつい治療によつて、谷博士はだんだん快^{かいほう}方に向かつた。

しかしよくなるのは神経病の方だけであつて、視力の方はまだ一向はつきりしなかつた。博士はいつも繃^{ほうたい}帯でもつて、両の目をぐるぐる巻いていた。

「ぼくの目は、もうだめかね」

谷博士がたずねたことがある。

「いや、だめだとはきまっておらん。今の療法をもうすこしつづきたい。それが、効果がないとはつきり分かったら、また別の方
法でやってみる」

「いよいよ目がだめなら、ぼくは人工眼じんこうがんをいれてみるつもりだ」

「人工眼か？ 君の発明したものだね。まあ、それはずっと後の
ことにしてくれ。君はぼくの病院の患者なんだから、よけいな気
をつかわないで、ぼくたちに治療ちりようをまかしておいてくれるとい
い」

「うん、それは分かっているんだ」

谷博士は、そのあとでしばらく口をもごもごさせて、いいにそうにしていたが、やがて低い声でつぶやいた。

「……あの恐ろしいやつが存在を、一日も早くつきとめたいのだ。ぐずぐずしていると、こつちが目が見えないのにつけこんで、あの恐ろしいやつが、わしを殺してしまうかもしれない」

この低きつぶやきの声も、院長たちの耳に聞こえた。院長は、聞こえても、聞こえないふりをしていた。それは谷博士の神経病がまだ完全によくなっていないと思ったからだ。病氣から出てくる恐怖心だと思っていたのだ。

院長の考えが正しいのか、それとも谷博士の戦慄せんりつにほんとの根拠こんきよがあるのか。

その谷博士のところへ、ある日曜日の朝、にぎやかな面会人が来た。それは、例の五人の少年たちであつた。

院長から許可が出たので、面会人の少年たちは、一人の看護婦にみちびかれて、谷博士がやすんでいる丘の上へ行つた。博士は車のついた籐椅子とういすに乗つて、すずしい木かげでやすんでいた。附つきき添そいの看護婦が、博士のために、本を読んでいたようだ。少年たちは、繃帯を目のまわりに鉢巻はちまききのようにして巻いた、いたいたしい博士のまわりにあつまり、かわるがわるなぐさめのことばをのべた。

博士はたいへんよろこんで、いちいち少年の手をにぎつて振つた。

看護婦が少年たちに博士のことを頼んで向こうへ行ってしまうと、博士はあたりをはばかりような声で、少年たちにたずねた。

「もう例の事件がおこってから十三日めになるが、犯人はつかま
ったかね」

「いえ、まだです」

「いま、どこにいるんだか、分かっているの」

「くにざかい国境あたりまでは、追っていったんですが、そこで見うし
なつて、そのあと、どこへ行ったか、あの怪しい機械人間の行方
は分からないのだそうです」

「それは困ったな。すると、ゆだんはならないぞ」

「ぼくたちも、なんとかしてあの怪物をつかまえたいと思って、

五人集まって探偵をしているんですが、まだなんの手がかりもないです」

「それはけっこうなことだが、諸君はあの怪物とたたかうのはやめなさい。たいへん危険だからね」

「危険はかくごしています。とにかくあんな悪いやつは、そのままにしておけませんからねえ」

「だが、君たちは、とてもあの怪物とは太刀うちができないだろう。いや、君たち少年ばかりではない。どんなかしこい大人でも、

あれには手こずるだろう。もしもわしの予感があたっていれば、

あれは、ちやうにんげん超人間なんだ。超人間、つまり人間よりもずっとか

しこい生物せいぶつなのだ。わしは、あれのために、ひそかに名まえを

用意しておいた。『超人間X号』というのがその名まえだ。超人間だから、君たちがいく人かかっていっても、あべこべにやつつけられる。だから、手をひいたがいい」

博士は、あの怪物が、どうやら超人間X号であるらしいことをものがたり、そして話したあとで、ぞつと身ぶるいした。

五人の少年たちも、この話を聞いて、急に不安な気持ちになった。

死刑台の怪影
しけいだいかいえい

「先生。その超人間X号というのは、いったい何者かんですか、どうしてそんな怪物が、この世の中にすんでいるのですか」

戸山少年は、谷博士にたずねた。

「じつは、超人間X号をこしらえたのは、わしなんだ。わしが研究所で作りあげた人工の生物なんだ。それは電気臓器でんきぞうきを中心にして生きている、半斤はんぎんのパンほどの大きさのものなんだ。この電気臓器をつくることについて、わしは長いあいだ研究をかさねた。そして完成したのは、この春のことだった。あらゆる高等生物は、親のからだから生まれてくるが、超人間X号は、わしの手で作ったのだ。ちょうどラジオの受信機を組みたてるようにね。分かる

ね、わしの話が……」

博士のことばに、少年たちはたがいに顔を見あわせた。分かるようでもあり、あまりふしぎで、よく分かりかねるところもあった。そのことを博士にいうと、博士はうなずき、

「そうであろう。わしの話は、よほどの専門家にも分かりかねるところがあるんだ。だから君たちにも分からないのはむりでない。しかし、わしが生物を人造じんそうすることに成功したということ、まず信じてくれれば、これで話の要点は分かったことになるんだ」と、博士は熱心に語った。

「さて、わしは、金属材料きんぞくざいりようではなく、人工細胞じんこうさいぼうを使って、電気臓器を作りあげた。これは脳髓のうずいだ。その他のあらゆる臓器

を一つところに集め、そして人間の臓器よりもずっとよく働くように設計してある。それはうまくできあがった。しかし困ったことに、それは生きてはいたが、まるで氣絶きぜつしている人間同様に、意識というものがなかった。それでは困る。せつかく作てんぞった電臓うが、いつまでも氣絶状態をつづけていては役に立たない。そこで、どうしたら、この電臓の意識を呼びさますことができるか、それを考えたのだ。分かるかね、ここらの話が……」

博士は、見えない顔を左右に動かして、少年たちの様子をうかがうのであった。

「ぼんやり分かりますよ」

少年は、正しょうじき直に返答した。

「ほう。ぼんやりでも、分かってくれと、わしはうれしい。…
 …そこでわしは、電臓に意識をつけるために電撃でんげきをあたえた。
 さんかくだけ
 三角岳へおしよせてくる大雷雲だいらいうんを利用して、あの電臓へ、つ
 よい電気の刺戟しげきを加えたんだ。これが成功するか失敗するか、ど
 つちとも分かっていなかった。しかしわしは、大胆だいたんにその実験
 をやってのけたのだ」

博士のことばは、だんだん熱して来た。

「ところが、意外にも、研究所の中に大爆発だいばくはつが起こった。ひど
 い爆発だった。まったく予期よきしない爆発だ。わしは一大閃光いちだいせんこう
 のために、いきなり目をやられた。わしの脳は、千万本の針をつ
 つこまれたように、きりきりきりと痛んだ。ああ……ううーむ」

ここまで語つて来た博士は、いきなりその場にもだえて、椅子から下へころがり落ちた。

さあ、たいへんである。少年たちは、博士を助けおこす組と、医局へ走る組とに分かれて一生けんめいにやった。

大宮山院長がかけつけて、博士を担架たんかでしずかに病室へ移すよう命じた。そして当分のうち絶対ぜったいに面会めんかい謝絶しゃぜつを申しわたした。

少年たちは、だからもうそれ以上博士から奇怪きかいな超人間X号の話を聞くことができなかった。そして割りきれない胸をいだいて、病院を引きあげたのであった。

いよいよ怪あやしいかぎりの超人間X号は、今いずこにひそんでい

るのだろうか。ダム爆破ばくは以来、ここに十三日になるが、彼の所しよざ在いはさっぱり知られていないのだった。

ところが、その日の夜、三角岳の南方四十キロばかりの地点にある九鬼刑務所くきけいむしよで、死刑執行中しけいしつこうちゆうに、怪しい影がさしたという事件があつた。

死刑は絞首台こうしゅだいを使うことになっていた。

死刑囚は、毒殺どくさつで八人を殺したという罪状ざいじようを持つ火辻ひつじぐ軍平くんぺいという三十歳の男であつた。

この死刑に立ちあつた者は、三人であつた、一人は執行官、もう一人はその下でじつさいの仕事、つまり死刑囚の首に綱つなをかけたり、死んだあとは死骸しがいをひきおろしたりする執行補助官、もう

一人は教誨師^{きょうかいし}であつた。

すでに用意は終り、死刑囚火辻は絞首台の上にのぼり、補助官によつて首に綱の輪がかけられていた。それに向かつて、十メートルはなれて、執行官と教誨師が並んで所定の席についていた。おりから東の空からのぼりはじめた月が明かるく、この死刑場を照らした。塀^{へい}のそとにすだく虫の声も悲しく、凄^{せい}惨^{さん}な光景であつた。

立ちあいの執行官は時計を見ながら、命令の時間になるのをまっていた。もう残すところ一分あまりであつた。

執行官は、さつきから補助官の姿が見えないので、どこにいるのかと軽い疑問を持っていた。死刑の時刻は、あと三十秒ほどに

せまった。

そのときであつた。目かくしされ首に綱をつけ、しずかに塀をうしろにして、立っている死刑囚のそのうしろの塀に横あいから近づく一つの人影ひとかげをうつした。

「あッ、あの人影は……」

教誨師が、低い声で叫んだ。

阿あ弥みだ陀どう堂

執行官もその人影を見た。頭部のたいへん大きな、肩はばの広い、大きな人影であつた。

（だれだろう、死刑囚のそばへ近づくのは）

執行官は迷つた。死刑執行をすこし待って、あの怪影をしらべ、もしも、死刑に関係のない者だったら、追っばらうべきであろうか。それとも、このまま死刑を執行してしまうべきであろうか。

それにしても、補助官は、どこになにをしているのであるうか。執行官は、やっぱり時刻が来たときに死刑を執行した。彼が、死刑囚の足をささえている台をはずしたのである。その瞬間、死刑囚のからだはすうーと下に落ち、そして途中でとまって、ぶらんとさがった。

怪影はそれまで見えていたが、死刑と同時に、ぱっとうしろへさがって、小屋のかけに消えた。

それからあとは何事もなかった。

絞首にきめられてある時間がたった。

執行官は、手はずのとおり、死刑囚の死体をおろすように信号を送った。

すると宙ぶらりんになっていた死体は、スーツと下へおりていって、やがて穴の中に見えなくなってしまった。

（なあんだ、補助官は、やっぱり死刑台の地下室に待っていたのか）

執行官は安心した。

執行官と教誨師^{きょうかいし}は、そこで顔を見あわせたが、さつき死刑囚に近づいた奇妙な影については、どっちも何にもいわなかった。そんなことをいうと、いかにも自分が死刑執行に立ちあつて、心を見だしているように、相手に思われるのがいやだったからである。

二人は、連れだつて、死刑台の下の地下室へおりていった。そこにはいつものとおり、補助官が死んだ死刑囚の首から、絞首綱をはずしていた。

「大丈夫かね」

執行官は、補助官に声をかけた。

「はい。うまくいきました。異状なしです」

と、補助官はまったくふだんの調子でこたえた。何か異状か、怪しい人物を見かけたことでも訴え^{うった}られるつもりでいた執行官はひようしぬけがした。

「君は、さっきこの死刑囚のそばへ行つたのか。いや、まだぼくが、死刑囚の足の台をひかない前のことだ」

「いいえ。私は上の準備をすると、ここへおりまして、今までずつとここにいました」

「ええッ。ずっと君はここにいたのか」

執行官はおどろいて、なにげなく教誨師の方をふりかえつた。と、そこで教誨師の不安な目とかちあつた。教誨師は、小首をかしげて見せた。

「おかしいね。たしかに死刑囚の横あいから一つの人影が近づいたんだ。死刑執行のすぐまえのことだった。そうだねえ、君」

そういつて執行官は、教誨師の同意をもとめた。

「そうでした。頭のいやにでっかいやつ影でした。私は、地獄から、閻魔えんまの使者ししやとして大入道が迎えに来たのかと思いました」

「ははは、なにをいいますか、おどかしっこなしですよ」

補助官は、二人にかつがれているんだと思って、笑ってしまつた。

とにかくその場は、それで一まずおさまった。執行官たちは念のために構内こうないを見まわったが、べつに怪しい者を見かけなかったから。もっとも夜もふけていたし、死刑執行もすんだことゆえ、

みんな早くその場を引きあげたくて、気がいそいだせいもあろう。そこで死刑となつた火辻軍平の死体は、棺かんおけ桶におさめられたのち、そこから遠くないところにある阿弥陀堂へ、はこびいれた。

この阿弥陀堂は、やはり堀ぎわに建っている独立のかんたんな堂であつて、お寺のお堂のような形はしていなかつた。しかし中にはいつてみると、お寺の本堂そつくりだつた。奥の正面には、西をうしろにして木像の阿弥陀如来あみだによらいが立つており、その前に、にぎやかな仏壇ぶつだんがこしらえてあつた。電灯を利用したみあかしが、古ぼけた銀紙ぎんがみせ製の蓮はすの造花を照らしていた。線香せんこう立や焼香しょうこう台うだいもあつた。

火辻軍平のなきがらのはいった棺桶は、この前にはこびこまれ、北向きに安置あんちされた。それから太い線香に火が点ぜられ、教誨師が焼香し、鉦かねをたたき、読経どきようした。この儀式はまもなく終り、一同はこの阿弥陀堂から退出した。

あとは阿弥陀さまと棺桶ばかりとなった。夜はいたくふけ、あたりはいよいよしずかになり、ただ一つの生命があるかのように燃えていた線香も、ついに最後の白い煙をゆうゆうと立てると、灰がぼりとくずれ、消えてしまった。こうして堂の中は死の世界と化した……。

めりめりツ。とつぜん仏壇の横手の鉄格子てつこうしが、外からむしりとられた。太いまっ黒な手が、外から窓へさしいれられた。人間

の腕ではない。くろがねの巨手きよしゆだ。

と思うまもなく、醬油樽しょうゆだるほどある機械人間ロボットの首がぬつと窓か

らはいって来た。そしてするすると阿弥陀堂の中へとびこんだ。

ああ、あいつだ。例の、怪しい機械人間だ。ダムを破壊した恐ろしい機械人間だった。

なぜあいつは、とつぜんこんなところへ姿をあらわしたのか。

怪物は、電灯を消し、室内をまっ暗にした。その暗がりの中に、めりめりと、板のはがれる音がした。それにつづいて、なんだか知らないが、かちやかちやと、金具かなぐのふれあう音がした。ときには、ぱつと火花が一瞬間、室内を明かるくすることがあった。そのとき、ほんの一目であったが、室内のありさまが見られた。

それは異様な光景だった。かの機械人間が、仏壇の方へ前かがみになって、何かしているのだった。壇の上には青白い人間のよなものが横たわっていた。棺桶は片隅かたすみによせられ、蓋ふたがあいっているようであつた。それから小一時間のちのこと、ぱつと電灯がついた。ゆれる電灯の灯影ほかげにうつったものは、世にも奇妙な光景だった。

頭部に、まっ白な繃帶ほうたいをぐるぐる巻つけた人間と、黒光りの巨大な機械人間とがからみあっていた。そして両者は、例の破られた窓のところへ近づいたと思うと身軽みがるにそれにとびつき、すばやく外へ出てしまったのであつた。あとに残るは、あらされたる仏壇と、死体のなくなつて空っぽになつた棺桶だけであつた。火

辻軍平の死体は、どこにあるのだろう。まことに奇々怪々ききかいな事件！

犯人は何者か

火辻の死体が紛失ふんしつしたことは、その夜のうちに知れわたり、さつそくこの怪事件の捜査そうさがはじまったが、その解決はなかなか困難だった。

読者諸君は、この犯人なるものの正体を、だいたい察しておら

れる。しかし当局にはそれがなかなか分からなかった。

分かっていることは、犯人が^{だいき}大力であることだ。そうでなく

ては、あの丈夫^{じょうぶ}な鉄格子のはいつた窓をやぶることはできない。

そのほかに何もはつきりした証^{しょうこ}拠はない。犯人の足あとを見

つけようと思つて、ずいぶん探したのであるけれど、それは発見

されなかった。もつとも刑務所内は、どこもかしこも舗装^{ほそう}されて

いて、足あとがつかないようにできていたし、塀の外もまた舗装

の道路だから、足あとはこのくらなかった。

事務所の高い監視塔^{かんしとう}にいつも見張りをしていて、脱獄者^{だつごくしゃ}が

あれば、すぐ見つけるようになっていた監視員がいる。この監視員も犯人らしいものが、この事務所から脱出していくところを見

かけなかった。

監視員の目にふれないで、脱獄することはできない仕事だ。だから犯人はどうして出てしまったのか。あるいはまだ所内にかくれているのではないかと、念入りの捜査が行われた。

その結果、やっと分かったことは、絞首台の下に、死刑囚の死体がおりにくを地下室があるが、その地下室の板壁いたかべの一部がぶらぶらしており、怪しく思つてその板壁のうしろをのぞいてみたところ、そこは、がらんどろになっていた。つまり狭い地下道せまみたいなのがあつたのだ。それがどこへつづいているのかと、奥へすすんでいくと、やがて地上へ出た。まっくらな場所であるが、たしかに家の中だ。はいあがつてよく見れば、なんのこと、それ

は農家の物置^{のうかものおき}だった。その農家の物置は、刑務所から道路をへだてた場所に建っていた。

この抜け道から、犯人は事務所へ出はいりしことが分かった。だが、農家でも、こんな抜け道がいつ掘られたのか、だれも知らなかった。それはほんとうと思われた。とにかく犯人がうまくこの抜け道を掘ったのであろう。

犯人は、頭のいいやつにちがいない。事務所の内部で、あまり人の立ちいりがはげしくないところをうまく利用したのだ。死刑は毎日あるわけではない。一年に何回しかないのである。犯人は、そこに目をつけたものと思われる。また、地下道にはやわらかい土がむきだしになっていたので、犯人の足あとは、たくさん残っ

ているものと思われたが、調べた結果は、一つも発見することができなかった。犯人は、そこを引きあげるとき、うしろ向きになつて、完全に足あとを消していったのだ。

こういうわけで、犯人は何一つ目ぼしい証拠を残していなかった。何も証拠を残していかないということが、犯人の素性^{すじょう}を推理するただ一つの手がかりだと思えた。

いやもう一つ、推理のタネがある。それは火辻の死体を盗んでいったのはなぜかという疑問だ。火辻の遺族の者であろうか。それとも、遺族ではなく、あの火辻の死体が入用であるために盗んだのか。

このことは、すぐには結論をきめるわけにかなかった。死刑

囚火辻軍平の身のまわりをひろく調べあげたうえでなくては分からないことであつた。係官は、もちろんこの仕事をその日からはじめた。だがこれは、日数のかかる大仕事であつた。

そこで、今のところ、この犯罪事件についてすぐ手をくだす必要がある捜査は、火辻の死体を探しだすこと、犯人らしい怪しい者を見つけることだつた。

ところが、紛失した火辻の死体は、どこへ持っていったのか、いつまでたつても発見されなかつた。また、手とか足とか、その死体の一部分さえ、どこからも見いだすことができなかったのである。

「どうしているかなあ、このごろの警察は……。」
迷宮入り事件めいきゆうい

ばかりじゃないか」

町では、警察の無能^{むのう}を非難^{ひなん}する声が、日ましにふえて来た。

戸山君たち五少年も残念がつて、土曜日や日曜日になると、警視庁へ様子を聞きにいった。少年たちは、ダムこわしの機械人間の行方を早くつきとめて取りおさえないと、これから先、たいへんな事件が起こるであろうと心配しているのだった。しかし五少年は、火辻の死体紛失事件の方の重要性には、まだ気がついていないようであつた。

だが、やがてそのことについて五少年がびつくりさせられる日が近づきつつあるのであつた。

帰ってきた博士

死刑囚の死体紛失事件があつてから、二カ月ばかりたった後のことである。

さんかくだけふきん
三角岳附近

は、急に秋もふかくなつた。附近の山々は、早くも衣がえにうつり、今までの緑一色の着物を、明かるい黄ばんだ色や目のさめるような赤い色でいろどつた美しい模様のもに、変えはじめた。

そのころのある日。

とつぜん谷博士が、この研究所へ戻つて来た。

もちろんこの三角岳の研究所は、すぐる日の大爆発でなかば崩壊し、それにつづいて怪しい機械人間のさわぎでもつて、この研究所はいよいよ気味のわるい危険なものあつかいされ、村人たちもだれ一人ここには近づかず、雨風にさらされ、荒れるにまかされていたのであつた。

ただ、この方面の登山者たちの目に、谷研究所の半崩壊の塔が、怪しくうつらないではすまなかつた。

「あのすごい塔は、どうしたんだね」

「へえ、あれは谷博士さまの研究所でございましたがね。なんでも雷さまを塔の上へ呼ぶちゆう無茶な実験をなさっているうちに、

ほんとに雷さまがらがらびしやんと落ちて、天にとどくような火柱ひばしらが立ちましたでな、それをまあ、ようやく消しとめて、あれだけ塔の形が残ったです。博士さまの方は、目が見えなくなつて、それから後はどうなったことやら。おつ死んでしまったといううわさもあるが、いやはやとんでもねえことで、そもそも雷さまなんかにかかりあうのが、まちがいのもとです」

山の案内人は、こんなふうに説明するのであった。

「それはすごい話だ。時間があれば、ちよつとよつて見物したいが、あいにく行く余裕がない。せめてあのすごい塔を、カメラへおさめていこう」

と、写真機を塔へ向ける。

「よし、君が写真をとるあいだ、ぼくは、そうがんきよう双眼鏡でちよつくら見物しよう」

一人は八倍の双眼鏡を目にあてて、塔にしょうてん焦点をあわせる。

「ほほう、双眼鏡で見ると、いよいよすごい塔だ。……おや、あの塔にだれかいるね。人間がひとり、塔の中を歩いているよ」

双眼鏡の男が、そういう。すると案内人がぴくんと肩をふるわせた。

「だんな、ほんとうですかい。ほんとに人間がああ塔の中にいますか」

「いるとも。ちゃんと見える」

「はて、何者かしらん。このあたりの衆しゅうはだれひとり近づかない

はず。だんな、その人はどんな姿をしていますか」

「ちゃんと服を着ているよ。頭のところに白い布で鉢巻きはちまきをしている。鉢巻きではなくて繻帶ほうたいかもしれないが……。ちよいと君、これで見えてごらん」

そこで案内人は、双眼鏡を貸してもらって目にあてた。ようやく視野しやに、その疑問の人物がはいって来た。

「やあ、あれは谷博士さまだ。博士さまは、ご無事だったのけえ」
幽霊ゆうれいかもしれないよ」

「待った、だんな。このお山の中で幽霊なんていつちやならねえ。お山が、けがれますからね」

「でも、君が塔の中の人を見て、あまりふしぎがつているからさ」

「いや、博士さまにまちがいはねえ。これは土産ばなしができたわ」

たしかにその人物は、ほんとに生きている人間であつて、幽霊ではなかった。

谷博士さまが研究所の中を歩いていなさつた——というニユースは、たちまちそのあたりの村々へ伝わった。

「博士さまは、これからどうするつもりかの」

「金になるものは売つて金にかえ、三角岳から引きあげるのじやなかろうか。あんなにこわれては、直しようもないからねえ」

「もう、それに、こんどというこんどは、雷さまの天罰てんばつにこりなさつたろう」

村人たちがそんなうわさをしているとき、谷博士が村へひよつくり姿をあらわしたので、みんなびつくりぎょうてん仰天。

「みなさん、しばらくごぶさたをしました。あのときはたいへん心配をかけて、すまんことじやった。こんどは一つみなさんにお礼をしたいと思って、研究所へ帰って来ましたから、どうぞよろしく」

博士は繻帶を巻いている頭をさげた。

「まあまあ、博士さま、なにをおっしゃいます。そんなごていねいな挨拶あいさつじゃ、みんなおそれいます。あのときは大してお役にもたてず、すみませんでした」

「いや、それどころじゃない。えらいことみなさんにごめいわく

をかけました。ところでこんどわしは雷らいを使う研究はぷつつりやめて、あの研究所からべんりな機械を製造しますわい。そこで職しよつこう
工くさんを二十名と雑役ざつえきさんを十名雇やといたいのだじや。給料は
思いきって出しますから、希望の人は、どんどんわしのところへ
申しでてください。その製造事業がさかんになると、しぜんこの
へんの村々へも大きな金が流れこむことになりますわい。ぜひと
も力を貸してくださいや」

博士は、そういつて、みんなに協力を頼んだ。

博士が、こんど製造工場を起こすについて人を雇うからどうぞ来てくださいと頼んだのは、一力村ではなく、そのあたり四里四方の全部の村々であつた。

昔の博士を知っている者の中には、めんくらつた者がすくなくない。というのは、博士はその昔、研究所長として、はなはだ横^お柄^{うへい}であつた。たまに博士と行きあつて、こつちからあいさつの声をかけても、博士はじろりと、けわしい目を一度だけ相手に向けるだけで、礼をかえしもしなかつた。

じろりと見られるのは、まだいい方で時には博士はまったく知

らぬ顔で行きすぎることさえあつた。だから村人は、博士のえらいことを尊敬していても、博士をしたう心を持つ者はいなかつた。学者という者は、こんなにごうまんなものであつて、農夫や炭^{のうふ}す^す焼きなどを相手にしないものだ、昔からのいいつたえで、そう思つていたのだ。

ところが、こんど博士は、いやに腰がひくくなつた。だから、昔を知っている者たちはおどろいたのである。おどろいて、顔を見あわせた。ものはいわなかつたけれど、目つきでもつて、村人はおたがいにいいたいことを察^{さつ}した。

（博士さまは、えらくかわつたでねえか。えらく腰がひくくなつただ）

（ほんに、そのことだ。どうしたわけだんべ）

（ああ、分かった。このまえ、ほら、あの研究所の塔さ、雷さまのためにぶっこわされてから、心がけがすっかりかわって、やさしくなったんだろう）

村人は、そのくらいのことを考え、その先を考えなかった。なぜ博士が急にこう物腰ものごしがひくくなったかについて、もつと深く考えることをしなかったのだ。素朴そぼくな村人たちは、博士が自分を友だちのように、したしげに話しかけてくれることにたいへん満足をおぼえた。そのうえに、こんど博士が、大きな金もうけをさせてくれるといったのにたいし、好感こうかんをよせたのだ。村人は、博士をとりまいて、遠慮えんりよのない話をとりかわした。

「博士さまは、この夏の爆発のとき、目が見えなくなつたちゅうこんだが、今はどうでがす。よく見えなさるか」

博士は、ぎくりとして、両手で自分の両眼をおさえた。

「おお、そのことだ。……いや、心配をかけたが、わしの目も今はすっかり直つて、よく見えるようになった。安心してください」

「それはけっこうなこと。目が不自由だと、一番つらいからの」

「そうじゃ、そうじゃ」

博士はうなずいた。

「博士さまの、その頭の鉢巻はちまききは、どうしたのけえ」

「作さくじゅう十よ。おまえ、ものを知らねえな。博士さまが頭に巻い

ているのは鉢巻きではない。あれは繃ほうたい帯ちゅうものだ」

「繃帯ぐらい、わしは知っているよ。繃帯のことを略^{りやく}して鉢巻きというんじゃ」

「強^{ごう}情^{じょう}だの、おまえは」

「博士さま、その頭の繃帯は、どうしなすったのじゃ」

それにたいして、博士は次のように答えた。

「この繃帯は、じつは悪性の腫^{はれもの}物ができたので、そこへ膏^{こう}藥^{やく}をつけて、この繃帯で巻いているのです。悪いおできのことだから、いつまでも直らなくて、わしも困っていますわい」

「そんなところへできるできものは、ほんとにたちがよくないから、くれぐれも気をつけなされや。そうだ。ふもと村^{むら}の慈^じ行^ぎ院^{いん}へいって、お灸^{きゆう}をすえてもらおうと、きつと直る」

「うんにや、それよりも鎮守さまのうしろに住んでいる巫女の
大多羅尊さまに頼んで、博士さまについている神様をよびだして、
その神様に『早う、おできを直すよう、とりはからえ』と頼んで
もらう方が、仕事が早いよ」

「いや、みなさんのご親切はうれしいが、わしは十分の手あてを
しているから、ご心配はいらん。それでは、雇人のことを頼
みまするぞ」

そういつて博士は、帰っていった。

博士の希望したとおりの雇人の人数は、まもなくそろった。

「わしは職工の仕事なんか、生まれてはじめてじゃが、それ
でも雇ってくれるかな」

「わしも職工というがらではないが、ええのかね」

「いや、けっこう。みなさん、けっこう。みんな雇います」

博士は、まず塔の壁を修理し、雨のはいらないようにした。それから地下室から、いろいろな工作機械るいを上へはこばせて、仕事のしよいように並べた。

それから素人職しろうとしよつこう工たちにたいし、博士は工作機械の使いかたをおしえた。

山の中の、まったく素人の農夫や炭焼きだった人たちが、博士の指導によつて短い期間のうちにびつくりするほどりっぱな職工になった。

「うれしいなあ。わしは、こんなにりっぱな機械を使いこなせるよ

うになつた」

「わしもうれしいよ。とにかくふしぎな気がする。わしは生まれつき不器用で、死んだ父親からさんざんと叱しかられたもんじやつたがのう」

「なんだかしらんが、なにかがわしにのりうつて、うまく作業をこなしていつてくれるような気がしてならん。わしの力だけとは、どうしても思われんな」

「おれも、そういう気がする」

「ばかをいえ。そんなことがあつてたまるか。やつぱりおれたちの技術者としての腕があつたんだ」

この会話の中には、なぞのことばが、ところどころ頭を出して

いた。そのなぞが持つ秘密が、やがてとける日が来たとき、この素人職工たちはびっくり仰ぎょうてん天しなくてはならなかった。

それはとにかく、谷博士が新しくつくったこの山の中の製造工場からは、まもなくりっぱな製品がどんどん出るようになった。その製品は、なんであつただろうか。

それは機械ロボット人間であつた。

「仕事をやらせるにべりな機械人間をお買いなさい。畑の仕事でも、遠いところからの水くみでも、なんでもやります。しかも、人間の十人分は働きます。一台わずか五千円。二百円ずつの月げつ賦販売はんばいも取りあつかいます。一週間のためし使用は無料です。三角じるしの機械人間工場」

こんな文句からはじまって、美しい絵ときをしてあるポスターが、ほうぼうの町や村にくばられた。

一週間ただで、ためしに使用してもよろしいと書いてあるので、それを申しこむ者がどの村でも一人や二人はあった。

申しこむと、ロボットこうじよう機械人間工場から、すぐさま機械人間がとどけら

れてきた。工場からは販売員がついて来て、使いかたをおしえる。そこで使ってみると、なかなかべんりでもあり、また人間の十倍も仕事をする。これはいいということになって、一度ためした人は、みんな機械人間をかう。

買えば、近所の人があめずらしがつて、それを見物に集まってくる。なるほど、これは重ちようほう宝だというので、こんどは何人もた

くさん名まえをつらねて「買います」と申しこむ。

そんなわけで、谷博士の製造工場の経営は大あたりであった。そのために、あたりの村や町の人は、博士さまをたいへんありがたく思い、もう昔のような悪口をいう者なんかいなかった。

怪^{あや}しい谷博士

さて、ある日のこと。

ある日といっても、それは、日曜日の次の月曜日が祭^{さいじつ}日で、

土曜日の午後から数えると、二日半の休みがとれる日の、その日曜日のことだった。

秋の山をぜひ登ろうというので、例の戸山君、羽黒君、井上君ほか二名の、仲よし五人少年が三角岳さんかくだけの方へのぼって来たのであった。

のぼる道々で、少年たちは、谷博士の経営している三角じるし機械人間工場のポスターを見た。博士の名まえは、はいっていないかったけれど、製品は機械人間だというし、それにその工場のあるところが、三角岳だということなので、少年たちは深い興味をわかった。

「すると、谷博士の研究所あとで、だれかあんな工場をはじめた

と見えるね」

「博士は知っていられるのだろうか」

「さあ、知らないだろうね。もつとも、知らせるといっても、博士はあれ以来、ずっと面会めんかいしやぜつ謝絶で、意識がはつきりしないということだから、知らせようがないわけだね」

「だれが経営しているんだろうか。まさか、例の機械人間の形をした怪物がやっているのではなからうか」

「そんなことはないだろう。だって、もしそんなことがあったら、大評判になるから、東京へもすぐ知れるよ」

「とにかく、あの研究所を利用することを考えたところは、なかなか頭がいいや」

少年たちは、こんなことを話しながら、山を登っていった。

やがて少年たちの目にうつったのは、例の修理された塔であった。すっかりきれいになっている。そして大ぜいの人が出はいりし、トラックもひんばんに、りっぱになった道路を走って、工場の製品をはこんでいる。

少年たちは、門の前まで来ると、真空管しんくうかんの中へ吸いこまれるように、塔の中へつかつかとはいっていった。

「あ、あそこに谷博士がいるよ」

「どこに。ああ、あれか。なるほど、谷博士さんそっくりだ。しかしおかしいぞ。博士は重病じゅうびょうなんだから、こんなところにいるわけではない。だれかにたずねてみよう」

戸山少年がそばを通りかかった職工しよっこうのひとりをやびとめて、たずねてみると、

「あれがこの工場主の谷博士ですよ」

と答えたから、少年たちは、あッとおどろいた。

そのおどろきの声が、博士に聞こえたらしく、博士はきつい顔になって、ずかずかと少年たちの方へやって来た。

「君たちは、こんなところでなにをさわいでいます」

そこで戸山が出て、

「谷博士に目にかかりたいと思って来たのですが、博士はどこにいらっしやいますか」

というと、

「谷博士は、わしです」

「いいえ、あなたではない」

「わしが自分で谷だといっているのに、なにをうたがいますか」

「それなら申しますが、谷博士は、目をわるくして、今も病院で目を繻ほうたい帯し、まったくなにも見えないのです。あなたは、谷博

士に似ているが、目はよくお見えになるようです。すると、あなたはほんとうの谷博士ではないということになりますねえ」

「あつはつはつは。なにをいうか、君たち。なにも知らないくせに。まあ、こつちへ来たまえ」

「いやです。おい、みんな早く、外へ出よう」

戸山のことばに、少年たちはすばやく博士ののぼす手の下をく

ぐり、塔から外へとびだした。そして足のつづくかぎりどんどん走つて、山をおりた。

一軒の警官の家の前へ出ると、その中へとびこんだ。

「たいへんです。大事件なんですから。東京の警視庁へ電話をかけてください」

「だめだねえ。この電話は、一週間まえから故障で、どこへも通じないんじやよ」

「ちえツ。しょうがないなあ」

少年たちは、そこをあきらめて、またふもとの方へ走つた。そして東京への電話の通ずる家を探したが、なかなか思うようにいかなかった。

少年たちが目的を達して、警視庁と話のできたのは、その翌よくち朝ようのことだった。

「せっかく知らせてくれたが、おいしいことに、まにあわなかったねえ」

と、電話口に出た捜査課長そうさかちようはいった。

「どうしたんですか。まにあわなかったとは」

「というわけは、きのうの真夜中のことだが、雷鳴らいめいの最中に柿かきガ岡病おかびよういん院に怪人がしのびこんで、谷博士の病室をうちやぶり、博士を連れて、逃げてしまったのだ。追いかけたが、姿を見うしなつたそうだ。こっちは、その報告をうけて、すぐに手配をしたが、今もって犯人もつかまらなければ、谷博士も発見されない。

困ったことになってしまったよ」

これを聞いて少年たちは、色を失った。

博士の保護ほごを頼もうとしたのに、それはまにあわず、博士は何者にか連れさられたというのだ、怪また怪。

怪漢かいかんの正体

盲目の谷博士を、柿ガ岡病院から連れだしたのは、超ちよう人にんげん間かん X号のしわざであった。連れだしたというよりも、X号が谷博士

を病院からさらっていったという方が正しいであろう。

なぜ、そんなことをしたか？

X号は、自分をまもるために、そうすることが必要だった。つまり戸山君などの五少年のために、にせの谷博士であることを見やぶられてしまった今日、こんにちあいかわらず博士が柿ガ岡病院にいたのでは、X号は三角岳研究所で大きな顔をして、もうけ仕事をつづけていられない。

だから、彼は谷博士をさらって、博士の行方を、わからないようにしてしまったのだ。それが第一段だった。さらった博士は、彼が肩にかついで、三角岳研究所へ連れこんだ。そしてこの研究所の一番下の地階ちかいへおしこめてしまった。この地階は、かねて谷

博士が、だれにもじやまをされないように、秘密に作ったもので、実験室も特別にこしらえてあり、居間や寝室しんしつや料理をつくるところや、浴室よくしつなんかも、ちゃんとできていて、この最地階だけでも、不自由なく実験をしたり起きふしができるようになっていた。しかもこの最地階へおりる入口は、極秘ごくひ中の極秘になっていた。博士以外の者には分からないはずだった。

それは、その一階上にある図書室の奥の外国の学術雑誌の合本を入れてある本棚を、開き戸をあけるように前へ引くと、その本棚のうしろは壁をくりぬいてあつて、そこには地階へおりる階段が見える、これが秘密通路ひみつつうろだった。

谷博士だけしか知らないこの秘密通路をX号はちゃんと知って

いた。なにしろX号はなかなかするどい観察力を持っていたから、いつのまにか、この秘密通路や、その下にある秘密の部屋部屋を見つけてしまったのであろう。

X号は博士の世話を、ほかの者にはさせず、みんな自分がした。博士は、病院から連れだされるとまもなく、この誘拐者^{ゆうかいしゃ}がX号であることを知って、おどろいた。

博士は、それ以来、X号にさからわないようにつとめた。また、なるべく口をきかないことにきめた。X号は博士がこしらえたものであるから、博士はX号の性格についてよく知っていた。智^{ちりよ}力の点ではX号は人間以上である。いわゆる「超^{ちようじん}人」だった。そのかわり、人間らしい愛とか人情にはかけていた。それが

おそろしいのである。博士は、X号のために、これからどんな目にあわされるかと、大危険を感じているのだった。

目の不自由な博士のことであるから、こうしてX号と同居して、自分の身をまもることに大骨おおほねが折れた。だが忍耐にんたいづよい博士は、そのあいだにも、X号が何を考え、何を計画しているか、それを知ろうとして、目が見えないながらも、しよつちゆう気をくばっていた。

博士は、ある日、この研究所の建物の中で急にさわがしい声がし、多くの足音が入りみだれ、階段をかけあがったり、器物が大きな音をたてて、こわれたりするのを耳にした。

そのときは、博士のそばにX号がいなかったが、やがてX号は、

ぜいぜい息を切って博士のそばへもどってきた。

「ああ、苦しい。せつかく死刑囚のからだを手に入れてこうして使っているが、このからだは悪い病氣にかかっていて、心臓も悪いし、腎臓じんぞうもいけないし、いろいろ悪いところだらけだ。これじゃあ思うように活動ができやしない。ああ、苦しい」

X号は腹を立てて、寝椅子ねいすの上にくろがり、ふうふうぶつぶついうのだった。

博士は、隅すみつこの破れ椅子に腰をうずめ、息をひそめて、X号のつぶやきに聞き耳をたてている。

「きつとやって来るだろうと思ったが、やつぱりやって来やがった」と、X号はひとりごとをつづける。「このあいだのちんぴら

少年どもが、警察に知らしたのにちがいない。あの少年どもはうるさいやつらだ、早くかたづけてしまいたい。おれをにせものだといっぺんで見やぶりやがった」

X号はぷりぷり怒っている。

遠くで、自動車のエンジンをかける音がした。つづいて警笛^{けいてき}がしきりに鳴る。

「ははあ、とうとう警察のやつらは、捜査をあきらめて引きあげていくな。ばかな連中だ。ここに最地階があるとは知らないで、引きあげていくぞ、もつとも、やつらも手こずったことだろう。

ようやく研究所の中へおし入ってみると、いるのは金属で作った機械人間^{ロボット}ばかりで、ふつうの人間はひとりもない。何をきいて

も、『私は知りません』の返事ばかり。ははは、困ったろう」

三角岳の研究所に谷博士と名のる、にせ者がいて、怪^{あや}しい工場をつくっていることを、五人の少年たちが東京の検察庁へ知らせたので、警官隊がここへ乗りこんできたわけである。ところが、中にはたくさんの機械人間ががんばっていて、警官隊を中に入れないとした。そこで衝突が起こった。

だが引きさがるような警官隊ではない。ついに、すきを見つけ、そこからはいつてきたのだ。それから家^やさがしをして、この建物のあらゆるところを調べてまわった。ところが、にせ博士の超人間X号を発見することはできなかった。またその所在もわからなかった。

ひよつとしたら、誘拐された谷博士がここにいるのではないかと、それも気をつけて調べたのであるが、博士の姿もなかった。

そして事實は、さっきのX号のひとりごとでお分かりのとおり、X号も博士も最地階にひそんでいたのである。

警官隊は、小人数の見張りみはりの者をのこして、あとはみんな、ふもとの町へ引きあげていった。

X号の新計画しんけいかく

「はっはっはっ、みんなあきらめて帰ってしまった。そのうちに、見張りのやつらも引きあげていくだろう」

X号は、窓から外をのぞいていて、あざ笑った。

それはいいが、X号の方にも、重大な問題があつた。それは、また、いつ警官隊がおしかけてくるかも知れず、うるさくてしょうがない。そしてこんな死刑囚火辻軍平ひつじぐんぺいの病気だらけのからだを借りていると、いつ頓死とんしするか知れたものではないし、そうかといって、まただれかのからだを手に入れ、その中にはいったとしても、また追いかけられるにきまつている。そこで彼は、そういうことの絶対がないからだを手に入れるとともに、そのからだであれば世の中へ顔を出しても、絶対に怪しまれず、疑われずに

すむものでなくてはならないと考えた。なお、そのうえにお金が
どんどんもうかって、思うように仕事ができ、そして不自由のな
い生活ができることが、必要だ。

これだけの条件を満足させるには、いったいどうしたらいいだ
ろうか。

頭脳のいいX号のことだから、半日ばかり考えると、一つの案
ができた。

それはどんなことかというところ、じんぞうにんげん 人造人間をつくることであ
る。

ここでいう人造人間とは、機械人間のことでない。機械人間
は、外がわも、中も主として金属でできているが、人造人間とい

うのは、人造肉、人造骨などを集めて組みあわせ、その上に人造皮膚ひふをかぶせ、だれが見ても生きているほんものの人間と、すこしもちがわないからだをしているものをいうのだ。

もちろん、そのからだの中にかくれている内臓ないぞうのあるものや、神経系統しんけいけいとうのものなどは金属で作ってもいいのだ。外から見て、へんだなと気づかれなければいいのだから。

「よし、それを作ることにしよう」

なにしろ、この研究所では、谷博士が長年にわたって、人造皮膚や人造肉や人造骨の製作を研究して成功し、それからさらに研究は深くなって人造細胞さいぼうを作りあげた。また、人造神経系統しんけいけいとうを作ることにも成功した。それからそれらをまとめて人造脳髓のうずいが

できたのだ。そして最後に谷博士独特の新製品であるところの、いわゆる「電でんぞう臓」が完成されたのだ。そしてX号の正体こそ、その「電臓」にはかならないのである。そういうわけだから、この研究所にある設備を利用すれば、人造人間をこしらえることはそんなにむずかしくないはずである。

X号はまず手はじめに、試験的に二つの人造人間をこしらえることにした。甲号は男だんたい体であり、乙号は女にょたい体に作りあげるこ
とになった。

仕事は、さつそくはじめられた。谷博士の研究ノートを見、そして番号をひきあわせてその器械器具を出して動かしてみれば、人造人間製作のやりかたは、だんだん分かって来るのだった。X

号はこの仕事にかかるとき、谷博士に手つだえと命令したが、博士は首をふって、頑強がんきようにこぼんだ。それでX号はやむなく彼ひとりで仕事をはじめたのであった。

その仕事は一週間かかった。

X号としては、ずいぶんの時日がかかったように思ったが、もし人間がすると、それが谷博士であつても、すくなくともその三倍の日数がかかったことであろう。

とにかく、二体の人造人間ができあがった。いや、できあがったというには、まだ早い。人造人間の形だけができあがったという方が正しいであろう。

男の方は四十歳ぐらいの、肩はばのひろいりっぱな体格の人間

だった。女の方は、十六七歳の少女だった。

そこまではうまくいったが、その先の仕事にX号は困って、さじをなげだした。すなわち、人造人間は、形だけは本物の人間とちがわないくらいにみごとにできあがったのであるが、それは死んだようになっていて、呼吸もしなければ、目も動かさず、もちろん歩きもしなかった。

「これは困った。その先のことは、谷博士の研究ノートにも、あまりくわしく書いてないんだから、いよいよ困った」

困ったままで、おいておくことはできない。そこでX号は最地階に監禁してある谷博士の前へやって来て、その問題をくわしく話をし、それから先どうすればよいかについて博士に教_こえを乞う

た。

X号の方で頭をさげんばかりにして博士に頼んだのであるから、それを見てもX号がよほど困ったことが分かる。

「わしは、いやだ」

やつれはてた博士は、頑強にこばんだ。

X号は博士を一撃^{いちげき}のもとにたたき殺そうとして拳^{こぶし}をふりあげ

た。が、そのときひどい神経痛^{しんけいつう}のようなものがX号の右半身に起こったので、腕がしびれて動かなくなった。

博士は、あぶないところで、難^{なん}をまぬかれた。

神経痛がおさまるころには、X号は気もせずまって、別のことを考えだした。

「そうだ。博士の知識を のうはじゆしんき 脳波受信機で引きぬいてやろう」

脳波受信機というのは、人間の頭の中にあることを知る機械だ。これも谷博士が完成して地階の器械置場きかいおきばに備えつけてある。

この器械の原理は、人間の脳髓が考えごとをはじめると、脳波と名づける一種の電波が出てくるから、それを受信するのである。受信した脳波は増幅ぞうふくして別の人間の脳髓の中に入れる。するとはじめの人間が考えていることが、第二の人間の脳髓に反映して分かるのである。その反映したことがらを第二の人間にしゃべらせることもできるし、書きとらせることもできる。

X号は、これを使うことを決心したのであつた。ただし、これをするには、一人の人間がいる。生きた人間を見つけてこなくて

はならない。それをどうするか。

X号は、そこでちよつと行きづまって、椅子いすを立ちあがると窓のところへ行つた。

窓から外を見ると、研究所の堀へいのかげにひとりの怪しい男が身をひそめて、しきりにこつちをうかがっているのを発見した。それは今回の事件のために命令をうけて、この研究所を監視している山形やまがた警部の私服姿しふくすがたであつた。

「あの男を連れてこよう。すぐ手近に見つかつたのは、ありがたい」

X号は、機械人間たちを呼びだして、山形警部逮捕たいほの命令を出した。

警部は、かんとんに逮捕せられた。機械人間の大力と快速にあつてはかなわない。

神を恐れぬ者

山形警部は、失心^{しっしんじょうたい}状態になつたままX号の前へ連れてこられた。

X号は警部を生きかえらせた。

警部はわれにかえつた。そして目の前に怪しい人物を見たので、

「あつ、君はだれか」

と、叫んだ。

「わしか。わしは君が探している者だよ」

X号は、顔をぬつと前につきだした。彼の頭部にある手術のあとのみにくい縫目^{ぬいめ}が、警部をふるえあがらせた。

「ややッ、君は死刑囚の火辻軍平だな」

「正確にいうと、それはちがうんだがね」

と、X号はつい興^{きよう}に乗ってからかい半分、そういった。

「火辻のからだを借りている者さ。よくおぼえておくがいい。わしはX号だよ。谷博士がわしを作ったのだ。超人間のX号さ。うわははは」

「ええッ、X号は君か」

「おどろいたか。よく顔を見て、おぼえておくがいい」

「うぬ。そのうちにきつと君を捕縛ほばくしてみせるぞ」

「それは成功しないから、よしたがいい。とにかく、それでは早く仕事にかかろう。君とはもう口をきかないことにする」

「早く、私のからだを自由にせよ。君には、私を捕とらえる権限けんげんがないじゃないか」

「そのうちに、君を自由にしてやるよ。当分とうぶんここにいて、わしの仕事に協力してもらおうのだ」

「いやだ。X号の仕事のお手つだいをさせられてたまるものか」
「吠ほえるのはよしたほうがいいよ。わしは、だれがなんといおう

と、計画したことはやりとげるのだ」

X号は、それからのちは山形警部の怒号^{どごう}にはとりあわなかつた。彼は仕事にかかつた。彼は、機械人間に命じて、山形警部をおさえつけ、その頭に脳波受信機^{のうはじゆしんき}の出力回路^{しゆつりよくかいろう}を装置してある冠をかぶせた。そして警部を大きな脳波受信機の函^{はこ}の中へ押しこんで、ぱたんと蓋^{ふた}をした。警部は冠をかぶせられたときから後は、別人のようにおとなしくなつてしまった。それは彼が麻痺^{まひ}状態^{じやうたい}に陥^{おちい}つたがためであつた。彼は、もう自分で考えることもしやべることができず、一個の機械とかわからぬ生体^{せいたい}となつてしまったのである。

「よしよし、それでその方はよし。こんどは博士の方にかかろう。

ちよつと手ごわいかもしれないが、なあに、やつつけてしまふぞ」

X号は、機械人間に命じて、谷博士をこの実験室に引っぱつて来させた。博士は、目は見えないながら、危険を感じて、しきりに抵抗した。しかし、やつれきつた博士が、機械人間に勝つはずはない。ついに博士はX号が持ちだした椅子にしばらくつけられ、そして脳波受信機の収波冠しゅうはかんを頭にしっかりと鉢巻はちまきのようにかぶせられた。博士はそれをふり落とそうと、しきりに頭を振つたが、それは空しい努力であつた。収波をあつめる収波冠は、博士の頭部にくいついたように、しつかり取りついていて、はなれなかつた。

それからX号は、みずから長い電線を引っぱり収波受信機の接

続を一つ一つ仕上げていった。

「これでいい。これでわしの知りたいことは、みんな分かるのだ。さあ、それでは谷博士に質問をはじめめるかな」

そこでX号は、谷博士に質問をはじめた。

「こういう問題がある。この研究所の機械を使い、谷博士の研究ノートの示すとおりにして、人造人間を作りあげた。ところがその人間は眠ったようになって、目がさめないのだ、どこに欠点があるか、それを考えなさい」

と、X号は椅子にしばらくつけた谷博士に向かってたずねた。

すると谷博士は、口をかたく結んで、それは絶対に答えないぞという態度たいどを示した。しかるに、そのとき、山形警部の押しこめ

られている函の、上部についている高声器から、はつきりした声
がとびだした。

「それには二つの欠陥けつかんがある。一つは、研究ノートにまだくわ
しく書きいれてないが、その人造人間に高圧電気で電撃でんげきをあた
えることが必要なのだ。それがために、この研究所には百万ボル
トの 高圧変圧器こうあつへんあつきがあるが、百万ボルトでは十分効果をあげない
場合がある。もっともいい方法は、落雷らくらいの高圧電氣を利用する
ことだ。しかしいつでも雷雲らいうんが近くにあるわけではないから、
おいそれとすぐにはまにあわない場合がある。もう一つの欠点は、
人造人間の脳髓を作る研究がなかなかむずかしいことだ。百個作
っても五個しか成功しない。だからむしろほんとうの人間の脳髓

を移植^{いしょく}する方がらくである。おそらくこんど造った人造人間の脳も失敗作なのであろう」

谷博士の頭の中に浮かんだ考えが、そのまま山形警部の声になつて、部屋中にひびきわたつた。

X号はよろこんだ。谷博士は、くやしがつて歯がみをし、身もだえして、椅子をがたがたいわせた。

そんなことで、X号は手をひかえるようなことはなかった。つぎの質問に移つていった。

すると博士の頭の中に浮かんだ回答が、山形警部の声で出て来た。こんなことを繰り返したものだから、博士はついに悶絶^{もんぜつ}してしまつた。

「ははは、弱いやつだ」

X号は笑って、脳波受信の実験を一時中止することにした。

しかしさしあたり、彼が知りたいと思っていたことは、知るこ
とができたので、こんどは、例の死んだようになっている人造人
体を生かす実験にとりかかった。

彼は男性人造人間の頭蓋ずがいをひらいて、その中につめてあつた人
造脳髓を切開せっかいして取りだした。

「きれいなんだが、やっぱりこれではだめなのか」

彼は、それをガラス器に入れて、棚たなの上においた。

それから彼は、函の中から山形警部を引っ張りだすと、まるで
魚を料理するように警部の頭蓋をひらいてその脳髓を取りだし、

急いでそれを人造人間の頭の中に押しこんだ。そして手ぎわよく頭蓋を縫^ぬってしまった。このへんの手術の手ぎわはじつにみごとなものだ。

「それから高压電気で、電撃を加えるのだ」

山形警部の脳を移植した人造人間のからだは電圧電気室にはこび入れられた。

百万ボルトの高压変圧器のスイッチは入れられ、おそろしい火花が飛んだ。

電撃が、人造人間の上に加えられたが、その結果は失敗だった。どういうわけか、その途中で、人造人間のからだだが、ぷすぷす燃えだした。強い電流が、人造人間のからだの一部に流れたためで

あつた。

「これはいけない。困ったぞ、困ったぞ。どうすればいいか」

X号は、しばらくうなっていたが、そのうちに心がきまった。

彼は、一部分黒々と焼けた男性の人造人体を電撃台から引きおろすと、電気メスを手にとって頭蓋をひらき、さつき移植した山形警部の脳髓を取りだした。そしてそれを持って、大急ぎで、もう一つの女体の人造人間のところへ走った。

彼は、非常な速さでもって、今引っぱりだして来た警部の脳髓を女体の人造人間の頭蓋の中へ移植した。そしてほっと一息ついた。

「こんどは、うまくやりたいものだ」

ふたたび電撃が行われた。

そのあいだ、さすがのX号も、深刻な顔つきになって今にも^{のうひんけつ}脳貧血を起こしそうになった。が、こんどは、女体からは黒い煙もあがらず、その電撃^{でんげき}操作は成功し、女体はかすかに目をひらいて、台の上で動きはじめた。

「しめた。こんどは成功したらしい」

X号は、大よろこびで、スイッチをひらくと、電撃台にとびついて、生^{せい}を得た女体人造人間を抱きおろした。

「よう、みごとだ、みごとだ。もしもお嬢さん。わしの話が分かるでしょう」

「なにが、お嬢さんだ。私は山形警部だ」

と、その女体の人造人間は怒ったような口調くちようで答えた。

娘と警部

さすがの超人間X号も、その日はすっかりくたびれてしまい、ベッドにもぐりこむと、正体もなく深いねむりに落ちこんだ。

彼は、すこしの心配もなくねむった。というのは、この秘密の最地階のことは外部には知られていないし、またこの最地階からそとへ出ていく出入り口は、彼がすっかり錠じようをおろし、その鍵かぎは

だれも気のつかない薬品戸棚やくひんとだなの裏にうちつけてある釘くぎへひっかけてあるので、何者もこの最地階から外へ出られないと信じていた。

ところが、その翌朝七時に彼が目をさましてみると、その秘密の出入り口があいているので、びっくりした。錠は、内がわから鍵がさしこまれたまま、みごとにひらかれてあった。

「しまった。何者のしわざか」

X号は、おどろくやら、腹をたてるやらで、そこにふたたび錠をかけると、急いで引きかえた。

彼は、実験室の戸をおして、中へはいった。

「おお、谷博士は、ちゃんといるぞ」

谷博士は、椅子にしばらくつけられたまま、首をがっくり前にたれていた。死んでいるようでもあり、まだ死んではないようでもあった。とにかく博士がそこに残っているのです、X号はまず安心した。

そばによつてみると、博士は、心臓が衰^{すいじゃく}弱^{じやく}しているようで、脈^{みやく}がわるいが、しかしちゃんと生きていた。X号はよろこんだ。博士はこんこんとねむっているらしい。

もうひとりの人造人間の女の子の姿を、X号は探しまわった。が、これはどの部屋にも見つからなかった。

「ふふん、すると、あの人造人間が、錠をあけで逃げだしたとみえる。はてな、最後にあの人造人間を、どう始末^{しまつ}しておいたかし

ら」

X号は記憶を一生けんめいによびおこしてみた。

「そうだ。あの少女の姿をした人造人間は、男のような声を出して、あばれだしたんだ。それでおれはあの少女をおさえつけ、綱でぐるぐる巻きにして、組立室の起重機きじゆうきにつるしておいた。たしかにそうだ」

そのような状態では、少女の人造人間は逃げる事ができないはず。とにかく組立室へ行ってみれば分かると、X号はそちらへ小走りに走っていった。

そこでは、起重機から、だらりと綱がぶらさがっているだけだった。

少女が逃げたことは、いよいよたしかであった。あのかぼそい身で、このように綱をほどき、それからあの秘密の出入り口の鍵をさがしだして、うまうまと逃げてしまったんだ。なんという、すばしこいやつだろう。

「ああ、そうか。あの娘の頭蓋の中に、警官の脳髓のうずいをいれたのが、こつちの手落ちだったな。よほど頭のきく警官らしい」

それにちがいない。検察庁けんさつちようの特別捜査隊にその人ありと聞こえた、名警部山形だったから。

少女のからだを持った山形警部は、たいへんなかつこうで、研究所の外にのがれた。それはやつと夜が明けはなれたばかりの時刻だった。研究所からすこしいったところで、彼は非常線をは

っている警官を見つけて、その方へとんでいった。

その警官は、夜明けとともに、眠気ねむけにおそわれ、すこしうつらうつらしているところだった。その鼻先へ、とつぜん裸の少女がとびだして来て、わツと抱きつかれたものだから、その警官は、きもをつぶして、その場に尻餅しりもちをついた。

「おお、足柄君あしがら。わしは山形警部だが、大至急そのへんの家から、服を借りて来て、わしに着せてくれ。風邪かぜをひきそうだ。はアくしょん！」

と、少女姿の山形警部は、相手が部下の足柄君であることをたしかめ、うれしくなって、急ぎの仕事を頼んだ。

足柄警官の方は、抱きついた裸の娘が、しゃがれた男の声を出

したので、ますますおどろいて、うしろへさがるばかり。山形警部は、ここで、足柄に逃げられてはたいへんと、ますます力を入れて抱きつく。足柄警官はいよいよあわてる。

が、ようやく山形警部が、「君は、この寒い山の中で裸の娘をいつまでも裸でほうっておくのか。それは人道じんどうに反するじゃないか。早く服を探してやらないのか」と、人道主義をふりまわしたので、若き人道主義の足柄警官は、ようやくわれにかえって、すぐ前の農家のうかから借りてくることを約束した。

こんなことがあって、ようやく山形警部は服にありついた。しかしそれは少女の服であつた。その農家の、今は嫁入った娘が、小さいとき着ていた服であつた。警部は男の服を借りてもらうつ

もりだったので、そのことを足柄警官にいった。すると足柄は、山形警部を見おろしてにが笑いをしながらいった。

「だって、大人の服は、あなたには大きすぎて、着ても歩けませんよ。ねえ、分かったでしょう、娘さん」

このことばに、山形警部は、うむとうめいてかえすことばを知らなかった。

うそかまことか

足柄警官は、娘にさんざん手をやいて——彼は山形警部が少女姿になつたことを、いくど聞いても信じない。——おりから、ちようど交^{こうたい}替の警官が来たのをさいわい、娘をつれ、出張中の捜査本部のある竹柴^{たけしばむら}村へおりていった。

知らせを聞いて、奥から氷室^{ひむろけんじ}検事がとびだしてきた。この氷室検事は、X号を捜^{そうさ}査する警官隊の隊長だつた。

「やあ、氷室検事、私はこんななさない姿になつてしまいました。同情してください」

みじかい少女服を着た女の子が、いきなり検事にとりすがつて、顔に似合わぬ男の声を出したので、検事はびつくりして顔色をかえたが、さすがに隊長の任務の重いことを思いだして、落ちつき

をすこしとりもどした。

「いいよ、いいよ。ぼくは君に深い同情をしている」

でまかせなことを、氷室検事はのべた。

「えッ、同情していてくださいますか。ありがとうございます。氷室検事。あなたのほかにはだれもわしを山形警部だと思ってくれないのです」

「えッ、なんだと」

検事は、目をパチクリ。

すると少女のうしろから、足柄警官がさかんに手まねでもって、
「検事さん、この娘は気が変ですよ」と知らせている。

「ふーん、そうか……」

山形の方は、検事がそういつたのを、自分をみとめてくれたんだと思いちがいし、泣きつかんばかりに検事にすがりつく。

「わしには、さっぱりわけが分からんですが、きのうわしは研究所に近づいて堀^{へい}の破れから中を監視^{かんし}していますと、いきなり脳^{のうて}天^んをなぐりつけられたんです。気が遠くなりました。」

次に気がついてみると、わしは見たこともない部屋の中に、裸になって寝ていたのです。その部屋には器械がおそろしくたくさん並んでいました。わしはおどろいて起きあがりました。ところがそのときえらいことを発見してびっくり仰^{ぎょうてん}天、ぼーツとなつてしまいました。なぜといって、わしのからだはいつのまにか少女のからだになっていたんですからねえ……」

と、山形警部は、今これをしんじてもらわねばとうてい救われる時は来ないものと考え、手まねもいれてくどくどと身のうえを説明したのだった。

まわりに、これを聞いていた一同は、いよいよこれは氣が変な娘だわい。とほうもない奇怪きかい味のあるでたらめをいうものだと、あきれてしまった。

氷室検事だけは、心をすこしばかり動かした。この娘はたしかに変に見える。しかし彼女が娘らしくない、がらがら声でしゃべっているのを聞いていると、どこかに山形警部らしい話しかたのひびきもある。また、この娘のいつていることがらは、ほとんど信じられないほど奇怪であるけれど、辻つじまが合っている。氣の

変な娘が辻つまの合っている話をするわけではない。すると、この娘は気が変であるといえないことになりはしないか。この答えはすぐに出ない。氷室検事の心は重かった。

そのとき戸山少年が、検事の前へ出て来て、

「検事さん。この女のひとがいつていることは、ほんとだと思えますよ。谷博士が、研究所の最地階さいちかいは一等重要なところで、だれもいれないことにしていると、ぼくに話したことがありました。が、この女の人のいうことは合っていますよ」

戸山君をはじめ五少年は、捜査隊にしたがつて、この竹柴村の本部に寝とまりしていたのである。さつきからのさわぎに、少年たちは寝台をけつて起き、奇きみょう妙な少女を見物していたのであつ

た。

「それは、たしかだろうね」

検事は、するどい目つきで、戸山君を見つめた。

「たしかですとも、それから、今この女のひとが話したところによると、その研究所の最地階には、三人の人がいたことが分かります。その三人とは、この女の人と、例の死刑囚火辻に似た怪人、それからもう一人は、目に繻^{ほう}帯^{たい}をした谷博士だと、この人はいつているのです。ああ、谷博士は、怪人のために病院から連れだされ、研究所の最地階に幽^{ゆう}閉^{へい}され、どんなに苦しめられていることでしょうか。博士が責めころされないまえに、一刻^{いっこく}も早く救いだしてください。もちろんぼくたちも一生けんめいお手つだ

いたします」

「戸山君のいったとおりです。谷博士を早く助けてください」と、他の少年たちも検事の前に出て並んだ。

月光の下に

五人の少年たちが、熱心に谷博士を救いだすことを検事に頼んだので、氷室検事の決心はようやくきまった。

「よろしい。それでは今夜半を期して、研究所の最地階へ忍びこ

むことにしよう」

検事は、部下を集めて、手配のことを相談した。

このとき、気が変になった娘と思われるいた少女姿の山形警部が、いろいろと研究所内の事情について、よい参考になることをしやべった。ことに、最地階の出入り口の錠じょうのことと、それがその階上のどんなどころへつづいているかということ、この二つはたいへん参考になった。

（なぜこの娘に山形警部のたましいがのりうつっているのか分かんが……）と警官たちの多くは、そう思った。

（しかしとにかく、今しやべっているのは山形警部のたましいにちがいない）

へんてこな氣持だった。

でも、會議が進むにつれ、みじかい少女服を着た娘の発言は重^じ視^{ゆうし}され、そして彼女はだんだん山形警部としてのあつかいをうけるようになった。

會議が終ると、女体^{じょたい}の山形警部は、食事をとってそのあと、ねむいねむいといって、寢床^{ねどこ}をとつてもらつて、その中にもぐりこんだ。

そのあとは、本部の中は、怪少女の話でもちきりだった。若い警官も年をとつた警官も、それぞれにいろいろな想像をして、議論をたたかわした。だがはつきりした証^{しょうこ}拠^こは、どこにもないのだ。なにしろ、山形警部は依然^{いぜん}として行方不明である。山形警部

の肉体は今どこにどうしているのか、それが今も発見されないままなのだ。それが分からない以上、なぜ山形警部のたましいが、あの少女にのりうつったのか、それは解けない謎^{なぞ}だった。そして決行の夜が来た。

研究所を見張っている警官隊からは、たえず報告が来る。目下、研究所の地上の各階では、機械^{ロボット}人間が働いている。彼らは、研究所の動力や暖房^{だんぼう}のことをまちがいなく管理していた。また、機械人間製造の方でも、たくさんの機械人間が働いていた。しかし生産された機械人間は、このところ売れゆきがよくないので、倉庫にたまる一方であつた。夕方になると、製造工場はお休みとなる。あとは研究所の日常生活を担当している機械人間だけが、

用のあるときだけ働いている。研究所の灯火^{とうか}は、夜のふけるにつれ、不用な部屋の分は一つ一つ消されていき、だんだんさびしさを増すのであった。夜中になって、東の山^{やま}端^{はし}から、片われ月がぬつと顔を出した。それを合図にして、氷室検事がひきいる捜査隊は、研究所をめがけて、じりじりと忍びよった。この隊には、五少年も加わっていたし、それからまた、女体の山形警部も、警官に取りまかれて、^{げんじゆう}厳重に保護されながら、ついてきていた。

ある一つの窓の警報器が故障になっていて、そこをあけてはいれば、研究所をまもっているくろがねの怪物どもを立ちさわがせることなく、忍びいれるという調べがついていた。

一行は、この窓にとりついた。すみきつた月光がじやまではあったが、警報器がならないかぎり、まず心配なしである。氷室検事は外に見張員みはりいんをのこすと、残りの者をひきつれて窓から中へすべりこんだ。

そこは一階だった。玄関と奥の中間のところにある窓だった。それから先の案内は、女体の山形警部にまざる者はなかった。警部は先に立ち、そのうしろに護衛の警官が三人つづいた。もしもこの怪女がへんな行動をしそうだったら、ただちにとりおさえる手はずになっていた。が、女体の山形警部はわるびれず、奥へすすんだ。そして秘密の出入り口を教えた。

ところがここに困難がひかえているものと予想された。という

のは、最地階から山形警部が出てくるときには、この秘密の出入り口の鍵は内がわにあったから、探しだしてすぐ使うことができた。しかし今警官隊は、外がわからはいろいろとしている。錠じょうま

前まえも鍵も向こうがわにあるのだ。どうしたら、錠前や鍵に手にとどくだろうか。それを心配しながら、検事の命令で、警官の一人が、力いっぱい戸をおした。

「あッ、開いた」

意外にも、戸は苦もなく開いた。錠がかかっていなかったのがある。警官たちはよろこんだ。検事もよろこんだが、反射的に、（これは用心しなければいけない。相手はわなをしかけて待っているのかもしれない）と思った。

一同は、全身の注意力を目と耳にあつめ、足音をしのんで、最地階へはいつていった。警官の手ににぎられたピストルは、じつとりとつめたい汗にうるおっていた。だんだんと奥へ進む。

女体の山形警部が、いよいよどんづまりの場所へ来たことを手まねでしらせた。そして彼女は、声をしのんでいった。

「この扉をひらけば実験室だ。そこに博士は椅子にしばらく、怪人はおそろしい顔をして、器械をあやつっているんだ。扉をやぶったら、どつと一せいにとびこむのだ。一度にかかれば、なんとか怪人を取りおさえることができるかもしれない」

警部は、やっぱり怪人の力をおそれていることが分かった。そこで彼女はうしろへさげられた。

運命を決する死の扉か、望みなう扉か、扉に力が加えられた。扉はかるくひらいた。「それッ」と一同はとびこんだ。あツと目を見はるほどの宏こうだい大な実験室だった。

その部屋のまん中に、谷博士が椅子に腰をかけている。

「あ、谷博士だ！」

警官よりも少年たちが、先に博士の前へとんでいった。意外、また意外。

博士は荒あらなわ縄で椅子に嚴重にしばりつけられていると思いのほか、博士をしばっているものは見えなかった。博士はしずかに椅子から立ちあがった。

「おお、君たちはわしを心配して、とびこんできてくれたのか。

うれしいぞ」

博士は少年たちをむかえて、なつかしそうにそういった。

「谷博士、ここに來られた皆さんも、ぜひ先生を無事にお救いしなくてはならないと、危険をおかして來られたのです。こちらが氷室検事です」

「やあ、氷室さんですか。ご苦労さまです。あつくお礼を申し上げます」

博士は手をのばして、検事と握手した。

「博士、目はどうされたんですか。繃ほうたい帯をとっておいでですね。もう目はお見えになるらしいですね」

戸山君が、さつきからふしぎに思っていることを、博士にたず

ねた。

「ありがとう、目はすっかりなおったよ。もうよく見えるようになった。わしはうれしくてならない」

「それはよかったですね。おからだの方も、病院にいられたときとちがい、ずっと、お元氣に見えますが……」

「はははは、わしの家へもどつて来たから、元氣になったんだね。やっぱり自分の家が一番くすりだ」

「ああ、そうですね」

博士と少年の話を、もどかしそうに聞いていた検事は、

「もし、谷博士。職権をもつておたずねいたしますが、ここに怪人がいたはずですが、今どこにおりますか。お教えねがいたい」

と、怪物X号の存在を質問した。

「おお、そのことじゃ。わしは、諸君につつしんで報告する。あの怪物は、わしの手でもってしとめたよ」

「しとめたとおっしゃるのですか。すると博士が怪人をとりおさえたといわれるのですか」

氷室検事は、博士のことを信じかねた。

「そうですわい。お疑いはもつともじゃ。わしは諸君に、その証拠を見せます。それを見れば万事はお分かりになろう。こつちへ来たまえ」

博士はそういうと、うしろ向きになって、奥の方へ歩きだした。それツと、検事は部下たちに目くばせして、博士のうしろに油ゆ

断^{だん}なくついていかせた。検事自身は博士と並んでいく。

「怪人はどこにいるのですか」

「冷蔵庫の中においてある。この部屋だ。今開ける」

それは大金庫の扉のような見かけを持って背の高い金属製の大扉であつた。博士は扉の上の目盛^{めもり}盤^{ばん}をいくつかまわしたあとで、ハンドルを握り、ぐツとまわして手前へ引いた。すると大きな扉はかるくひらいた。中からさツとひえびえとした気流が流れだして、検事たちの顔をなでた。

「大した低^{てい}温^{おん}ではないから、そのままおはいりなさい」

博士は先頭に立つてはいった。一同は気味わるいのをがまんして、うしろに従った。

中はたいへん広く、中くらいの倉庫ほどあつた。博士はずんずんと奥へはいつて、そこにある小部屋の引き戸をあけて、その中へはいつた。がらんとした殺風景な棚ばかりの部屋であつた。その棚の一つを博士は指さした。

「ほらこれだ。これが君たちが探していた悪漢の死体だ」

怪人の死体とは！

なるほど、カンバスの布をかぶつて棚の上に横たわっているのは、人間ぐらいの大きさのものだった。博士はカンバスをめくつた。

「あッ、たしかに火辻軍平だ」

死刑囚だった火辻軍平のからだにちがいない。よく見ると頭蓋

がひらかれ、脳髓のはいつていたところはからっぽだ。

「わしは、責任を感じています。わしの作ったX号という電^{でん}腦^{ぞう}は、死刑囚火辻のからだを利用していたのだ。電腦はこの中にはいつていたのだ」

と、博士は、空^{くう}虚^{きよ}な頭^かの殻^{から}の中を指さした。

「そのX号の電腦とやは、どうしたんですか」

「うむ、それこそおそるべきものなのだ。わしはX号を高圧電氣によって殺した。そして今は死んでしまったX号の電腦はここにしまつてある」

そういつて、別の戸棚をひらいた。そこには大きなガラスの器に嚴重に密封せられて、脳髓のようなものが保存されていた。

「これが、氷室君たちを悩ませ、わしを苦しめた恐るべきX号の死体なんじゃ。もうこれで諸君も天下の人々も安心してよいのじゃ」

「ふーん、これがあのおそろしい力を持っていたX号の電脳ですか」

検事たちは、目をガラス容器に近づけて歎息たんそくをついた。人間の脳髓によく似ている。しかし色が違う。これはいやに紫がかっている。人間の脳髓は灰色だ。またこの電脳は人間の脳髓より一まわりも大きい。

「これで安心していいわけかな」

「どうだかなあ」

五少年のうちの戸山君がそつと首をふつて横目で谷博士の顔をじろりと見た。

博士の悔悟^{かいご}

「やれやれ、谷博士は無事にこの研究所へ帰って来られたし、おそろしい超人間X号は、息の根をとめられてしまったし、これで長いあいだの怪事件も、すっかりかたづけましたな。これでわしらも大安心じゃ」

村長の角谷^{かくや}岳平^{がくへい}が、そういつて大きなため息をついた。

「いや、ほんとうに、みなさんにご迷惑をかけてあいすまんことでした。これからの私の仕事は、みなさんたちを幸福にするような方向へ進めて行くことを誓^{ちか}います」

谷博士は、これまでの気むずかしい態度をひっこめ、悔悟した罪人のように、しおらしいことをいった。

氷室検事も、この場の調子に引きこまれたものと見え、

「まことにけっこうなことです。博士の方にも、また各村の住民諸君の方にも、今回の事件についてそれぞれ言い分はあると思うが、ここで水に流して、双方^{そうほう}仲よくやつてもらいましょう。どうか博士も、今後はあのX号のような、世間に迷惑をかける怪し

いものを作らないように気をつけてください」

と、訓戒くんかいのことばをのべた。

「それはよく分かっています。あいすまんことでした。これから、この土地がうんと栄えるように、私はすばらしい事業を起こそうと考えているのです。それが世間をさわがせた私のお詫わびのしるしです」

谷博士は、涙をこぼさんばかりにして、そういった。

すこしはなれた場所に、五人の少年たちはかたまっていた。博士が、しきりにあやまっているのを聞いた少年たちは、おたがいの顔を見あわした。

「ねえ、谷博士は、いやにあやまっているじゃないか。あんなこ

と、あやまらないでもいいと思うんだがなあ」

「谷博士は、目があいてから、人がらがかわってしまったね。目が見えないときは、もっと気むずかしい人だったがね」

「目の見えていた人間が、急に目が見えなくなると、あんなにいらいするものだ。その反対に、目があくと、たいへん朗らかなる。心持ちがゆったりとするんだよ」

「そうかしら。でもぼくは、あの気むずかしい博士の方に親しみが持てる」

「それはそうだ。どういうわけだろう」

「どういうわけだろうかねえ」

少年たちが、こそこそ、こんな会話をしているとき、谷博士の

前へ、少女がつかつかと出ていった。もちろんこの少女は、例の山形警部だった。

「谷博士、私をもとのからだに戻してください。こんなふうには、少女の姿で、いつまでも置かれるのはかありませんよ。私は我慢をしますから、すぐ手術をしてください」

山形警部の電脳を持った少女は、そういつて博士に訴えた。

これには、まわりに立っていた氷室検事をはじめ同僚や部下の警官たちも、大いに同情した。

「さあ、それはわたしには自信がないのですがねえ」

と、博士は、困った顔をして見せた。

「なぜです。それはなぜですか、私をこんな姿にしたのは、博士、

あなたじゃありませんか」

「わしではない。X号がやったのです」

「でも、あなたが指導しました。あなたが手術のやりかたをX号に教えなければ、私はこんなからだにかえられなくてすんだのです」

「わしは、X号に強^しいられた。そしてX号はわしの脳の働きを盗んだ。憎^{にく}いやつだ」

「だから、博士、あなたは、私をもとのからだに直すことができますのです。私のもとのからだは、あの冷蔵庫にちゃんとそのままになって保存されています。さあ、早く、あのもとのからだへ私の脳髓を移しかえてください。博士、お願いします。私は、こん

な女の子のからだで、これ以上生きていられません」

娘姿の山形警部は、泣いて谷博士に訴えた。

だが、博士は首を左右に振った。

「お気のどくには思うが、すべては、X号のやったことです。わしには、そんな乱暴な手術をする勇気がありませんわい。わしに、それをせよといつても無理というものだ」

博士は尻ごみをする。

山形警部は、博士にすがりついて、いよいよ気が変になったようになつて頼みこむ。それを見るに見かねて氷室検事も口ぞえをして、博士に頼んでみた。

ようやく博士は、こういった。

「それほどいわれるならば、いつしかわしの気持ちさが非常によくなり、からだの調子も上々の日に、思いきつて手術をしてあげよう。それまではおとなしくして待ちなさい」

これだけの口約束が、くちやくそく山形警部をたいへん喜ばせた。彼はもとのからだに戻る希望を持てる身になったのである。

さんかくだけ
三角岳メトロポリス

それ以来、X号の乱行は、まったく見られなくなった。

そうでもあろう、X号の本尊である電臓は、谷博士の手によつて死刑囚火辻の遺骸いがいから取りだされ、そして活動を停止され、博士の冷蔵室の中に、嚴重に保存されてあるのだ。

火辻の遺骸は、あのととき氷室検事の一行が引きとつていった。これでもうX号の活動は完全にとまってしまったわけである。

谷博士は日ましに元気になつていった。そして博士があのととき氷室検事にちよつともらしたとおり、このあたりの村々を榮えさせるための空くう前ぜんの大事業に手を染めたのだつた。

まず、道路の修しゅう築ちくが始まつた。

山を切りとり、崖がけを補ほき強ようし、傾斜けいしゃのゆるやかな道路を作つていった。どんなせまいところでも六メートルの幅はばを持つている

道路をこしらえた。重要な道路は幅が三十メートルもあった。

こんな道路を作るために、大じかけの土木工事どぶくこうじが行われた。資材も、びつくりするほどたくさんいった。道路とともに、橋もこしらえねばならず、トンネルも掘らねばならなかった。

こういう仕事を、谷博士が、全部自分で引きうけてやった。

もつとも、博士が一人でやったのではなかった。働いたのは、博士が製造した機械人間ロボットたちだった。

谷博士に化けていたX号も機械人間を作って売りだした。今、谷博士も、同じようにたくさんの機械人間を製造した。どっちも同じことをやった。しかしこんど谷博士の作りだした機械人間は、非常によく働き、そして正確に行動した。からだの大きさも、ず

つと大きかった。顔は同じような機械的な円い同じ目鼻をつけた顔であつたが、博士の作つた機械人間は、滑稽こっけいでとぼけた童子どうじのような顔つきをしていた。だから村人たちから親しみの目で見られた。

こうして道路ができあがると、こんどは土地の人のために、すばらしい家を建ててあたえた。

地上は五階もあり、地階が三階あるのが普通であつた。耐火たいかた耐震いしんの構造を持つているばかりか、冬季には寒がらないで住ん

でいられ、家の中は春秋と同じようにらくに仕事や生活ができるように、べんりで能率のいい暖房装置だんぼうそうちが建物についていた。

農民たちや炭焼きや猟師りようしたちが喜んだことは、いうまでもな

い。

この大建築事業も、たくさんしきの機械人間が使われ、博士はいつも指揮をとっていた。

その次には耕地整理こうちせいりが行われた。それと同時に、すべての農具も農業も、機械化された。つまり、耕地は一度みんな一つにして考え、次にそれを機械農具で耕作するのにつごういいように再さいぶ分割んかつされた。だから、まがった畦あぜを持った耕地はなくなり、また妙な複雑な形をした耕地もなくなった。

だから耕作は二重三重にらくになり、収しゅう穫かくは桁けたちがいが増大した。農民たちの働く時間はすくなくなつて、自分が自由に使える時間がたくさんできた。その時間を、農民たちは、楽しく音

楽の練習に使ったり、読書に利用したり、工作に興きようじたりした。

ある家では、そんなにたくさんの家族が、耕作にあたらなくて
もいいというので、若い人たちを都会へ出して、工業方面で働か
せることにした家もある。

水をひくこと、太陽熱を利用すること、電気栽培でんきさいばいのこと、通
信機を備えつけること、運搬うんぱん用の自動車やヘリコプターを備え
つけることなど、これの一つ一つ説明していったら、たいへんな
紙数があるので、ここにはくわしくのべないことにする。

谷博士は、村がすっかりりっぱになったあとで、こんどは研究
所を改築した。それはこれまでのものにくらべて、たいへん大き
なものであった。地上から上まで、二十四階もあった。地階は十

階だというが、それよりもっと深いといううわさもあつた。そしてこの建物は異様な形いようをしていて、だれも一度見ると忘れられない。しかし、村民の中には、こんどの研究所の建物の形が、どうも気味がわるくてならない、やっぱり前のきちんとした塔の方が、感じがよかつたという者もあつた。

とにかく、この塔を中心にして、この三角岳地方は、都会にもまだ見られないほどのすごい機械文化都市が建設されたのであつた。そしてなおおどろくことは、これらがわずか半年のあいだに完成したのであつた。

谷博士は、毎日五百体の機械人間を使つたということだが、もちろんそれは原子力を利用して、仕事の分ぶんりょう量も、ふつうの人

間には見られないほど大きかったというものの、とにかく、この谷博士の仕事の手ぎわをまねできる者は、ちよつとなかろうと思われた。

博士は、それだけで仕事をやめはしなかった。最新の科学技術を利用して、奇抜きばつな計画を進めていった。それはどんなものであったか、章をあらためてお目にかけてよう。

ものいう木

ふたたび夏休みが来た。

登山者は一日一日多くなつた。

三角岳の機械都市のことは、ほうぼうにまで鳴りひびいて、学生たちは、今年の夏はぜひそれを見学しようというので、足をこつちへ向ける者が多かつた。

やまだ 山田君と きみかわ 君川君という大学生が、やはり三角岳を こころざ 志して登つていった。

ところが二人は、あまりふざけちらして歩いていたので、とうとう道を踏みまちがえてしまった。太陽の輝 かがや いている方向が、どうも自分たちの考えている方角と違っているのだつた。あわてて地図をひろげて探したが、地図と現在の位置とが合わない。すつ

かり心細くなってしまった。太陽もだいぶん下へさがっている。へたをすれば、この山の中に野宿のじゆくしなくてはならない。

「困ったねえ、どこへ迷まよいこんだのだろう」

と、山田君がなげいた。

「もう研究所の塔が見えていいはずなんだが、さっぱり見えやしないよ。いったい、どっちへ行ったら三角岳の研究所へ出られるんだか、どうしたら知れるだろうね」

「さあ、分からないねえ」

二人が困りきって、ともにしぶい顔になったとき、どこからか、人の声が聞こえた。

「もしもし、あなたがたは三角岳の研究所へいらっしやるんです

か」

それは美しく澄^すみきった若い女の声であつた。二人は顔を見あ
わせた。

「だれかが、ぼくたちに話しかけたじゃないか。だれだろう。ど
こにいるんだろう」

「ぼくも声は聞いたが、あたりには、ぼくたち二人きりで、ほか
にだれもいないじゃないか」

「じゃあ、気のせいかな。だれかに道を教えてもらいたいと思う
ものだから、村の人の声が聞こえたように思ったのかしらん」

「それにちがいない」

すると、再びその美しい澄みきった女の声が聞こえた。

「もしもし、それなら、あなたがたは道をまちがえていらつしやいます」

「ははア……」

二人は顔を見あわせて、あたりをきよろきよろ。しかしやつぱり自分たち二人のほかには、何者の姿も見えない。目につくのは、すこしうしろの道ばたに、一本の大きな木が立っているだけであつた。

「もしもし、あなたがたは、ここから道を八百メートルばかり引きかえすのです。すると地下壕ちかごうの中にはいります。そこであなたがたは、一階上にあがるのです。そして4と書いてある方向ほうこうをほう見つけ、その方向へほとんどん歩いていらつしやれば、まち

がいなく、三角岳研究所の下へでます。お分かりですか」

「どうもありがとう」

二人の大学生は、話の途中で、その声がうしろの立ち木の中から聞こえてくるのに気がついた。二人はその前まで行って、木を仰い^{あお}で礼のことばをいった。ふしぎなことだった。

「失礼ですが、お嬢さんは、どこにいて、われわれを見ていられるのですか。お嬢さんの声が、この木にとりつけてある高^{こうせい}声^{いき}器からでて来ることは分かっていますかね」

と、山田君は、立ち木に話しかけた。彼の考えでは、遠くの場合に、そのお嬢さんが望遠鏡を持って、こつちを見ており、道に迷った人を見つけると、電話のスイッチを入れ、電話装置でわれ

われに話しかけるのだと思った。

「私は、ここにいます。あなたが見ていらつしやる一本の立ち木こそ、私の姿です」

女の声は、そういった。しかしそんなばかしいことを、大學生たちは信じかねた。木が人間の声をだすなんて、おとぎばなしだ。

「ほほほ、私のいうことを、うそだと思っていらつしやるのね。では、もつとはつきりお分かりになるように、私は動いておみせしますわ。あなたがた、どうぞこちらの方へ、道を引きかえしていらつしやつてください」

そういう声とともに、その立ち木は枝をぐつと曲げた。それは

人間が、腕をさしのばして道を教える^{かつこう}恰好と同じに見えた。

「たははは」

「うふふふ」

二人の大学生は、その場に腰をぬかしてしまった。彼らは、山の中で、お化け^ばの木に出あつたと思つたからだ。この次は、二人ともこのお化けの木にたばられてしまうだろう。

「ほほほ」と、お化けの木は、枝をゆるがして葉をさらさらとふるって笑つた。

「ここは、三角岳のメトロポリスです。あなたがたは、ここへいらつしやったら、世界第一の文化都市へ来たと思ひにならないといけません。私たち路傍^{ろぼう}の立ち木にも、人間の脳髓と同じよう

な考える器官もあれば、発声の器官もあります。これはみんな市長の谷博士がこしらえて、私たちに付けてくださったのです」

大学生はおどろいて、引きかえした。立ち木が人と同じような感覚を持つているなんて、そんなことがあっていいだろうか。もつとも谷博士の人工電臓じんこうでんぞうのことを知っている者なら、それがうそではないと思うだろう。

「この三角岳メトロポリスには、われわれ木のほかに、昆虫こんちゅう、鳥、小さい獣けもの、石などにも、人間と同じように考えたり、お話をうけたまわったり、ご返事できる者が、たくさんいるのですよ」

「ふしぎだ。それはいったい何のためです」

「生化学の研究が、生命しこうりよくと思考力を持った電臓を作りあげるこ

とに成功したのです。これによって、あらゆる物品は、生命と思考力を持つことができるのです。谷博士のすばらしい研究です。こうして種あかしをしてしまえば、ふしぎでもなんでもありませんでしょう。ねえ、学生さん」

「ありがとうございます。では、お別れます」

大学生は立ち木に礼をいって、いそいでそこを立ちさつた。こんなおそろしい目に出あったのは始めてである。二人は、三角岳研究所の見えるところまで来たけれども、研究所の建物の奇妙きみょうな形を見ると、おそろしさが急にこみあげて来て、そっちへ廻つて行くのはやめにした。二人は、どんどん山をおりていった。

地獄じごくの光景こうけい

谷博士の評判は、一時大したものだった。それはこの三角岳村が、最新文化都市に生まれかわり、村人の生活が非常によくなつたころのことである。

ところが、その後になって、博士の評判は少しわるい方へ引きかえした。

それは博士の作るものが、あまり奇抜きばつすぎたためであつた。村人にとって、ものをいう木や、いいつけた用事をしてくれる甲かぶと

虫^{むし}や、知らないうちに告げ口をする雀^{すずめ}や、歌をうたうのが上^{じょう}手^ずな柱などは、はじめのうちこそふしぎふしぎと手をうって、ほめたたえたけれども、それから時がたつと、そういうものには、どうしても親しめなかった。いや、親しめないばかりか、気味がわるくてならない。村人たちは、うつかりしたことがいえないのだ。いつどこに、スパイのような木や石や小動物がかくれているか知れないのであった。

腰掛^{こしかけ}に腰をかけて、仲よく二人の人間が話をしていると、その腰掛が、とちゅうで怒^{おこ}ってしまつて、あッというまに、腰掛は二人をそこへ尻餅^{しりもち}をつかせて、どんどん部屋から逃げていってしまうのだった。

そのかわりべんりなこともあった。さあ、引越^{ひっこ}しだと主人が命令をすると、家中の道具が、自分で動きだして、移^{いてん}転^{さき}先の家まで歩いていくのだ。運搬^{うんぱん}用のトラックなんか不用だ。しかしそのかわり、気味がわるいといったらないのだ。

「だんだん化けもの村になるよ。困ったことだ」

「気がいらいらして来てたまらない。昔の村はのんきでよかったね」

そんな会話が、ひそかに村人のあいだにとりかわされるようになった。

谷博士の行きすぎたやりかたが、こんなに評判をわるくしたことは明きらかだ。

だが、当の谷博士は、こんなことを、行きすぎたこととは思っていない。博士は、もつともつとこの三角岳メトロポリスをべんりな世界にしたいと思つて、さらにいろいろと研究と工夫を進めていたのだつた。

例の五人の少年たちは、その夏、正式に谷博士の研究所で実習^{ゆうしゅう}させてもらうことになつた。そして今、研究所で起きふししている。九月の半ばごろまで、実習はつづくはずであつた。

はじめ少年たちが実習をさせてもらいたいと谷博士に申しこんだとき、博士はいい顔をしなかつた。その場でことわつた。しかし少年たちはあきらめないで、また申しこんだ。そうしてその結果、戸山君たちの望みは、かなえられたのだ。

この少年たちが三角岳の研究所で寝起きねおするのは、博士から、最新の科学技術の教えを受けるのが目的だった。しかしそのほかに、もっと少年たちが力を入れていることがあった。それは、かねて少年たちが胸の中にひそめていた不審ふしんを明きらかにすることだった。その不審とは、読者諸君もごぞんじのように、谷博士の人々がどうしても気になってしょうがないことだった。

博士は、姉ガ岡病院で、目の療りよう養ようをしているころまでは、戸山君たち五少年が、ほんとうに心から親しめる博士だった。ところが、博士がX号に誘拐ゆうかいせられて、この研究所へもどつて来、そしてその両りよう眼がんがはつきり見えるようになって以来、博士はたいへん元気になったけれど五少年には親しみにくいものとなつ

てしまったのだ。

少年たちは、かたい約束をして、博士の正体をくわしく調べることになった。そして五少年が研究所で探偵みたいなことをしていることは、博士にさとられないように、深い注意を払うことになった。

少年たちはひそかに博士の日常生活に目を光らせていたのだ。

あるとき、少年たちは、博士が夜になってすべての扉にげんじゅ厳重に鍵をかけこんだのを知った。

なにか秘密の実験を始めるのに違いないと思われた。

少年たちは、かねてそういうこともあろうと思つて、その実験室の中を、二部屋向こうからのぞくことのできる屈折式くっせつしきの望ぼうえ

遠装置んそうちを作っておいた。その夜、これが始めて役に立ったのである。

その望遠装置を通して、少年たちが見たものは何であつたろうか。

それは身の毛もよだつような光景であつた。谷博士がまっ裸ばだかとなり、そして高压電気の両極の間に逆ささかにぶらさがつて、ものすごい放電ほうでんを頭にあげせかけているのだつた。博士の顔は、赤鬼のようになつて輝き、頭髮は一本一本、針山のように逆立さかだち、博士の全身の筋肉は、蛇のむれのようにひくひくと痙攣けいれんしているのだつた。

「あッ、おそろしい。ぼくは、もう見ていられないよ」

「なぜだろう。なぜあんなことをされているのだろう。だれが谷博士を、あんな目にあわせているのだろう」

少年たちには、この地獄のような光景が、どうして演ぜられているのか、見当がつかなかった。

ようかいはかせ
妖怪博士

ところが、谷博士は何も悪者のために、こんな恐ろしい目にあわされているのではなかったのである。

広い実験室には、博士のほかに、人一人見えはしなかった。ただ一人の機械人間ロボットが、機械の前に立っていただけであつた。

しかし、ふつうの人間ならば、百万ボルトの高圧電流を頭にあびては、一分、いや一秒でも、生きていられるはずはないのに、博士は平気で、にたにたと悪魔のような笑いを浮かべているではないか。

しかも博士は、高い天てんじょう井つるから吊したロープの端の輪に両足をかけ、機械体操の要ようりよう領で、さかさにぶらさがっているのである。

そのような恐ろしい放電は、六分ぐらいつづいた。

「もうよからう、電気をとめてくれ」

博士はひくい声でうめいた。

「先生、もうよろしいですか」

機械人間は、念をおして、機械のスイッチを切った。

実験室の中は一瞬、深い暗闇くらやみに包まれたが、これはどうした

ことだろう。博士の全身は夜光虫やこうちゅうのように、ボーツと青白い光

りを放ち、髪の毛は針ねずみのように逆立さかだつて、その一本一本か

らは、ぱちぱちと音を立てて、ものすごい火花が飛んでいるではないか。

「一……二……三……」

博士は、ひらりと宙を飛んで、空中でとんぼがえりをする、床の上にまっすぐ降り立った。

「ああ、これでやっとせいせいした。たまには電気をかけないと、どうも疲れてやりきれないよ」

まるで、あんまかマツサージでも、してもらったというように、博士はにやにやと笑って、腕に力こぶを作り、二三度深呼吸をしていたのであった。

「おい、あの五人の少年は、もう寝たかね」

博士はタオルで、からだの汗をぬぐいながら、機械人間にたずねた。

「はい、もう部屋にかえって寝たと思いますが、見てまいりましょうか」

「きょうはおそいから、もういいよ。しかしあの五人の行動には

ちよつとふにおちないところもある。あすからあの部屋に、電^{でんぞ}臓^うをしかけて、その行動をいちいち報告させるようにしてくれ」

「はい。かしこまりました。何にしかけましょうか」

「テーブルか、壁か、そうだ。壁がよかろう。むかしから壁に耳あり、というからな。はっはっは」

博士は、自分のしやれが、愉快でたまらないというように、両手をひろげて、大声で笑った。

「おい、着物をくれ」

「はい……」

機械人間は、そばのテーブルの上においてあつた博士の着物をとって渡した。じつにべんりな機械である。人間ならば、こんな

真暗闇まつくらやみの中では、何も目に見えないし、一步も歩けはしないのに、この機械人間は、ちゃんと迷いもせずに、歩いたり、品物を見つけたりするのである。

「サルはどうしている。食物はよく食べているかね」

「はい。どうしておれを、こんな檻おりの中へ入れるんだ、などというて、大あばれにあばれておりますが、大丈夫ですよ。くたびれて寝てしまったようです」

このふしぎな場所では、機械人間ばかりか、ふつうの動物や植物、いや生命を持たない道具までが、動いたり、話したりするのであったから、サルが話をするというのも、けっしてふしぎはないのであるが……。

「では、あすの準備はよろしくたのむ」

「承知しました」

「それでは寝てよろしい」

「お休みなさい」

機械人間はピヨコリと腰をかがめて一礼すると、扉を開けて、廊下へ出て行つた。

「さあ、寝る前に、いっぺん、サルにあいさつをしておこうか」
博士は、ぶきみな笑いを、唇のあたりに浮かべると、実験室の壁の前に立って片手を高くあげ、大声で叫んだ。

「ひらけ、ゴマ！」

これはどうしたことだろう、何もなかった白^{しら}壁^{かべ}には、ポカリ

と畳一畳ぐらいの大きな穴があいたではないか。博士のからだは、音もなくその穴の中へと、吸いこまれて行つた。

「とじよ。ゴマ！」

中から聞こえる声とともに、壁の穴は、また音もなく、もとのようにとじてしまったのであつた。

恐ろしい疑い

一方、五人の少年は、望遠装置にうつつた、博士の恐ろしい姿

に、すっかりおどろいてしまったのである。

「戸山君、いったい博士はどうしたのだろうね。どんな悪者のために、あんな目にあわされているのか知れないが、みんなで助けに行こうじゃないか」

「うん……」

そういいながらも、戸山君は、望遠装置からはなれようとはしなかった。

「戸山君、どうしたんだい。早く行こうよ」

「君たち、これはたいへんな話だよ。ちよつとあわてずに待ちたまえ。いったいあれはほんとうの谷博士かしら」

「そんなこと、あたりまえじゃないか。谷博士でなかったら、だ

れだというんだい」

「もしかしたら、……X号が博士のからだの中にしのびこんで……」

このおそろしい想像に、少年たちは冷水をあびせかけられたように、震えあがってしまったのだった。

「どうして……どうして、そんなことがわかる」

「だって、君、ふつうの人間なら、百万ボルトの電流を頭にかけていたら、一分一秒でも、生きていられるわけがないじゃないか。それなのに、博士はにやにや笑っている。ほんとうの博士なら、どんなに不死身^{ふじみ}だって……」

だれも答えるものはなかった。

「いつか博士はぼくたちに、病院で、X号のことを話してくれたね。博士が作った人工生物、電でんぞう臓は、三千ボルトという高压の電気をあびて、はじめて生命力を持ったんだ。そして初めは、機械人間のからだの中にはいつていた。それから火辻ひつじぐんぺい軍平の死体の中へはいりこんだ……」

四人はがたがた震えていた。

「そんなことができるくらいなら、X号が谷博士を殺して、その屍しがい体の中へはいりこみ、われわれの目をごまかすことも、ちつともむずかしいことはないだろう。そうだよ。きっとそれにちがいないとも。それだから、ああして百万ボルトの電流をあびても、平気で生きていられるんだよ」

「そうかも知れないね。だけど、それではぼくたちは、どうすればいいんだい」

「X号というのは、どんなことを考えているのか。ぼくたちにはまだよく分らない。だが、こうしてこのあたりが、まるでお化けばかり住んでいるような、ふしぎな国になっているのは、X号が何かをたくらんでいることをものがたっている。これはこのままにはしておけないよ」

「それではどうすればいいんだね」

「なんとかして、X号の秘密を探りだして、みなに報告するんだ」
「どうして探るんだい」

「うーむ。それはね……」

さすがの戸山少年も、その方法には、ちよつと困った様子であつた。何しろこの建物の中では、机が動きだすかも知れず、壁に耳があるかも知れないので、何一つゆだんはできないのであつた。その時である。廊下にことごとくという足音が聞こえて来た。人間の足音ではない。機械人間が、廊下を一人で歩いているのだ。

「やはり機械人間だよ。実験室からこちらへ歩いて来た」

扉を細目にあけて、のぞき見をしていた、少年がふりかえつてささやいた。

「するとさつき望遠装置にうつった機械人間だな……」

戸山少年は、何かしきりに考えこんでいた。

「おや、何も見えなくなつたよ。実験室は真暗まっくらになつて、もう

博士の姿は見えないよ」

望遠装置をのぞきこんでいた一人の少年が、おどろいたように叫んだ。

「それじゃあ、実験はすんだんだね」

戸山少年は、唇を血の出るようにかみしめて、しきりに首をひねっている。

「ちよつと、便所へ行くふりをして、様子を見てくるよ」

戸山少年は、みなのとめるのをふりきつて、廊下へとびだしたが、まもなく帰って来てふしぎそうにいいだした。

「どうしたのか、実験室の戸は開いているし、中にはだれの姿も見えない。しかし、たしかに博士はあの部屋から出たはずはない

から、どこか秘密の抜け穴がつくつてあるにちがいないよ。みんなでその秘密をさぐろうじゃないか」

「うん、ではみんなで行ってみようよ」

この中で、どんな恐ろしい目にあうとも知らず、五人の少年は、足音をしのばせて、まっくらな実験室の中へしのびこんだのだった。

ひらけゴマ

実験室の中には、人間一人いなかった。壁のスイッチをひねつても、部屋の中には、大きな放電装置と、いくつかの機械が並んでいるばかり、博士はこの部屋から出て来たはずはないのに、今その姿はどこにも見えないのだ。

「まさか、いくらX号だといって、消えてなくなるわけではないだろうにね」

この少年たちは、谷博士を、X号の化けたものときめこんでいるのだった。

「いや、きつとどこかに、秘密の抜け穴があるんだよ」

「でも、それなら、なんだよ。壁なり床のどこかに接ぎ目があり、そんなもんじゃないか。このとおり、床は厚いコンクリートだし、

壁もそのとおり、探すだけ、むだだぜ」

「そんなのあたりまえの考えかたさ。ここの建物は、まるで化^{ばけ}物屋敷^{のやしき}だから、どこにどんなかくし戸や抜け道があるかも知れないよ」

戸山少年は、あくまで自分の考えをすてようとはしなかった。

だがいくら壁をたたき、床をはい、機械や戸棚のかげや下を探しまわっても、そんな抜け穴は、どこにも発見できなかった。

「とてもだめだよ。もしそんなものがあつたとしても、ぼくたちにはぜったいに見つからないようになってるんだろう」

少年たちは、もうすつかりのぞみをなくした様子^{ようす}であつた。

「ちえツ、残念だなあ。どこかにはちがいないんだがなあ。

むかしのアラビアンナイトというおとぎばなしなら、こうして立つて壁へ向かつて、何か呪文じゅもんをとなえると、大きな岩が動きだして、宝のかくし場所への道がひらくんだぜ」

「どんなふうにするんだい。やってごらんよ」

「あの呪文はなんといったつけない。そうそう、たしかひらけゴマと叫ぶんだよ……」

「あッ、戸山君、壁が、……壁が動きだしたよ……」

少年たちは顔色をかえて、身ぶるいしながらたがい^{あいこ}に身をすりよせた。それもそのはず、戸山少年が、ひらけゴマ、という合

言葉とばを口走った瞬間、目の前の壁がぽかりと音もなく、大きな

口をあけたのだ。

「これだ。これだったんだ。あの物語と同じようにひらけゴマといえ、秘密の通路への入口がひらくんだよ」

「じゃあ、どうする」

「このままにしちやおけないよ。いったんこうして入口が見つかった以上、最後の最後まで博士の秘密を見やぶってやろうじやないか」

「よし、では行って見よう」

戸山君のほか四人の少年は、恐ろしさにいくらか二の足をふんではいたが、戸山少年があまり元気がよかったし、X号の秘密を見やぶってやろうという好奇心こうきしんでいっぱい、この中にどんな恐ろしいものが、かくされているかなどということは少しも考え

ずに、壁の中へとふみこんだのだった。

だが、そこはまるで押入れおしいのようなせまい穴で、右も左も前も上も下も、みな行きどまり、どこへ行きようもなかったのだ。

「戸山君、これはだめだよ。きつとちがうところへはいったんだ。このとおり、中には何もないじゃないか。出ようよ」

「いや、きつとここには何かあるはずだ」

そのことばが終るか終らぬうちだった。

「あなたがたはどこまで行くのですか」

どこからともなく、ひくい声が聞えて来たのである。

「谷博士のところへ行きたいんだ」

戸山少年は、ときようをきめて、元氣よく答えた。

「それでは戸をしめてください。ここをしめてもらわないと、私は動けませんよ」

だれが話しているかは知れないが、人間のものとは思われなかった。

ここまで来てひつかえしては、かえって怪しまれることになる。だがまぐれあたりで、壁の扉はひらいたものの、扉をしめる合言葉までは知らないのだった。だが、「ひらけゴマ」ということばで扉がひらいたのだから、あのアラビアンナイトの中の文句どおりに、「とじよゴマ」といって見たらどうだろう。

こう思った戸山少年は、手をあげて叫んだ。

「とじよ、ゴマ！」

その瞬間、音もなく、壁はまたもとのようにぴたりととじた。

そしてその小さな部屋はたちまち、矢のように下におりはじめた。エレベーターだ。この部屋はそのまま、エレベーターになっていたのだ。そしてさつき話しかけたのは、このエレベーターだったのだ。

何十メートル、いや何百メートルくだったのだろう。いつの間にか、建物の下の丘の中には、こんな深い穴が掘られてあったのだ。

五六分もすぎたころだろうか。エレベーターはしずかにとまった。

「はい、着きました」

こんどは何も合言葉をいわなくても、目の前の壁はしずかにひらいた。そして五人の目の前にはせまい廊下がつづいていた。

人かサルか

五人がその廊下へ出ると、うしろの壁は、音もなくとじた。

さて、これからどこへ行ったらよいのだろう。廊下の両がわには、いくつも部屋が並んでいるが、博士がどこにいるかは、ぜんぜん分からなかったのだ。むやみに扉を開けてまわるわけには行

かないし、それにまた、扉がかんたんにはひらくかどうか疑問である。

だがこうしていても、しかたがないから、ためしに一番手前の扉の引き手を廻してみると、扉は手ごたえもなくすーッと開いた。しかし鍵がかかっていないだけあつて、中は空、何もはいつてはいないのである。

「この部屋はだめだね。何もないよ」

「それでは別な部屋を探そうや」

戸山少年は先に立つて、部屋を出ようとするほかの少年をおさえて、廊下の様子をのぞいたが、思えばこれがよかったのだった。その時、右がわの三番めの部屋から、谷博士がぶんぶん怒った

ような顔をして、ポケットに手をつつこんで出て来たのである。

もし五人がここで見つかったら、どんなひどい目にあったかも知れないだろう。だが博士は、この部屋に五人の少年が、かくれていることには気がつかず、エレベーターの方へ行ってしまったのだった。

「しまった。みんな、たいへんなことになったよ」

さすが元気にみちみちた、戸山少年も、その時はぞツとしたのである。

「どうしてなんだい」

「だって、博士がエレベーターへ乗って、上へあがってしまったろう。そして博士が実験室へ出てしまったら、エレベーターは上

へあがりきりになるんだから、ぼくたちは帰るわけには行かないじゃないか」

なるほど、このエレベーターは、ボタンをおすと、ちゃんとその階まで、あがったりおりたりするような、ありふれたものとはちがうのである。

「こまつたな」

「みんなどうする」

五人が頭をあつめて相談しても、これという名案は浮かばなかった。

「戸山君が、あんまりむちやなことをやりだすから、こんなことになるんだよ」

「そんなことをいったって、いまさらどうにもしようがないよ。ここまでせっかく来たんだから、博士の出てきた部屋には何があるか、まずそれから探ることにしようじゃないか。そのうちには、また名案も浮かぶだろう」

五人は部屋から飛びだして、いま博士の出てきた部屋の扉の前に忍びよった。扉の引き手を廻すと、さいわいにこれにも鍵がかかっていない。きつと、まさかここまで来る人間はあるまいというので、博士もゆだんをしていたのであろう。

部屋の中には、大きな檻おりが一つおいてあるだけだった。そしてその檻には、大きなサルが一匹動きまわっていたのである。

日本ザルではなく、オランウータンかチンパンジーの類かと思

われたが、そのサルは五人の顔を見ると、とたんに檻の中で飛びあがった。そうしてうれしそうに、涙をぽろぽろとこぼしていたのである。

「おや、へんだね。サルが泣くなんてことがあるのかしら」

「きつと、目にごみか何かが、はいったんだよ」

「しかし、博士はこの部屋で、サルを相手に、いったい何をしていたんだろう」

少年たちが、部屋の中を、きよろきよろと見まわしていた時だった。どこからか、「戸山君」と、少年の名を呼ぶものがあつた。

「おや、だれか、ほくの名まえを呼んだかね」

「だれも呼ばないよ」

「へんだね。気のせいかしら」

「戸山君、ぼくだよ。ぼくが分からないかね」

なんとなく、聞きおぼえのあるような声だった。だがどこから聞こえて来るかは分からない。

「戸山君、わかった。わかったよ。このサルが、君の名まえを呼んでるんだよ」

一人の少年がおどろいたように叫びをあげた。ほかの少年も思わず、ふりかえって、檻の中のサルを見つめた。

「そうだ。やつと気がついたかね。よく助けに来てくれたね。ぼくだよ。ぼくが分からないかね」

サルは鉄の格子こうしにすがりついて、気が変になったようにわめき

たてているのだった。

「早くここから出してくれ。そうしないと、たいへんなことがはじまるんだ。早く、早く、この檻を開けてくれ」

「あなたはいつたいだれなのですか」

戸山少年は、恐る^{おそ}おそる、このサルにおうかがいを立てたのである。

「ぼくは谷だよ。X号のために、こんな目にあわされたんだ」
サルの答えは、五人の少年を、心から震えあ^{ふる}がらせたのだった。

谷博士のものがたり

「あなたは、ほんとうに谷先生なんですか。それでは、いまここから出ていった、谷博士はいったい何者でしょう」

戸山少年は、うんとおなかに力をいれて、十分念をおしたのである。

「わからないかね。君たちは、あれがX号の化^ばけていることに気がつかなかったのかい」

サルは檻の中で、じだんだふんでくやしがっている。

「でも、先生は、目をわるくして、ぼくたちの顔をごらんになったことがなかったでしょう。それによく、ぼくたちだということ

が分かりましたね」

何しろ、いままで何度もだまされているので、戸山君もなかなかゆだんをしないのである。

「それはね、目は見えなくても、君たちの声はちゃんとおぼえていたし、それにX号が、君たちがこの研究所に來ていることを話してあつたから、君たちがこの部屋へはいつて來たときには、ちやんとけんとうがついたんだよ」

サルは怒つたようだった。
おこ

「よく分かりました。だけど、この檻はどうしてあけたらいいのです」

「となりの部屋に、鍵が置いてあるはずだから、それをさがして

来てくれたまえ」

戸山少年は、あわてて部屋をとびだして、となりの部屋をさがしたが、あいにくそこには鍵はなかった。ただそこにも大きな檻があつて、中には谷博士と同じ種類のサルがぐうぐうと大きいびきをかいて、眠っていたのである。

「先生、鍵はどうしても見つかりませんでしたよ」

戸山君は、さっきの部屋へかえつて、サル——いや本物の谷博士に報告した。

「そんなはずはないんだが——さてはX号が持っていたかな」
サルはばりばりと歯ぎしりをした。

「ところで先生、先生はどうしてこんな所にとじこめられたので

す」

「それがね、ぼくもゆだんしていたんだ。X号がぼくを病院からさらって逃げたことは、君たちもよく知っているだろう。ところが君たちが、ぼくに化けたX号をにせ者だと見やぶって、この研究所を襲撃したので、X号は火辻軍平のからだにはいつていては危険だと思ったんだね。それでぼくを殺して、ぼくのからだの中へはいりこみ、君たちの目をごまかしたんだ。そしてぼくの脳のうず髓いだけを、このサルの中からだに移して、あとでまた、役に立てようとしたんだよ」

「すると、となりの部屋にいたサルは……」

「あのサルも、ぼくのからだと同じ、人工じんこうのサルだよ。ただむ

こうは、サルの脳髓しか持っていないし、こちらは人間の脳髓を持っているだけのちがいだよ」

「それでX号は、これからどんなことをやりだそうというのです」

「あいつは恐ろしいやつなんだ。智恵の力はふつうの人間とは、くらべものにならないくらいすぐれているが、感情だの、道徳どうとくだのというものは少しも持っていないんだ。あまり自分の力がすぐれているんで、あいつはこのごろでは、少し増ぞうちよう長して来たらしく、地球上の人類を全部殺してしまつて、自分らがそのかわりにとってかわろうとしているんだ」

「そんな恐ろしいことが、ほんとうにできるんですか」

少年たちは、恐ろしさにがたがたとふるえていた。

「できる。X号にならできるとも。君たちは、この地下室をなんだと思うかね」

「さあ、ぼくたちには、よく分かりません」

「X号の秘密工場だよ。あいつは、いつのまにか、機械人間の力をかりて、この三角岳さんかくだけの地下に、十六階の地下工場をつくりあげた。ここはその一番下の階なんだが、この上の十五階の一つ一つでは、ものすごい物ばかりがいま作られている。

ぜったいに防ぎようのない、伝染病でんせんびょうのばいきんだとか、なんの臭いもしない猛烈な毒ガスだとか、いまの人間の力ではまだ完成されていない、すごい威力を持った原子爆弾だとか。さいわい、この工場は、一週間ほどまえにできあがったばかりで、まだ

そんなものの大量生産にはうつつてはいないが、もし一月もほうつておけば、その時は地球上の全人類が滅亡する時だよ」

なんと恐ろしいものがたりだったろう。少年たちのからだは、木の葉のように震えていた。どうしても、これはこのままにしておくことはできない。どんな方法をとつても、このX号の野心は粉砕しなければならぬが、さてその方法は――

五人は、またしてもはっ、とかたずをのんだ。うしろの扉が音もなくひらいて、一人の機械人間がはいつて来たのだった。

ふしぎな機械人間

五人の少年は、その機械人間の姿を見たとき、思わずぞつとしたのだった。精巧せいこうな機械の力で動く、この機械人間の恐ろしい怪力かいりきは、少年たちも毎日のように、自分らの目で見ていたのである。そして機械人間はすべて、にせの谷博士の命令には、ぜつたい服従ふくじゆうして動くのだった。自分たちが、こうして地下室へ忍びこんで、サルになった本物の谷博士と話をしているところなどを見られたら、とうてい命はあるはずがない！

しかし、この機械人間は、五人めがけてとびかかるような気配けはいはなかった。

「戸山君、君たちはここでいったい何をしているんだね」

その声には、機械人間に特有の、きいきいとした金属的な音ではなく、ふつうの人間の声のような、やわらかさがあつた。

「べつに……何も……」

「早く、自分の部屋にかえりたまえ。こんなところでうろろしているところを、博士に見られたらたいへんだ。みんな殺されてしまうよ」

そのことばにも、機械人間ロボットとは思えないような、同情の調子が見えつつある。

「君、君はいったい何者だね」

檻おりの鉄棒につかまって、ものすごい目で機械人間の方をみつめ

ていた、サルの谷博士が、がてんがいかないというふうになぜねた。

「おや、このサルは口をきくんだね。そういうおまえこそいったい何者だ」

機械人間はおこったようであつた。

「きさまらは、X号の一味のくせに、ぼくの正しょうたい体がわからないのか。ぼくこそ、ほんとうの谷博士だぞ」

機械人間は、おどろいたように、二三歩よろよろとよろめいた。
「そんなばかな……そんなはずは……だがいったいそれはほんとうですか」

「ほんとうだったら、どうするんだ」

「そういえば、声もたしかに先生の……これは失礼いたしました。ずいぶん先生を、おさがししていたんですがね。まさか、こんなところにおられるとは気がつきませんでしたから。先生、X号の陰謀いんぼうをごぞんじですか。地球上の人類を絶滅ぜつめつさせて、自分らがそのかわりにとってかわろうという……」

「知っている。知っているとも。X号は気が変になってしまったんだ」

「そのとおりです。先生、早くこの檻から出てください。そして先生のお力でなんとかして、このX号を倒してください。さもないと、あとわずかのうちに、とりかえしのできないことになっていきますから……」

「わかっているよ。君がそんなにいうのなら、ともかくここから出してくれたまえ」

「承知しょうちしました」

機械人間はこつこつと足音を立てて、廊下ろうかの方へ姿を消した。

「戸山君、これはどうしたんだろうね。見つかったら命がないと思つて、ひやひやしていたら、あの機械人間は、ふしぎなほど、こちらに親切じゃないか」

一人の少年が、戸山君の耳にささやいた。

「そうだね。じっさいふしぎだ。機械人間はぜんぶ、X号の手下だと思つていたら……きつと、機械人間もああして考える力を持つつようになったものだから、X号に反対する仲間もそのうちにで

きて来たんだろうね」

こうでも考える以外、まったくなんとも考えようはなかったのである。

そのうちに、機械人間は、手に何か、かえんほうしやき 火焰放射器 のようなものをかかえてかえって来た。

「先生、それではこの錠じようを焼きますよ。やけどをするといけませんから、向こうのすみへ、はなれていてください」

しゅーツと音がして、機械からは、紫色の雷弧アークがとびだした。その火にあたると、がんじょうな鉄の錠も、みるみるあめのようになつて、どろどろに熔とけおちてしまったのだった。

「さあ、これで扉はあきましたから、出ていらつしやい」

サルは、おどりあがつて、檻からとびだした。

「ありがとう。機械人間君、お礼をいうよ。このとおりだ」

サルは機械人間の鉄の手をにぎって、ぽろぽろと涙をこぼした。「お礼なんか、どうだっていいんですよ。だれかに見つかるといけませんから、ちよつと細工さいくをしておきましょう。どうせばれるにはちがいありませんが、一分でも時をかせいだ方が有利ですからね」

機械人間は、檻をたたいて何か合図をした。すると空になった檻は、すっかりひとりでに動いて廊下へ出た。と思うと、廊下からは、となりの部屋にあつたはずの、サルの眠っている檻が、ひとりではいつて来たのである。

「こうしておけば、しばらくは先生がここから逃げだしたこともごまかせるでしょう。X号は、先生がいつのまにか、サルに退化^{たいか}したと思つてびつくりしますよ。わつはつは」

機械人間はこういつて、からからと笑つた。なんとふしぎな機械人間ではないか。

「それでは先生、みなさん、こちらへ」

「いったい、君は^{なにもの}何者なんだね」

サルの谷博士は、まだまだこの機械人間に気は許せないという様子であつた。機械人間は、ふふとふくみ笑いをすると、サルの耳に口をよせて、何かくしゃくしゃ、ささやいた。

「えッ、君はすると……」

「しッ、先生、大きな声を出しちやいけませんよ。この建物の中では、何一つゆだんして物がいえないのですよ」

機械人間はこういつて、じッとあたりの様子をうかがっているのだった。

X号おどろく

その翌朝、X号の谷博士は、大きなあくびをしながら、自分の部屋の寝台の上で目をさました。

「ああ、いい気持ちだった。ゆうべ電気をかけておいたおかげで久しぶりによく寝たが、これでせいせいしたわい」

こんなひとりごとをいって、博士は枕^{まくら}もとのボタンを押した。

扉がひらいて、一人の機械人間が、銀の盆^{ぼん}の上に朝食をのせて

あらわれた。バタートーストにスープに、ハムエッグスに、コー

ヒーに葡萄酒^{ぶどうしゅ}、どれもふつうの量の三倍から四倍もあった。

顔も洗わず、歯もみがかずに、X号がもりもりと、朝食をたべはじめた時である。扉のかけから、いま一人の機械人間が、あわてたようにかけこんで来た。

「先生、たいへん、たいへんですよ」

「なんだ、うるさい。朝っぱらから、そんな大きな声でさわぎた

てては、朝飯あさめしがまずくなつてしまふじやないか」

X号は、眉まゆをひそめて、その機械人間を荒々あらあらしく叱しかりとばした。

「でも、先生、これは天下の一大事ですよ。あの五人の少年が、どこかへ姿を消しました」

「なんだと」

さすがにX号も顔色をかえて、スープの中へハムエッグスをぽたりと落とした。

「そればかりではありません。実験室の二つ向こうの部屋から実験室の中がうつるような、望遠装置がしかけてありました。きつとあいつらのしわざにちがいありません」

「ちくしょう」

X号は、ばりばりと歯ぎしりし、お盆をひっくりかえして、寝台の上へむつくと立ちあがった。

「さては、あのがきめら、わしの正体を見やぶったな。ゆうべ電気をかけていたところをのぞいて、それで恐ろしくなつて逃げだしたな。さあ、こうしてはおられぬわい。さつそくつかまえて、一寸^{いっすん}だめし五分^{ごぶ}だめし、なぶり殺してやらねば、こつちの気がおさまらないわ」

目を逆立^{さかだ}て、口を耳までひろげて、どなり立てるX号の姿は、まるで赤鬼のようにものすごかった。

「見張りはなにをしているんだ。この建物から夜のあいだに出は

いりすれば、かならず電波探知機で、非常警戒のベルが鳴るはずなのに、機械は故障でも起こったのか」

「いいえ、機械にも何も異状いじょうはありませんし、見張りの機械人間も、だれの姿も見うけなかったと申しております。窓も戸口も内がわから鍵がかかっていて、逃げだした形跡けいせきはどこにも残っておりません」

「よし、それではあいつらは、まだこの研究所からは逃げだしていないな。きつとわしの姿を見てこわくなって、どこかへかくれて、青くなつて、がたがた震ふるえているのにちがいあるまい。そんなスパイを生かしてかえしては、せっかくのわしの計画も水の泡あわだ。研究所の中を隅から隅まで、搜索そうさくして、あいつらの居所

を探しだせ」

X号はかんかんになって、しきりにどなりたてたのである。

まもなく、研究所の内部には、けたたましいサイレンの音が鳴りひびいた。

——ひじょうけいほう非常警報発令、非常警報発令——

研究所にやって来た五人の少年は、おそ恐るべき敵のスパイであつた。全力をあげて、ゆくえ彼等の行方をさがしだせ。万一ていこうしたならば、そくざ即座になぐり殺してさしつかえない——

このような恐ろしい命令が、ラウドスピーカーから、研究所の建物中にひびきわたった。もちろん、この研究所の中には、ほかに人間はだれもいないのであるから、この命令はこの研究所では

たらいている機械人間にあてて出されたものである。

そのうちに、機械人間Z15号から報告があつた。X号の部屋のラウドスピーカーから、このようなことばが聞こえて来たのである。

「Z16号報告。実験室から地下工場へ通ずるエレベーターの報告によりますと、ゆうべおそく、五人の子供は、地下十六階へおりましたのであります。ただしその後あがつて来た形跡はありません。報告おわり」

「さては、あいつら、わしのあとをば、つけおつたな。どうするかおぼえておれ」

X号は手をふり足をふって、部屋の中をあばれまわっていた。

そしてマイクロホンに近づくと、

「地下十六階の全員に命令。五人の少年は、ゆうべそこへおりて
いったことが判明した。おそらくまだそのままそこに残っている
ものと思われる。隅^{すみ}の隅まで調べだして、わしの前までひきずり
だせ」

このようなおそろしい命令をくだしたのである。

ところが、地下十六階からは、ぜんぜんなんの報告もなかった。

地底の闘い

「地下十六階、地下十六階、Q37号はどうしている。Q28号はどうした……」

X号はマイクロホンに向かって、どなりたてたが、地下十六階からは、ぜんぜん何も聞こえて来ない。

X号も、さすがに不安になって来たのだ。

「Z27号、おまえはいまどこにいる」

「はい、地下十二階にあります」

ラウドスピーカーから機械人間の声が聞こえた。

「地下十六階から、なんとも返事がないんだが、どうしているのか、おまえ行ってしらべてくれ。ゆうべ、五人の少年が、しのび

こんだような形跡があるが、谷博士と連絡をとられたら一大事だからな」

「はい、行つてまいります」

だがいくら待つても、Z〓号からもなんの返事もなかった。

「ええ、なんとたのみがいのないやつらだ。そんなことなら、わしが行くわ」

X号は、こうして待つてはいられなくなったのであろう。護衛の機械人間五人ばかりをひきつれて、地下十六階へおりて行つたのであつた。

ところが、これでは返事がなかったのも道理どうりである。地下十六階は、もともと一番底の階なので、倉庫があるだけで、そこで働

いている機械人間の数もすくなかったが、その機械人間が一人の
こらず、むざんな最後をとげていたのである。

といつても、人間とちがうのだから、絞められたり、刺しころ
されたり、頭を割られたりしているのではない。

かえんほうしゃき
火焰放射器

で、頭の中を焼ききられて、身動きできなくなつ

ていたのであつた。これらの機械人間は、X号のように高級の電
臓を持つているのではなく、ただ簡単な動作と会話ができるだけ
であつて、それを操縦しているのは、地上の七階にある、自動
ようせつそうち
調節装置 からであつた。この機械から特殊な電波を一つ一つ

の機械人間に送つて、この研究所に働いている千人あまりの機械
人間を、自由に動かしていたのである。

そんなものだから、こうして頭の中にある、電波の受信装置じゅしんそうちを焼ききられてしまうと、機械人間は、鉄屑てつくずのかたまりのようになつて、なんの役にも立たないのである。

「おや、いったいだれが、こんないたずらをしたのだろう。これはけしからん。あの子供ら、なかなかあじなことをしおるわい」

X号は口の中で、ぼそぼそとつぶやいた。いまこの階へ、命令をうけて、やって来たばかりのZ_N号も、頭をとかされて、完全にのびてしまつていたのであつた。

「おまえらはさつそく、ここをくまなく捜査して、この下手人げしゆにんをさがしだせ。しかし、ゆだんはするな。ゆだんをすると、Z_N号みたいなことになるぞ。まだ犯人は遠くへは行かぬはずだ」

X号は大声に叫んだ。

さて機械人間は大急ぎで四方へ散って、血まなこであちらこちを探しまわったが、この時には、この階には、人間はおろか、機械人間の影さえ見あたらなかったのである。

「先生、もうどこにもなんにも見つかりません。きつと上へ逃げたんでしよう」

一人の機械人間が帰って来て報告した。

「いや、そんなはずはないよ。エレベーターも、階段も、機械人間以外にはぜったいにあがりおりしたものは無いといっている。まさか、消えてなくなるわけではないか」

一人の機械人間が、ふんがいたようにことばをかえした。

「おかしいな。この階で鍵のかかっている所はないか」

「サルの部屋に鍵がかかっている、その鍵がどうしたのか見えません」

「ははあ、分かった。あいつらはその部屋へ逃げこんで、中から鍵をかけおったな。みんなこの扉を叩きこわせ」

「はい」

二三人の機械人間は、扉に体あたりをしていたが、さすがの機械人間の怪力かいりきにも、この厚い鉄の扉は、びくともしなかった。

「相手は手ごわいぞ。火焰放射器を持っているらしいから、よし、この部屋の通気孔つうきこうから、毒ガスを注ぎこめ」

X号はいまは、かんかんに怒っていた。一人の機械人間は、さ

つそくその準備に飛びだしたが、その時X号は、ふと思いたったことがあった。

「さてはあの子供らめ、谷博士としめしあわしてのしわざだな。いよいよ博士も生かしておけんぞ」

X号は、あの谷博士のとじこめられていた部屋へとびこんだのである。

サルは語らず

「いや、なんだ、まだ博士はどこへも逃げてはいないじゃないか」
さすがの超人X号も、まだ博士とサルの入れかえには気がつか
なかつたのである。

「やい、谷博士。きさまはよくも、あの小わっぱどもとしめしあ
わせて、このおれに手むかおうとたくらんだな。もうこのままに
はしておけんぞ。八つざきにしてやるから、かくごしろ」

ところが、サルはそのことばの意味も分からないように、鉄棒
をゆすぶってキヤーツと叫んでいただけである。

「そんな手で、わしをだまそうとしたって、ききめはないぞ。さ
あ、小僧たちに何をおしえた」

「キヤーツ、ウォーツ」

あいかわらず、サルは返事をしないのだった。

「いわないなら、いわんでもいい。いま聞いてやるからそう思え」

X号は、壁にかかつてあるレシーバーを耳にあて、壁のボタンを押した。この檻全体が一つの のうはじゆしんき 脳波受信機 になっていて、中に

いる谷博士の考えていることは、ちゃんとこのレシーバーから聞こえて来るのである。ところがその時は、キャーツという叫びと、ズーズーという ざっおん 雑音がはいるだけで、かんじんの博士の考えは、何一つX号に分からなかった。

「はてな。こんなはずはないが。どうしたのかな。機械の故障かな。それとも博士がいつのまにか、ほんとうのサルに退化したんかしら」

さすがのX号も、この時は、思わず首をひねったのである。

その時、うしろの廊下から、一人の機械人間があわててとびこんで来た。

「毒ガスちゆうにゆう注 入 終りました」

「よし、それではすぐに圧縮あつしゆくくうき空気を吹きこんで、毒ガスを追
いだせ」

「はい」

消毒作業はまもなく終った。

「それでは火焰放射器で、この扉を焼ききれ」

「はい」

一人の機械人間が、火焰放射器を扉にむけ、またたくまに、錠

はとけて焼けおち、扉はガタンとひらいたが、中には五人の少年とサルが毒ガスにやられて、倒れていると思いのほか、残っているのはからの檻だけ——中には何もはいつていなかった。

「しまった。まんまと小僧めと博士にしてやられたわい。さては博士はサルと入れかわって、となりの部屋から逃げだしたと見える。だが、どうしてこの階から上へ逃げだしたろう」

X号はがくがくからだをふるわせて、こうふん興奮しきつていたのである。

ところが、X号のおどろきは、まだまだそれではすまなかった。廊下いっぱいに、ラウドスピーカーから、大きな声がひびきわたった。

「非常警報、非常警報。」

ただいま機械人間操縦室に、火焰放射器を持ったあやしい機械人間が七名侵入、目下げきせんちゆう激戦中、おうえん応援たのむ。応援たのむ。オー、ウワアーツ」

けたたましい悲鳴ひめいとともに、その放送はばたりとたえてしまったのである。

さすがのX号も、こんどというこんどは恐ろしさにたまりかねた。あわててあたりを見まわすと、まわりにいた機械人間は、一人のこらずばかりと動かなくなってしまったのである。

さては怪機械人間の一味が、機械人間操縦室を占領したのだ。そうして機械を停止して、機械人間へ送る電波を切ったのだろう。

だが事はそれだけではすみそうにもない。万^{まんいち}一彼らが、別の電波を送りはじめたら、機械人間はまた動きだして、自分へとびかかって来ないともかぎらないのだ。

X号は血まなこになって、エレベーターへとびこんだ。

「地上二十四階へ」

エレベーターは矢のように、地下十六階から、この研究所の最上階、二十四階へ飛びあがっていった。

ロボットの 機械人間の正体

「やれやれ、これでやっと一仕事かたづいたわい」

機械人間操縦室を占領した、怪機械人間の一隊は、さすがにほつとした様子であつた。

部屋の中には、五六人の機械人間が、火焰放射器でやられてひっくりかえっており、壁にはめこまれた、数千のダイアルの前では、ちゃんと人間の形をした、人造人間が、うつぶせになつて倒れていた。

「先生、これでもうこつちのものですな。機械人間さえやつつけてしまえば、X号の一人ぐらい、恐るることはありませんよ」

その声は、どうやら戸山君らしかった。

「いやいや、まだまだゆだんは禁物だ。X号は、このうえ何を考えだすか、知れないのだから、なんとかして、あいつをこつぱみじんに粉砕^{ふんさい}してしまわないと、どうしても安心はできないよ」その声は、たしかに谷博士である。

「ではどうして、あの電^{でん}臓^{ぞう}をたたきつぶすのです」別の機械人間がたずねた。

「あいつを作り出したのは、ぼくとしても、一生一代の失策だったよ。やはり人間というものは、自分の力の限界をさとるべきだった。生命を作り出すということは、神さまだけのなすことで、人間の力でくわだてることではないんだ。それをやろうと思ったのが、ぼくがこうして苦しむもとなったのだ……」

いや、今さらそんなことをいつている場合じゃない。X号の電臓は、三千万ボルトの高圧電流で生命を受けたのだから、ちよつとやそつとの方法では、殺すことはできない。ここにいたような、ふつうの電臓なら、実験室の百万ボルトぐらいで動きだした、下等な電臓だから、火焰放射器でのびてしまうけれど、あいつはそんなことではとうていだめだ。たった一つのこされた方法は……」

「それはいったいどうするのです」

「恐ろしい方法だが、いまここではいえない。それよりもまず、一刻も早く、外部に連絡をとろう。山形君、短波放送で、警察に連絡をしてくれたまえ」

「はい」

一人の機械人間が答えて、短波放送機に近づいた。

山形——といえば、どこかで聞いたような名ではないか。そう
だ。X号によつて、娘のからだの中へとじこめられた、山形警部
が、あの地下室へあらわれた、怪機械人間の正体だったのである。
彼は、自分の体はずかしいので、役所にも出ず、自分の家へ
ひきこもったきりだったが、何度もとのからだにかえしてくれと
たのんでも一向にがちがあかず、そのうちに博士がふしぎなこと
ばかりやりだしたので、いよいよ博士の正体に恐ろしい疑いをい
だき、一人の機械人間をばらばらに分解して、その中の機械をと
りだし、自分がその中はいって、機械人間のように見せかけ、
この研究所の中へはいりこんで、内部の様子をさぐっていたので

ある。谷博士や少年たちが、地下十六階から脱^{だつしゅつ}出する時も、やはり倉庫にはいつていた、予備の機械人間を分解し、その中にはいつて逃げだしたのだった。それだから、階段やエレベーターにも怪しまれず、ほかの機械人間にも気づかれずに、ここまでやって来ることができたのである。

——谷博士は、まづかなにせ者、X号が化けていたことがわかった。山形警部は、戸山少年たち五名と協力し、ほんものの谷博士を救いだして、研究所の中心部を占領し、機械人間を活動停止させた。即刻^{そつこく}警官隊を出動させて、研究所の建物全部を占領せよ。われわれは全力をあげてX号を追跡する——

こういう短波放送が、くりかえしくりかえし、電波に乗って流

れて行つた。まもなく、

——大手柄を感謝す。武装警官百五十名は、いまトラックに分乗して、三角岳に向かった。ひきつづき、X号の逮捕に努力せられたし。署長——

という返事があつたのである。

だが谷博士は、ふきげんだつた。

「逮捕など、そんな生やさしいことが、X号に向かつてやれるものか。X号を殺すか、われわれが殺されるか。食うか食われるかの争いなのに、そんなことでは、どうするんだ」

そして、博士のことばのとおり、X号の反撃は、またたくうちにじまつたのである。

X号反撃

その時、扉のそばに立っていた少年が大声で叫んだ。

「先生、たいへん、たいへんですよ。倒れていた機械人間^{ロボット}が、また動きだしました」

「そんなばかな……」

と答える博士の声も、とたんに上ずっていた。

しかし、これはけっしてうそでもなんでもなかったのである。

部屋の中に倒れている機械人間こそ、頭の受信装置を、かえんほうし 火焰放射器やきで焼ききられているので、動きだしはしなかったが、廊下にひっくりかえっていた、無傷むきずの機械人間は、むくむくと起きあがりはじめたのである。

どこからか、電波が送られはじめたのだ。ここの送波装置そうはそうちは、全部スイッチを切ってしまつてあつたのだから、どこか気のつかない所にあつた、予備の操縦装置を、X号が動かしはじめたのだらう。

先頭に立つた機械人間は、恐ろしい勢いでこちらへとびかかつて来た。さいわいに火焰放射器がものすごい火焰をふきだして、その機械人間は、ウワァーッといって倒れたが、つづいて一人、

また一人――

五人の少年は、戸口にならんで、火焰放射器で火の幕を作った。そしてどうにか、その先頭部隊だけを倒すことができたが、残りの機械人間が、全部活動をはじめたとなると、これはどんな武器を持って襲撃してくるか。多勢に無勢、はじめの奇襲きしゅうこそ成功したが、正面からの戦争となると、なんといつてもこちらは不利だといわねばならない。

「山形君、大急ぎで地階へおりてくれたまえ。そして発電装置を破壊するんだ。ぼくはそれまで、この操縦装置を動かして、向この電波を妨害ぼうがいするから――」

警部の機械人間は、壁のボタンを押して、エレベーターへ飛び

こむと、さつそく地階へおりて行つた。博士の機械人間は、操縦盤の前に坐ると、しきりにダイヤルを動かしてはじめてが――

「先生、また機械人間の二隊が、向こうにあらわれましたよ。こんどは何か手に黒い手榴弾てりゆうだんのようなものを持っています」

戸山少年の機械人間は、ついに悲鳴ひめいをあげたのである。

「その机の前に、怪力線かいりきせんの放射器がある。それを向こうに向けて、ボタンを押したまえ」

博士はけんめいに叫んだ。

向こうにあらわれた機械人間は、手に手に手榴弾のようなものを持ち、こちらへ向かつて、投げつけようとしたが、戸山少年が機械のボタンを押すやいなや、目に見えぬ怪力線が放射されたの

であろう。

機械人間の手に持っていた爆薬ばくやくは、大音響だいおんきようを立てて爆発し、機械人間の一隊は、こつぱみじんに吹きとばされたのである。「先生、愉快ゆかい、愉快ですね。これさえあればもう大丈夫。もう何人、機械人間があらわれても平気ですよ」

機械人間の破片はへんは、こちらへもものすごい勢いで飛んで来たのだから、もし博士や少年たちが、機械人間の中へはいっていないければ、その爆風や断片で、大けがをしたにちがいない。しかしさいわいに、なんの負傷もしなかったのだから、少年たちはしきりに愉快がつているのだった。

「それはいいが、困ったことになってしまったよ」

博士の声は震^{ふる}えていた。

「どうしてです」

「いまの爆風と破片で、こちらの操縦装置がこわれてしまったんだよ。もうこちらからはなんの電波も送れないんだから、機械人間の活動を妨害する方法はないんだ。いまに毒ガスでも使われたら、こちらには防ぐ方法がない。早く山形君が、発電装置をこわしてくれないかぎり、戦いはこちらの負けだよ」

博士のことばは悲壮^{ひそう}であつた。ところが、たのみに思う山形警部の機械人間は、悄^{しょうぜん}然^{ぜん}として、エレベーターからふたたび姿をあらわしたのである。小わきには、冷蔵庫にしまつてあつた、自分のもとのからだをだいていた。

「山形君、どうしたんだね」

「先生、だめなんですよ。発電室の前には、何十人という機械人間が、火焰放射器を持って立っていて、めったなことでは近づけません。こちらの戦法を、向こうに横どりされましたよ。それでこうして逃げて来たんです」

山形警部は、いまにも泣きだしそうな声であつた。

「困つたな。それで君のだいているそのからだは、いったいどうしたんだい」

「どうせ死ぬのなら、こんな女のからだではなく、せめて自分のからだで死にたいと思ひましてね。いよいよ玉^{ぎよくさい}砕ときまつたら、先生に手術してもらいたいと思ひまして……」

山形警部はついに泣き声になってしまった。

「困った、困った……」

博士の機械人間は、腕を背中にくんで、部屋の中を、こつこつと歩きまわっていた。第一次、第二次の攻撃は、どうにか撃退したものの、いつあらたな武器を持って、第三次の攻撃が始まらないともかぎらないのだ。

「よし、全員待避！」
ぜんいんたいひ

博士は一同をひきつれて、エレベーターへ乗りこんだ。

原子爆弾

まさに、危機一髪という瞬間であつた。もしあと五分おくれたら、みんなの命はなかつたろう。

X号の命令で、猛烈な毒ガスが、この階に充^{じゅうまん}満されたのだつた。

階上二十四階の、第二機械人間操縦室で、X号はにたにたと、悪魔のような笑いを浮かべていた。

「M53号報告。七階全部に、毒ガスの充満おわかりました」

「よし、第一機械人間操縦室へ侵入して、敵の屍^{したい}体を確認、収容せよ。敵は七名。機械人間の中にはいつているはずだ」

さすがに、この時には、X号にも、博士たちがどうして地下十六階を逃げだし、七階を攻撃したか、その方法がわかっていたのである。

しばらく、ぶきみな沈黙がつづいた。

「M53号報告、M53号報告——」

ふたたびラウドスピーカーからは、機械人間の声が流れだす。

「どうした。屍体は発見できたか」

「それがだめです。ここにいる機械人間は全部味方のものばかり、人間などはどこにもはいっておりません」

おどろいたような声であった。X号もまた顔色をかえて、操縦盤の前に立ちあがった。

「おかしいな。あの毒ガスの中をくぐって逃げられるわけがないが。さては、そのまえにいち早く逃げだしたな。これはまた、やつかいなことになったわい」

その時である。またラウドスピーカーからひびいて来た機械人間の声。

「B8号報告。ただいま、武装警官の一隊を満載まんさいしたトラックが、三角岳のふもとへとどいたという情報がいりました。どういたしましょう」

X号は立ちあがって、部屋の中を二三歩、歩きまわっていたが、割れるような大声を出してどなりたてた。

「よし、第一、第三、第五ロケット砲発射準備。射撃距離しやげききよりには

いったら、射撃開始！」

いよいよX号は、人類と全面的な戦闘を開始しようとしたのである。

その時だった。ラウドスピーカーから、勝ちほこったような、谷博士の声がひびいて来た。

「X号よ。X号よ。わしの声が聞こえるか」

「なんだ、きさまは谷博士だな」

「そうだ。谷だ。X号よ、おまえの野望もこれで完全に破砕され

たぞ。おまえのような、感情を持たない生物のために、人類が滅

亡させられたりしてたまるものか。おまえの命も、これでもう

おしまいだぞ」

「何を世まよいごとをぬかす。わしは無限の生命を持って生まれた。火でも水でも電気でも、わしを殺すわけにはいかないのだぞ」
 「そのとおり。だがわしはおまえの生みの親として、おまえを殺す、ただ一つの方法を知っている——」

「それは——」

「原子爆弾で、この研究所の建物といっしよに、おまえのからだをこつぱみじんに吹つとばす。おまえの生命をつかさどる電臓も、原子力の前には、何の力もないのだ」

「ちくしょう」

X号は鬼のように、頭髮を逆立てさせて、火花の息を吹きだした、

「そんなことをしてしまつたら、きさまらだつて生命はないぞ」
「もとよりそれはかくごのまえだ。X号よ。では永遠におさらばだよ」

博士の声は、ぷつりと切れた。しかしそれと同時に、その部屋の短波受信機は、次のようなことばを捕えたのだつた。

「——武装警官隊に告ぐ、武装警官隊に告ぐ。三角岳研究所はまもなく、原子爆弾によつて爆発する。三角岳から急速待避せよ。爆発は、あと十分後の予定、緊急待避せよ。緊急待避せよ——」

もちろんX号も、原子爆弾の威力いりよくは十分に知っていた。いま、地下一階から七階までの工場で製造している原子爆弾と、その材

料のウラニウムが、ぜんぶ一度に爆発したら、この研究所の建物は、あとかたもなく吹きとばされてしまうのだ。

「よし、残念だが、背に腹はかえられない。十分のあいだにここを逃げだして、再^{さいきよ}挙をはかることにしよう」

X号も、ついに最後のかくごをきめたのである。

「L19号、L19号」

X号はラウドスピーカーに向かってよびかけた。

「はい。ご用はなんですか」

「五分以内に、原子爆弾全部と、原料ウラニウムを、二十四階に運びあげろ」

「はい。承知しました」

「よし、あれが手もとにありさえすれば——」

X号は、またしても、悪魔のような恐ろしい笑いを浮かべたのだった。

大爆発

そのころ、武装警官の一隊は、五台のトラックに分乗して、氷室検事といっしょに、この三角岳のふもとに迫っていた。

いよいよ道はのぼり坂になる。一番前を走っている乗用車には、

警察署長と氷室検事がのりこんで、一生けんめいに、三角岳の上にそびえる研究所の建物をながめていた。

「すると、あの谷博士は、やつぱりにせ者だったのだね。ぼくもはじめて会った時から、どうも怪しいとにらんでいた」

というのは氷室検事。

「いや、どうも私がうかつで申しわけありませんでした。おかしいおかしいとは思っていたのですが、何しろこのあたりは、メトロポリスとかいう化物地帯で、ばけものちたい木が物をいいだしたり、石や机がひとりで動きだしたり、あまり気味がよくないので、警官もこわがって、やつて来るのを二の足ふんでいたんです。しかし山形君は、えらい手柄てがらを立てました。これで私も、鼻が高いというも

のです」

署長は、振りこぶしを鼻の前にあてて、天狗てんぐのようなまねをして見せた。その時である。突如として自動車にとりつけてある短波受信機から、あの緊急待避警報きんきゅうたいひけいほうがひびいて来たのは――署長の高い鼻も、とたんにペシャンコになつてしまった。

「ストップ、ストップ、この車をはやくとめるんだ」

「はい」

運転手も、あまりあわてて、ブレーキをかけたものだから、その次に走っていたトラックは、この車にしようとして、乗用車の方は横たおしとなり氷室検事も署長もほうぼうをすりむいて、やっとな車の中からはいだして来た。

「ばか、何をするんだ」

署長はかんかんになつて、トラックの運転手を叱りつけた。

「すみません。署長さんが、あまり急げ急げといわれましたし、それにまた、この車が思いがけなくとまりましたので」

「それはそうと、全員そつたいきやく総退却だ。何をぐずぐずしているんだ」

「ここまで来て、ひつかえすんですか」

こうみようしん

功名心こうみようしんに燃えている武装警官隊は、山形警部一人だけに手柄をされてなるものか、署長が臆病風おくびようかぜにとりつかれたら、自分たちだけでも突撃しようという意気込みであつた。

「ばか。命令だから引つかえせ。たつた今、山形警部から、短波放送で連絡があつた。あと十分もすれば、原子爆弾の爆発がおこ

って、あの研究所はこっぱみじん^に吹つとぶんだ。おまえたちは、原子爆弾の恐ろしさが分からないか」

「えッ、原子爆弾ですか。それではわれわれもまごまごしている
と、原子病にかかるわけですね」

「そうだ。そのとおり。さあ、引つかえそう」

その時である。道の三百メートルばかり向こうで、ぱーツと物
すごい土煙^{つちけむり}があがった。

「さあ、ピカドンだぞ」

検事も、署長も、警官隊も、あわてて道のそばの谷そこへ逃げ
込んだ。

「どうも君、へんだよ。いまのは原子爆弾ではなさそうだぜ。ま

だ研究所の建物は、あのとおり、しっかりとっているじゃないか」

そうがんきよう

双眼鏡で、おそろおそろ研究所の方を見まもっていた検事

が、そばの署長にささやいた。

「そういえば、なるほどそのとおりですね。どうしたんだろう」

これがロケット砲弾の砲撃だった。署長のことばが終らぬうちに、第二弾がとんで来て、乗用車もトラックも、こつぱみじんに吹きとばされた。さいわいに、警官隊はみな車をとびおりて、穴の中や谷^{たにそこ}底にかくれていたので、人間の負傷はなかったが、もうこうなつては一行も進退きわまつてしまったのである。

砲撃はますますはげしくなりはじめた。ところが、あまり^{ねら}狙い

が正確なので、かえつて命には別^{べつじよう}条^{じょう}がなかったのである。

その時、研究所の屋上からは、ものすごい閃光^{せんこう}とともに、緑色の流^{りゅうせい}星のようなものが、まっすぐに中天高くとびあがった。

「おや、あれはなんだ」

「きつとV一号だぜ」

その瞬間、砲撃がぱたりとやんだかと思うと、大地もくずれるかと思われる大音響^{だいおんきょう}とともに、目もくらむような赤・黄・青・緑・白の五色の光りが研究所を包み、もうもうとしたきのこ形の噴煙^{ふんえん}が、建物の屋上から、大空高く巨大な翼^{つばさ}をひろげたのである。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……」

署長は、谷博士、山形警部それから勇敢な五少年の死をいたん

で、思わずお念仏ねんぶつをとなえたのだった。

うちゅうこうくうせん
宇宙航空船

ところが、谷博士も、山形警部も、五人の少年も、けっしてこの爆発で最期をとげたわけではなかった。

谷博士は、機械人間の操縦装置が破壊された時、屋上からヘリコプターによる脱出を考えたのである。

ところが、屋上へ来て見たときには博士もすっかりおどろいた。

というのは、X号がサルになった谷博士を脳波受信機でいじめながら作っていた、宇宙航空船ができあがって、そこにおかれてあったからだった。

これは、総軽金属製、世界最大の飛行機の二倍も大きく、原子力によるロケット装置で活動し、時速三千キロ、月世界はおろか、火星ぐらいまでなら往復できる、おそるべき性能を持った航空船であつた。

X号はこれによって、世界中をふつうの飛行機や、高射砲のどこかない高空から、原子爆弾で爆撃しようと計画し、すでに今日、その試験飛行にとびたつばかりで、第一の原子爆弾を東京に落とそうと、その中につみこんであつたのだつた。

入口に番をしていた機械人間を、
火焰放射器^{かえんほうしゃき}で倒すと、七人

はまんまとその中にしのびこんだ。

何しろ、三階建てのホテルぐらいは十分ある大きさだったから、山形警部や少年たちは、大分まごついたが、博士は道に迷いもせず、その操縦室にたどりついた。

「しめた。機械はすぐ動くように準備ができてあるし、原子爆弾もつみこんである。これならば、もうこちらの勝ちだ。X号もこうなったら運のつきだぞ」

博士は小おどりして喜んでいた。

「さあ、さっそく出発して、空中から研究所を爆撃しよう。まあ、なんにしても、このやつかいな、機械人間のきものはぬごうじゃ

ないか」

七人はほつとしたように、首をとり、手を取り、足をとって、機械人間ならぬ、もとのからだにかえったのである。いや、もとのからだといつても、五人の少年はともかく、博士はサルからだのままだったし、山形警部は女のからだのままだったが――

「先生、まだ手術はしてくださいませんか」

警部は、小わきにかかえている自分のもとのからだを見て、心配そうにたずねた。

「いまはそんなことをしているひまはないよ。もう少し待ちたまえ」

博士は機械をいじりながら、それどころではないというように、

いらいらした調子で答えた。

「でも、それでは、夏ですから、からだがかくさってしまいますよ」
なるほど、警部にとっては、それこそ天下の一大事である。

「それが心配だったら、冷蔵庫へ入れておきたまえ」

「この中には、冷蔵庫はあるのですか」

「もちろんだよ。この下の二階の中央のMと書いてある部屋だ」
「ああ、それでやっと安心した。では行つて来ましょう」

山形警部は、あぶら汗を流しながら、自分のからだを背負つて、

えつちらおつちら歩きだした。こういう危急ききゆうそんぼう存亡の時でなか

つたら、それは吹きだしたくなるような、珍ちんみょう妙な光景であつ

たろう。何しろ、女学生みたいな若い娘が大の男の裸のからだを

背負って歩いているのだし、この精妙な操縦装置の前に坐つて、機械をいじっているのがサルなのだから――

「よし、機械の調子はしごく良^{りようこう}好だ。それではだまつて爆撃するの^{ひきよう}も卑怯だから、X号に最後の宣^{せんこく}告をくだしてやろう」

博士はマイクロホンに向かつて、あの宣告を行つたのである。

「さあ、出発だ」

博士は始動装置^{しどうそうち}のボタンを押した。ところが、機械の調子が少しへんなのか、航空船はなかなか飛びあがろうとはしなかった。

「おや、どうしたんだろう」

博士もさすがにあわてていた。あちらを直し、こちらをいじつて、どうやら故障の原因はのみこめたようであつたが、いざ出発

となるまでには、七八分の時間がかかった。

「では出発」

博士はふたたびボタンを押した。それとともにこの三百トンのロケット航空船は、流星のように中天へ舞いあがったのだった。

X号の行方は

宇宙航空船は電光のように大空を横切つて、まっすぐに上へあがつて行く。博士の目の前のテレビジョン装置には、研究所や三

角岳の建物が豆粒まめつぶのように小さくうつたが、それもたちまち見えなくなつて、関東平野がまるで地図のように、浮かびあがつて来たのだつた。

「先生、ものすごいスピードですね」

「ああ、あれが富士山ですか」

少年たちは、今までの命がけの冒険も忘れて、大陽気に、まるで遠足にでも行ったようにはしやぎ立てていた。

ところが航空船は、だんだん速力を落とすし、しまいにはぴつたりととまってしまった。

「先生、どうしたんですか」

「とまつては、つらくしやしませんか」

少年たちはとたんに顔色をかえたが、博士は一向に平気だった。「大丈夫だよ。速力ならいくらでも出せるが、いまは重力による落下速度とつりあったスピードを出しているから、あがりもしないし、落ちもしないんだよ。これから少し研究所の方へひつかえして、爆撃にうつるとしようか」

高度計の針はその時、二万五千メートルを示していた。しかし内部は完全に暖房されているから寒くもないし、酸素が十分に供給されているから、呼吸もちつとも困難ではないし、高速で飛行する時、機体に生ずる大気とのまさつ熱も、完全に冷^{れいきやく}却^くされていた。

一万、九千、八千、六千、四千、三千、二千五百、二千。

高度計の針はぐんぐんとくだりはじめ、ふたたびテレビジョンのスクリーンの上には、三角岳と研究所の建物がうつりはじめた。

「先生、千五百メートルですよ」

「よし、では原子爆弾を投下しよう」

博士は、右手のハンドルを廻した。

一秒……二秒……三秒……

息づまるような時間がすぎたと思うと、研究所の建物は大爆発をおこし、むくむくとした爆^{ばく}煙^{えん}が、三角岳をおおいかくした。

「ばんざい、これで先生、ばんざいですね」

六千メートルまで高度をあげて、この航空船はふたたび停止していたが、その瞬間、がーんというような動揺が、この高空まで

伝わって来たのだった。

「ふしぎだ。こんなはずはないが……」

博士はしきりにつぶやいていた。

「先生、どうしたんです」

戸山少年は、なんだか心配になって来たのだった。

「思ったより、爆発の規模きぼが小さいんだ。すくなくとも原子爆弾

は二十個以上は完成されてあったのだし、原料ウラニウムも、一トンはおいてあったはずだから、それが次から次へと爆発すれば、三角岳がぜんぶ吹つとぶくらいの大爆発を起こしていいはずなのに、あのぐらゐの爆煙ですむはずはない。それに爆発は、たしかに一度だけだった……」

そういえば、たしかにそのとおりである。何かふしぎな不安が、少年たちの心にも、しだいに浮かびあがって来た。

その時である。どこからともなく、あの恐ろしいX号の声が、みんなの耳にひびいて来たではないか。

「谷博士、谷博士——」

博士の手は、ぶるぶると震^{ふる}えていた。

「おまえはだれだ。何者だ——」

「きさまが殺したとばかり思っていたX号だよ。おれの力が分かったか。おれは無限の生命力を持っている。原子爆弾の爆発ぐらいでは、おれのからだはびくともしないぞ」

「それではまだ、おまえは死んでいないのか」

「あたりまえだ。これからきさまにこの復讐ふくしゅうをしないうちは、死んだりなどしてたまるものか。おれが全精力をかたむけて作りあげた研究所をこわされ、おれの計画のじやまをされたうえは、きさまたちは、生かして地上へは帰さないからかくごしろ」

X号は火のように、怒りいかくるつていたのである。博士もさすがにあわてていた。

「これはいけない。さっそくどこかへ着陸して、X号の行方をつきとめることにしよう」

博士にもX号の行方は分からなかったのだ。X号の声は、ラジオのマイクロホンから聞こえて来たのだし、あのような原子爆弾の大爆発の中でも、ゆうゆうと生きのびておられるようなX号の

ことである。どんなことをやりだすか知れない、と人々は考えたのである。

だが高度をさげて、地上へ近づこうとする博士の努力も、いまはまったく効果がなかった。

高度計の針は、ふたたびぐんぐんと廻りはじめた。

七千、八千、九千、一万、一万五千……

「これはいったいどうしたことだ」

博士も機械を操縦する手をやめて、しばらく呆然^{ぼうぜん}としてしまったのだった。

「それ見たことか。うわあはっは、わっはっは……」

X号の高笑いが、あてもなくこの成層^{せいそうけん}圏を飛びつづける、宇

宇宙航空船の中の人々の耳をおしつぶすようにひびきわたったのであつた。

迷えるロケット

宇宙航空船は、いま、まるで迷ってしまったように、大空を矢のように走りつづけている。

高度はすでに、二万メートルをこえた。このままでは、地球の引^{いんりよくけん}力^{だつ}圏を脱して、月の世界へ飛んで行かないとも保証はでき

ない。

操縦装置は、いまや全然博士の手におえず、この航空船の行手を知っているものは、ただ超人間X号だけだった。

「だめだ。もうぼくにはどうすることもできない。諸君もいよいよかくごをきめてくれたまえ——」

博士があきらめたように、目をとじた時である。操縦室の扉をひらいて、山形警部がとびこんで来た。

「先生、先生、たいへんです。たいへんなことが起りましたよ」
「これ以上、たいへんなことが起こるもんか」

博士の答えはぶつきらぼうだったが、警部はつかつかと博士のそばに歩みよると、その耳に口をよせて、恐ろしいことばをささ

やいた。

「先生、X号がこの飛行機の中にしのびこんでいますよ」

「えッ、なんだって、それはほんとうかい。どうしてそんなことが分かった——」

博士は警部の腕をとらえて、はげしくゆすぶった。

「いま、冷蔵庫へ、私のからだを運びこんで出て来たとき、廊下の端^{はし}を曲った男があつたんです。それがなんと——先生にそっくり、あのX号にちがいないんですよ」

「そしてその男はどこへ行つた」

「気がつかないように、あとを追いかけてましたが、どこにも見えません。X号の恐ろしさはよく私も知っていますから、一人であ

ぶないことをするよりは、こう思つて、先生に報告をしに歸つて来たんです」

「そうか。よくやつてくれた。それならばまだいくらか望みはあるぞ……」

博士はしきりに考えこんでいたのだつた。

「分かつた。きつとそれにちがいない。X号は原子爆弾とウラムの原料を持つて、この飛行機に乗りこんだんだ。それだから、原子爆弾を投下しても、あの程度の爆発しか起こらなかったんだ」

博士はひざを叩いて叫んだ。

「でも、いつのまにそんな離れわざをやつたんでしよう」

戸山少年が、ふしぎそうにたずねた。

「あの放送をしてから、この航空船が飛びだすまでには、五六分の時間があつたろう。そのあいだに、きつとX号はこの冒険をやつてのけたのだよ」

「それではいったいどうすればよいのです」

「X号を倒して、機械の調子を直し、また地上へ帰りつくのだ。きつとどこかでX号が機械の調子を狂わせているのにちがいないのだから、X号を倒しさえすれば、またこの航空船は、思うとおりに動くようになるよ」

だがそのX号を倒すには、いったいどうすればよいのだろう。

あの電脳は火にも水にも電撃でんげきにも、どのような刺戟しげきにも、たえ

るはず——それを破壊するには、原子力によるほかはないと、博

士もはつきりいつていたではないか。この中で原子爆弾が使えないのは、きまりきったことだ。とすれば、どうしてこの超人間に對抗するのか――

博士はその時とつぜん口をひらいていいだした。

「その壁のボタンを一つ一つおして見てくれないか」

左手の壁には、小さなスクリーンがあつて、その下には五六十個のボタンがついていたのである。戸山少年がためしに、その一つ、二つという番号のボタンをおしてみると、スクリーンの上には、設備のよく行きとどいた、手術室の光景がうつしだされた。

「先生、これはなんですか」

「テレビジョンだよ。この航空船の各部屋には、テレビジョンの

送信装置がしかけてあって、どの部屋でいまどんなことが起こっているか、すぐこの操縦室に分かるようになっていんだ。それでX号の場所を探してごらん」

少年たちは次から次へとボタンをおした。そして23というボタンをおしたときである。何か複雑な機械の前に坐りこんで、一生けんめいに、ダイヤルを廻しているX号の姿が、スクリーンの上にありありとうつしだされたのであった。

「先生、先生、いましたよ。X号の姿がみえました。23という番号のついた部屋です」

戸山少年は、必死になって叫んでいた。

「ああそうか。やっぱりあそこにおったのか——」

博士はほっとため息をついた。

「いったいなんの部屋なんです」

「第二操縦室だよ。万一、この操縦室がだめになったとき、その部屋から操縦ができるように設計しておいたのだが、二カ所で思い通りに機械を動かしては、このロケットも、変になるのもあたりまえだよ」

「それはどうすればよいでしょう」

「ぼくはここで機械を守っているから、君たちは火焰放射器でX号を攻撃してくれたまえ」

「でもX号は、火焰放射器には抵抗できるのでしょう」

「いや、電臓は殺すことはできないが、皮膚にやけどをさせるこ

とはできるのだから、X号もある程度は、力を失うことになる。そのあいだに、向こうの操縦装置を破壊して、このロケットを、思うように動かし、負傷させたX号を、この航空船の中にはいつている小型ロケット機に乗せて発射し、それを原子ロケット砲で粉砕するんだ」
ふんさい

なるほど、それはじつにどうどうたる計画だった。だがX号ともあろうものが、おめおめとその計画にひっかかってくるであろうか。

X号あらわる

だが博士は、大きな声でこのようなことをいいながら、その手は鉛筆をにぎって、このようなことばを紙の上に書きしるしていたのである。

——今の話の内容は、ぜんぶX号に知れたものと思わなければならない。だから諸君がこの部屋を出たら、きっとX号は姿をかくすか、わしをおそつてくると思う。だからとりあえず、第二操縦室を占領して、3というボタンをおせ。そうすれば、この部屋でどういふことがおこっているか、向こうのスクリーンにうつるから、それによって、十分注意するように——

この紙きれにうなずいて、山形警部は、五人の少年といっしょに操縦室を出た。火焰放射器を手に、足音をしのばせ、決死のかくごで第二操縦室へ――

ところがその時すでに、X号はどこかへ姿をかくしていたのである。

「やはり、先生のいったとおりだ。X号はどこにもいないよ」

「ほんとうだね。あの紙きれに書いてあったとおり、もとの操縦室をテレビジョンにうつして見ようじゃないか」

だが、自らがいままでおった、第一操縦室の光景が、テレビジョンのスクリーンにうつしだされた時、少年たちも山形警部もおどろいた。

谷博士のなりをしたX号が、サルのかっこうをした谷博士におどりかかろうとしているではないか。

博士が手ににぎっていた、火焰放射器をただの一撃でたたきおとすと、X号は大手をひろげて博士の上へとびかかった。

しばらくは上になり下になり、人とサル、いや博士とX号の必死の争い。あらそ

六人はあまりのおそろしさに、助けにとびだすことさえ忘れて、しばらくは、そこにだまって立ちすくんでしまった。

そのうちに勝負はきまった。サルはぐったりと人間の前の床の上に倒れてしまったのだ。

X号はにたにたと、悪鬼あつきの笑いを浮かべながら、博士の頭にメ

スを入れた。

「どうするんだろう」

「ちよつと待つてみよう」

六人はささやきかわして、そのありさまを見まもっていた。と思うと、X号は博士の頭の中から脳髓をつかみだし、自分の頭の中から取りだした脳髓と手ぎわよく入れかえたのである。

山形警部も、少年たちも、恐ろしさにがたがたと震えていた。

「また脳髓を入れかえたよ。こんどは博士のからだにはいつているのがほんとうの谷博士で、サルのからだにはいつたのがX号だよ」

山形警部は、そつと少年たちの耳にささやいた。

手術はまたたくまに終りをつげた。まるでりんごかなしをおきかえるように、血一滴出ないくらいであった。

X号は谷博士のからだを、床の上に横たえると、すぐに部屋からとびだしたのである。

「よし、これで向こうの計画はわかった。X号は博士だけは後の役に立てるために生かしておいて、われわれだけを殺そうとするんだ。そのために、サルの中からだにはいつて、われわれをだまそうとしているんだ。だから、もうけつしてサルのいうことには、ゆだんをしちやあいけないよ」

少年たちはぐくりとつばをのみこんで、うなずいたのである。まもなく、サルの中からだにはいったX号は、この部屋の扉をひ

らいて姿をあらわした。

さてX号はどのようなことをいいだすだろうか。第一第二の操縦室ともに、操縦者を失ったこの宇宙航空船は、自動操縦機のためによって、二万五千メートルの高空を、電光のような速力で、飛びつづけているのだった。

小型ロケット機発射

「さあ、みんなぐずぐずしてはいられないよ。X号はこの航空船

に爆弾をしかけて、小型ロケット機で逃げだしたんだ。われわれもこうしては、命がないから、一刻も早く、別の小型ロケットで、ここから脱出しよう」

サルのからだに入りこみ、谷博士だとみせかけたX号は、声まで谷博士に似せて、このようなことをいった。

「先生、それはほんとうですか」

「ほんとうだとも、うそだとも思うなら、これを見たまえ」

X号はつかつかと壁に歩みより、^{きざ}こつというボタンを押した。スクリーンには、またもや別な部屋の光景がうつしだされたが、その床には黒い爆弾のようなものがおかれてあつて、その上の時計は、こつこつと時を刻^{きざ}んでいるのだった。

「時限爆弾だよ。あと五分で爆発する」

「さあ、それはたいへんだ。先生、助けてください。みんな、早く逃げだそうじゃないか」

山形警部は、ほんとうにおどろいたようにあわてて見せたのである。

「さあ、それじゃあ、みんなこちらへ」

X号は先に立つて、部屋を出ると、階段をどたどたと一階までおりて来た。その最後部さいこうぶの部屋へはいると、X号はひざまずいて、まるい鉄のふたをひらいた。中には小さな部屋があつて、垂すいちよく直ちよくな鉄ばしごがさがつている。

「さあ、みんなこの中へはいるんだ」

X号は中を指さして命令した。

「先生、ちよつと待ってください」

山形警部は、出口の方へかけもどろうとした。

「何をする。君は氣が変になったのか。あと二分で爆弾が爆発するというのは、どこへ行くつもりだ」

X号は、目を怒らせて、警部をにらみつけた。

「いや、自分のからだか、冷蔵庫においてありますから、大急ぎであれを持って来ようと思って……」

じつは山形警部は、博士に急を知らせにかけるつもりだったが、そういえないものだから、このようなうそをついたのである。

「ばか、おまえは命が惜しくないのか。もうそんなことをして、

ぐずぐずしたりしているひまはないわ。どんなからだにはいつても、命あつての物だねではないか。ぶじに地上へかえったら、からだぐらいはまたもつのように作つてやるよ」

X号は警部を、なぐりつけかねないような気配けはいであつた。

少年たちも、さすがに弱つてしまつたのである。X号にてむかつても勝目はないし、といつてこの中に入りこんでは、みすみす死を待つばかりなのだから……

その時、戸山少年は立ちあがつて、X号のうしろの方を指さした。

「先生、それそこに、先生のからだにはいりこんだX号が……」

「なんだと……」

サルのからだにはいったX号は、谷博士がほんとうに、この場にあらわれたかと思つたのだろう。ぎよツとしたように戸口の方へふりむいた。

それが戸山少年の待ちかまえていたすきであつた。少年はX号の腰へとびつくと、足をかんでX号をひっくりかえしたのである。ふいを打たれたX号は、もんどり打つて穴の中へ落ちていった。

「それみんな、ふたをしめろ」

「それ」

六人は、おどろあがつて鉄のふたをしめ、かたくボルトでねじあげたのである。

「さあ、もしX号が出て来たら、火焰放射器で攻撃するんだ。ぼ

くはすぐ先生のところへ知らせてくる」

戸山君は、廊下をまっしぐらに、もとの操縦室へかけこむと、床に倒れていた博士のからだをだきおこし、はげしくゆすぶって叫んだのである。

「先生、先生、しっかりしてください。ぼくです。戸山ですよ……」

やがて博士はぱっちりと目をひらいた。

「ああ、戸山君か。ここはどこだね」

「先生、大丈夫だいじょうぶですか。ここは地上二万五千メートルの高空、宇宙航空船の中ですよ」

「ああ、そうだった。頭がずきずきいたんで仕方がないが、X号

はどこにいるんだ」

「一階の最後部の部屋の穴の中へ、おとしこみました」

博士は頭のいたみも忘れて、おどりがつて喜んだ。

「しめた。それでX号もこんどこそ完全に運のつきだぞ。あの下は小型ロケット機の内部なんだ。よし、あれを外部に発射してやろう。戸山君MLQと書いてあるスイッチを切ってくれ」

「こうですか」

戸山君がそのスイッチを切った瞬間だった。

機体はズシーンというはげしい反動を感じて、ぐらぐらと揺れたのである。

「先生、いまのはいったいなんですか」

「ロケットがとびだした反動だよ。前のスクリーンには何も見えないかね」

はたして博士のことばどおり、そのスクリーンの上には、うしろからものすごい白^{はくえん}煙をはきだして、青空を横切って飛んで行く、砲弾の形をしたロケットがうつったのである。

「さあ、全速力であのロケットを追いかけて、原子ロケット砲で撃^{げき}墜^{つい}しよう。わしを助けて、操縦席に坐らせてくれ。それからみんなにここへ来るようにと……」

博士は血の出るような声を、ふりしぼって叫んだ。

X号の最期さいご

山形警部と五人の少年は、喜んでこの部屋へかえつて来た。そしてX号をのせて飛びだしたロケットを追って、大わらわの活動がはじまったのである。

一人は電波探知機でんぱたんちきでロケットの位置を測定、二人は頭のきずのいたみにうなっている博士を助けてこの航空船の操縦、三人は原子ロケット砲の射撃準備と、攻撃の体制たいせいはまったく完了かんりようした。

——敵のロケットは、いま高度六千、サハラ沙漠さばくの上空を東進

中、速度千七百キロ——

一人の少年が、電波探知機を見つめて報告した。

「どうしたのか。大分敵は速度がにぶったな。よし、全速力にて追撃せよ——」

博士は頭を両手でおさえながら命令した。

X号をのせたロケットは、この航空船をはなれるが早いか、方向をかえて、こちらと反対の方向に全速力で逃げだしたので、大分距離も離れたが、何しろこちらの方が早いので、その距離はぐんぐんと接近して来た。

——敵との距離はあと六百キロ、敵の高度は、地上三百メートルにさがっています。——

またも電波探知機の方から報告があった。

「おかしいな。こんなに高度をさげてどうするのだろう。墜落ついらくしているのだろうか」

博士も一時は首をひねったが、やがてある恐ろしいおそことに気がついた様子だった。

「これはいけない。ひよつとしたら、X号は、ロケットを着陸させて、飛びおりるつもりかも知れないぞ、全速力で追撃せよ」

宇宙航空船はいま、三千キロの全速力を出して、電光のようにサハラ沙漠の上空を飛びつづける。

前のロケットとの間の距離は、見るみるうちに接近して来た。

——敵との距離、あと三千メートル、——

またもや探知機からの報告。

「原子ロケット砲、射撃準備」

博士はマイクロホンで命令をくだした。一機のロケット砲室では、山形警部が一心不乱いっしんふらんに、目の前のスクリーンをのぞいている。その上には、X号をのせたロケットの像がうつりはじめた。

警部は必死に照準しょうじゆんをあわせた。スクリーンの上に描えがかれてあ

る、縦横たてよこじゆうもんじ十文字の細い線の交点に、敵のロケットが乗った時、

発射装置のボタンを押せばいいのである。いまや、その瞬間があとずれた。

「発射！」

宇宙航空船の巨体はまたもや、大きくがくーんとゆれた。白い

煙をうしろに残した六本の原子ロケット砲弾は、ほとんど静止している敵のロケットを追って、青空を目にもとまらぬ速さで走りつづけて行く。

「全速上昇！」

宇宙航空船はものすごい勢いで上昇しはじめた。

四千……五千……六千……七千……

この時、眼下では、ものすごい大閃光^{だいせんこう}とともに、原子弾の爆発が起こったのだ。熱帯の太陽にやきつくされたサハラ沙漠の上空には、五色の原子雲が渦まき^{うずまき}、その雲はぐんぐんと伸びあがって、この宇宙航空船のあたりまで追って来たのである。

「さあ、これでX号も完全に死滅^{しめつ}させることができたよ。わしの

手で作ったものにはちがいないが、なんと恐ろしいやつだろう。感情も道徳もともなわない智力というものは、発達すればするほど、人類に害を及ぼすものなのだ」

博士は感慨深かんがいぶかそうに口ずさんだのである。

このようにして、X号はサハラ沙漠で最期をとげ、その最期の地の上空にたなびく原子雲のまわりを、二三度旋せん回かいした宇宙航空船は、ふたたび機首をめぐらして、日本の国、三角岳さんかくだけへ向かったのだった。

だいだんえん
大団円

三角岳の研究所は、あとかたもないまでに破壊されていた。

さいわいにこのあたりが、メトロポリスになってから、気味わるがった人々は、いつのまにか、ここを捨てて、ほかに移住^{いじゆう}してしまっていたので、人間の負傷は、ぜんぜんといってよいくらいなかったのである。

武装警官隊も、爆^{ばく}心^{しん}からは大分離れたところにおったため、二三人が軽いやけどを負ったぐらいですんだ。

この建物が破壊されたことは、かえってよかったともいえるのである。なぜかというと、このために、物をいう木や、ひとりで

動く道具や、あのぶきみな機械人間や、そういったものは皆姿を消してしまつて、三角岳はまたもとの自然のままの姿にかえつたのだから。そしてまた、X号の作りだした、防ぎようのない伝でんせ染さん病びょうの細菌さいきんや、どんな防毒装置でも透過とうかする毒ガスや、そのほかいろいろの最新兵器も、みな死滅し分解され破壊されて、人類を滅亡めつぼうさせる役に立つこともなかったのだ。

三角岳へこの宇宙航空船がかえりついた時、博士は社会からはげしい非難をうけ、警察のとりしらべも受けたのだが、X号の恐ろしい計画について、山形警部がいちいち証言をおこなつたので、かえつて博士たちの努力が認められ、なんの処罰しよばつも受けずにすんだ。

頭のきずが回復した時、博士の第一にした仕事は、山形警部をもとのからだにかえしてやったことだったのは、いうまでもない。博士のかたくなな性格は、それからまったく生まれかわったようになつてしまった。本心からおだやかな、人好きのする円満な性格となり、博士は自分の研究の結果を、すべて広く社会に公開し、社会と人類の文化の向上をはかつたのである。

それはX号のように、下^{したところ}心あるうわべだけの行為ではなく、本心から出た愛情のこもった行為であつた。

宇宙航空船につまれてあつた、莫^{ばくだい}大な量のウラニウムは、すべて原子力工場のために使用され、原子爆弾は、あのサハラ沙漠の爆発を最後として、永久に使用されずに処分されてしまったの

である。

ただ一つ、博士がどうしても公開しなかった研究の秘密——それは人造生物をつくる方法だけだった。

「生命というものは、神だけが生みだすべきものである。人間の手でそれを作りだそうとすることは、かえって人類の破滅をまねくにすぎない。自分がこのような恐ろしい目にあつたのも、人間の力の限度を知らないから生じた誤り^{あやま}だった」

博士は口ぐせのように、こうくりかえしていたのである。

戸山君はじめ五人の少年は、博士の下で研究をつづけ、日本でも有数の大科学者となった。しかし、戸山君たちの心の中には、いつまでもいつまでも、このような恐ろしい疑問が、たえず残っ

ていたのである。

「あのX号は、あの時サハラ沙漠の上で、ほんとうに死んでしまったのだろうか。ひよつとしたら、あのまえにロケットから飛びおりて、どこかにかくれ、まだ生きのこつて再^{さいきよ}挙の日を待つているのではないだろうか」

戸山君は、一度博士に向かつて、その疑^{うたが}いを口に出して話したことがあった。その時谷博士は、おだやかな微笑を浮かべていたのである。

「戸山君。あるいはそうかも知れない。ぼくにしても、そうでないとは、いいきれないのだ。だがもしX号が、かりにどこかに生きておつたにしても、感情もない、愛も道徳もない生物は、いく

ら智力がすぐれていても、世界は支配できないよ。そうした生物は、けつきよく自分の智力の前に倒れるのだ。X号のことなどはもう気にかけずに、人類の智力を、一歩でも向上させるために、死ぬまで働きつづけようじゃないか」

これが、この悟り^{さと}をひらいた大科学者、谷博士の最後に達した、すみわたった心であつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第12巻 超人間X号」三一書房

1990（平成2）年8月15日第1版第1刷発行

初出：「冒険クラブ」

1948（昭和23）年8月～1949（昭和24）年5月号

同誌の休刊により中断。

「超人間X号」光文社

1949（昭和24）年12月刊行の上記単行本で完結。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年12月29日公開

2011年10月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

超人間X号

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>